

古代法の翻訳と解釈(4) : ハンムラピ法典の石柱に刻まれた楔形文字全文の原典その翻訳および解釈の方法について

著者名(日)	佐藤 信夫
雑誌名	山梨学院大学法学論集
巻	50
ページ	402-187
発行年	2003-09-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1188/00000897/

古代法の翻訳と解釈 IV

ハンムラビ法典の石柱に刻まれた楔形文字全文の原典
その翻訳および解釈の方法について

Comment traduire et comprendre “le Droit ancien”
(i.e.)-L’interprétation du code cunéiforme de
Hammurapi IV

〔第230条～第282条と後文〕

佐 藤 信 夫

目次

法の象徴図像「王笏」(山梨学院大学『法学論集』第40号
1998年6月10日 p.220～p.304に既述)

まえがき(これ以降第66条まで『法学論集』第47号に掲載)

ハンムラビ法典石柱原文「楔形文字」の読み方

最古の粘土板楔形文字による法律辞典

ハンムラビ法典前文

ハンムラビ法典楔形文字各条文の邦訳と解釈

第I章 訴訟法と訴訟手続法、偽証の罪(第1条～第5条)

第1条 誣告罪、同害報復 *Lēx talionis*

殺人罪の原告がそれを立証できなかったら(誣告罪として)死刑と
なる

第2条 河神の処罰、正義と法(神罰)

「魔術を使ったかど」での告発は、神明裁判で決着がはかられる

第3条 脅迫による偽証罪

偽証罪の処置、原告が告訴した人の生死に関わる訴訟で立証できないような場合は、その（偽証をした）証人が死罪となる

第4条 訴訟と同額の賠償、収賄の禁止

偽証が穀類と金銭に関わる場合の措置は、その訴訟額の決定が判決によって決定される

第5条 裁判官の責務、判決変更の賠償額

以前の訴訟判決を変更したような場合に、判事は（その民事訴訟の財物に関わる）12倍の賠償額を支払う

第II章 窃盗罪、所有権の侵犯、処罰方法（第6条～第13条）

第6条 窃盗と赃物牙保罪

神殿と宮廷からの窃盗はその財物を受け取った者も死罪となる

第7条 契約と供託物、（準窃盗罪）

証人なしの契約または窃盗とみなされるような場合は死罪となる

第8条 盗品が神と宮廷の品物の場合に対する賠償額

盗んだものが神（に関わるもの）か宮廷のものだと30倍の賠償、ムシュケーヌムのものだと10倍の損害賠償を支払わなければならない

第9条 喪失物、証抛裁判

喪失物を他人の手中に発見した時に、証人を立てた場合においては、裁判官が考慮してその判決と措置をどうするかが決定される

第10条 赃物の取り戻し（準窃盗罪物の悪意牙保者は死罪）

前条で証人を伴う場合、裁判所で売買の立証が可否による罰則の規定

第11条 原告の責任、遺失物回復

（前2ヶ条で）喪失者が所有していた事実を、証人によって立証できない場合には、紛争を起こした責任者として、原告は死罪となる

第12条 赃物牙保罪

赃物故売人が死亡した場合に、被告は訴訟費用の5倍を取得できる

第13条 証人の確保期間

証人を確保する期間は6ヶ月まで裁判官が訴訟の費用を指定できる

第Ⅲ章 誘拐罪と奴隷の法規（第14条～第20条）

第14条 幼児誘拐

他人の幼児を誘拐した者は死罪となる

第15条 奴隷の逃亡幫助罪

宮廷の奴隷を逃亡させたる者は死罪に処せられる

第16条 逃亡奴隷の保護（逃亡奴隷隠匿罪）

宮廷から逃亡した奴隷を保護した者も死罪に処せられる

第17条 逃亡奴隷の逮捕と謝礼金

奴隷の所有者は、逃亡した奴隷を逮捕してくれた者に対しては2シエケルの報酬を支払わなければならない

第18条 奴隷の身元確認

逮捕した奴隷は、宮殿でその身元を確認し、もとの主人に返却する

第19条 奴隷の隠匿者

一度奴隷を隠匿した者はその後告白し捕えても必ず死罪とされる

第20条 捕獲奴隷の逃亡

奴隷を捕獲した者がその奴隷に逃げられたる場合は「神への宣誓」をおこなった後に放免される

第Ⅳ章 強盗罪、強奪如何の処置（第21条～第25条）

第21条 侵入者の殺害、家宅侵入罪の処罰（自力救済）

他人の家に侵入した者はその場で殺害され道路に投げ出される

第22条 窃盗犯、強盗（追い剥ぎ）

人の財物を略奪する目的で強盗した者は死罪となる

第23条 盗難物件の申告

盗難された物件を神の前で申告し証明できればその地域の行政責任者がその損害賠償をする

第24条 強盗殺人への賠償金

強盗に殺された者への賠償は行政責任者が1マナの銀を支払う

第25条 火事場泥棒、火災時における財物の窃盗

火災の消火に來た者が、そこの家の財物を窃取したような場合に、

その火事の火中に投げ込まれる

第V章 兵士階級に関する諸規定（第26条～第41条）

第26条 憲兵・軍族と按察官の出征

憲兵・軍族や按察官が出征を命じられた場合に、その徴兵を拒否し、
または傭兵などで代理させたならば、死罪となる

第27条 出征兵士の土地返還

出征した兵士が捕虜となっている間に、その土地を使用していた者
は、兵士の帰還後にその土地を返還する義務がある

第28条 出征兵士の息子、私領相続

出征した兵士に息子がいたらその田畑の経営を継承できる

第29条 幼少の息子、不動産相続

まだ息子が幼少の時は、その田畑の3分の1は母に（扶養の経費と
して）与えられ、成人するまで継承して養育させられる

第30条 不動産の取得

兵士の土地が放置され、他の者が三年の間その田畑を耕やしたら、
その土地の所有権は、耕作した者の所有となる

第31条 短期の放置

放置した期間が一年間ならばその出征兵士に田畑は返還される

第32条 兵士の身代金

戦争で捕虜になった兵士がもとの身分になるには、兵士の身代金を
自家または都市の神殿が支払って、身受けしてもらわねばならない

第33条 指令官と長官

軍隊における指令官や長官が、国王の命令以外に、勝手に私兵を徴
兵をすることは禁止される

第34条 指令官の服務違反

兵士を虐待したり、他の仕事をさせることの禁止と部下の兵士の給
与保護などをはからなかった指令官は、死罪となる

第35条 兵士との取引

国王から兵士に与えられた家畜を取引したものはそれを没収される

第36条 憲兵・軍族の不動産売買

公的な役職者に与えられた不動産の銀（貨）での売買は禁止される

第37条 不動産売買の禁止

公職者の不動産は、例え売買されて銀（貨）が支払われていても、その取り引きは無効で、銀（貨）は没収され不動産も返還される

第38条 妻と娘への譲渡禁止

公職者の不動産は、自分の妻や娘に決して譲渡できずまた自分の負債のために売却してもならない（その取り引きは無効となる）

第39条 個人的に購入した不動産

但し、自分の妻や娘のために個人的に購入した不動産は売買できる

第40条 不動産の売買

商人や企業家は、不動産の売買が自由にできる（購入した者も同様）

第41条 公職者の不動産売買

公職者の不動産を売買するのを斡旋したり、担保に入れたりした場合の措置に関する規定と不動産所有権に関する諸規定

第Ⅵ章 農耕地と灌漑に関する規定（第42条～第66条）

第42条 不動産の賃貸借

田畑を耕作するために賃貸借した者が収穫できなかった時の賠償額

第43条 田畑賃貸借の責任

田畑を賃貸借して耕やさなかった者は、その田畑の完全の回復義務（荒れはてた田畑をもとにもどす義務）を負う

第44条 長期の開墾放棄

原野を三年間開墾する約束で、賃貸借したがそれを放棄した者に対する土地返還手続き責任と損害賠償額

第45条 洪水にあった田畑の損害

田畑を農夫に売却した後に、その田畑が洪水（アダド神の神罰）にあったならば、その田畑の損害は農夫の負担とする

第46条 田畑売買の契約

田畑を売買したがその代金を支払っていなかった場合の収穫の分配

第47条 田畑の維持管理

売買の後、田畑の維持管理を他人にまかせた場合の分配措置

第48条 債務者の支払猶予

洪水（アダド神の神罰または津波）にあった田畑を有していて、負債のある者は、その年の支払いと利息が猶予される

第49条 商人からの賃借

商人より金銭を借りて、田畑を入手して穀物やゴマを植えたならば、その収穫と諸費用は商人の所得となる

第50条 借財と利息

前条文で、穀物やゴマの収穫高は、その借用した銀（貨）と利息分に関してだけ商人に返還される

第51条 法令換算表による返済

返済する銀（貨）がない時は、借用額と利息分だけ、国王の「法令換算表」の額面で返済できる

第52条 契約の変更不可

第49条以降に規定された田畑で、穀物もゴマも収穫できなかった時は、その契約を全く変更できないこととする

第53条 堤の修復不全と賠償

土手の堤を堅固にしておかず、他人の耕作地に（水害等により）災害を与えたらば、その穀物を弁償しなければならない

第54条 穀物の損害賠償分配

上記で穀物の弁償ができなかった場合には、農夫たちはその売り上げ金（その財貨）を穀物の損害賠償として互いに分配できる

第55条 灌漑の水門放置

灌漑の目的で水門をあけ、他人の畑を水で押し流した時の損害賠償

第56条 隣の田畑への損害賠償

自分の水門を開き、隣の田畑の供給物に害を与えた場合、10イクーについて大麦10グルの割合で（計測して）損害賠償を支払う

第57条 牧畜の責任

他人の田畑に家畜を放牧し、草を食べさせた牧人の損害賠償は、前条の倍額を（損害賠償として）支払わなければならない

第58条 家畜の侵入

（前条で）牧草を食べた家畜を、公共の広場などに侵入させた（それを目撃された）場合の牧人の責任と、その損害賠償額の支払い方法

第59条 果樹園の樹木伐採

果樹園の所有者がいない時に、その樹木を伐採したならば、半マナの罰金を（損害賠償として）支払わなければならない

第60条 果樹園の植樹

果樹園に植樹した時、五年目からその所有者と園丁師とが、平等に分割する。但し地主が収穫物の配分を先に取りることができる

第61条 造園の未完成

造園を開始したが、完成しないまま放置した場合の園丁師の取り分

第62条 畝地の造園

畝地に造園しようとして植樹しなかった場合には、隣地の田畑に準じて損害賠償を支払い、畝地は耕作可能の状態で返還する

第63条 原野の造園

（前条の規定において）田畑が原野に位置するならば、田畑の所有者に返却し、10イクーにつき10グルの損害賠償を支払う

第64条 園丁師の取り分

園の管理者は、果樹園の収穫物の3分の2を地主に納め残りの3分の1が自分の収入となる

第65条 園丁師の管理不適切

園丁師がその管理をきちんとせず、収穫高を減らすようなら、隣地の果樹園の収穫高（を参考にしてその上）で損害賠償をおこなう

第66条 （訳文の一部分のみ）

（以上は山梨学院大学『法学論集』第47号、2001年3月26日 p.98～354に既述）

第66条から第99条まで石柱下部の表面が削り取られているから省略する。他に発見された粘土板（から類推して）で、家屋や建物のある土地の所有等の規定が盛られていた、と考えられている

第七章 ^{タムカルム}委託者（商人）と^{シヤマルルム}受託者の規定（第100条～第107条）

（ここから第100条～第169条までは『法学論集』第48号に掲載済み）

第100条 商人（タムカルム）への利息

（原文が欠如）利息の支払いは、日数を計算して商人に返済する

第101条 ^{シヤマルルム}受託者の損害賠償

商人から依頼を受けた寄託者が、派遣された土地（出張先）で利益を出せなかった時の損害賠償額は、借入金の2倍額を支払う

第102条 ^{シヤマルルム}不正の受託者（行商人）

商人がその寄託者に出資金を渡す時に、相手の不正をみつけたら、出資金の返却を（即刻、直ちに）求めることができる

第103条 ^{シヤマルルム}強盗にあった受託者（行商人）

寄託者が旅行の途中で強盗にあったならば、帰国後所定的方式で「神の前で宣誓する」ことで、放免される

第104条 ^{カニーク}署名領収書の取引

商品を預り財物を取り引きしたる者（販売人）は銀（貨）の支払いとともに、署名領収書を受取る

第105条 契約文書なき取引

署名領収書なき取引きでは、銀（貨）を受け取れず、領収書なき分の計算には加えられない

第106条 寄託行為の責任

貿易・販売契約が寄託者の側の責任で破綻したことを商人^{タムカルム}が立証した時は寄託者（販売人）は商人から受けた3倍を罰金として支払う

第107条 商人側（委託者）の責任

上記の契約で、その破綻が商人側^{タムカルム}の過失で破綻したことが立証されれば、6倍までの受けた額の罰金を商人が寄託者（販売人）に支払う

第八章 居酒屋の女将・ゲシュティンナ（第108条～第111条）

第108条 酒代金の受取り

酒代金を銀（貨）で受け取ったり、詐取して高く受け取ったりした

居酒屋の女将は、河川に処罰として、その身体を投げ込まれる

第109条 居酒屋の治安維持義務

居酒屋に犯罪人が群れ集っていた時に、それを取り押え（宮殿に告知し）なかったら、居酒屋の女将は、死罪となる

第110条 修道女の飲酒禁止、違反者は火刑

修道女が居酒屋を経営したり、酒（を飲む目的で）のために居酒屋に立ち入ったりした場合は、火刑に処せられる

第111条 居酒屋での支払い

ツケで飲んだ客は、穀物の収穫時に（それまで飲んだツケの精算として）50シラの穀物を（その代金に）支払う

第Ⅸ章 債権法（債務者、抵当、留置権）（第112条～第119条）

第112条 物品の横領

他人に搬送を依頼されたものを、搬送しないで横領してしまったような場合にその依頼された物品の5倍額まで損害賠償が科せられる

第113条 債務の取立て

債権者は、無理に債務者から財物（穀物倉から穀物）を取りあげた場合には、その同じ量を返還させ、その債権者の地位も失う

第114条 債権なき差し押えに対する罰則

実際には債権がないにも関わらず、ある者が他人の家から無理に人質を取ったらば、（その人質）1人につき1/3マナの罰金を支払う

第115条 人質の死亡

（前条のような場合に）、差し押えた人質が死亡したような場合にはその人質を差し押える原因となった債権（の請求権）も消滅する

第116条 虐待による人質死亡

差し押えた人質が虐待によって死亡した時は、同害報復としてその家人の子どもも殺され、奴隸ならば3分の1マナの罰金を支払う

第117条 債務の抵当

債務者が自分の妻、息子や娘を債務の抵当として引渡したなら、三年間労働力として働かされるが、四年目には（自由人として）解放

される

第118条 奴隷の抵当処分

上記の抵当として自分の奴隷を提供したならば、それは譲渡・売却事由としては取り戻せず買い戻し期間経過後、債権者は売却できる

第119条 子供を生んだ女奴隷

債務者は（前条の例外として）自分の子供を生んだ女奴隷だけは、同額の銀（債務の額面）で取り戻せる

第 X 章 財産権（動産および信託）の規定（第120条～第126条）

第120条 穀類の貯蔵の寄託

穀物を信託した者が、貯かったことを否定した時には、それが神前で立証できたならば、2 倍の損害賠償を支払わなければならない

第121条 年間貯蔵費

穀物の貯蔵を寄託したならば、その年間貯蔵費は大麦 1 グルにつき 5 シラの穀物を（寄託料として）支払わなければならない

第122条 貴金属類の寄託方法

貴金属類等の寄託には、その寄託物をすべて証人に確認した上で、なお粘土板による契約書の作成が必要条件である

第123条 訴訟の請求権

寄託をした証人も契約書もなく、その寄託が否認されたる場合において、委託者は（寄託者が否認した時）その訴訟の請求権はない

第124条 寄託の立証責任

証人を前に寄託したが、相手が受託を否認した時には、その立証に成功すれば、寄託額面の 2 倍の損害賠償を支払わせることができる

第125条 受託者の責任

受託者は、その預った品物について盗難にあったならば、完全にそれを損害賠償するか、窃盗犯からそれを取り返さなければならない

第126条 虚偽の紛失物に関する告訴

自分の所有物が紛失していないのに紛失したと虚偽の告訴をした者は行政責任者が神前でそれを明白にし 2 倍の損害賠償を支払わせる

第 XI 章 家族法（婚姻と相続、第127条～第152条）

第127条 誑誘・誣告の罪

他人の妻女や女神官に、後ろ指をさして（侮辱して）、その挙証が立証出来ない時は、額に（誹謗・中傷を示す）刻印を打たれる

第128条 婚姻契約書の作成

アウィルム階層の者が妻を娶っても正式に婚姻契約書を作成しなかったならばその婚姻は無効（その女は妻女として認められない）となる

第129条 妻女の不貞

現行犯で妻の不貞が見つかった時は、男と共に水中に没せられるが亭主が助命すれば、国王が救えば妻とその共犯者も許される

第130条 未来の妻（乙女）の強姦

婚約はしたが、未だ父の家にいる乙女（未来の妻）を強姦したる男は現行犯で逮捕されると死刑となり、娘は無罪放免される

第131条 密通の嫌疑

妻が夫から密通の疑いをかけられても、現行犯でないならば、その妻女は「神に宣誓」した後に、（何の処罰もなく）実家に帰ることができる

第132条 密通の反証

他人の後ろ指で密通の疑いをかけられた妻女は、それが現行犯でない限り「河神の神明裁判」によって（河川に飛び込み）無罪を反証できる

第133条 留守宅の妻は再婚禁止

出征した兵士で捕虜となった者の家に、食料とする蓄えがまだある時は再婚が禁止され、違反者は溺死の処刑を受ける

第134条 再婚（または同棲）可能な条件

出征して捕虜となった者の家に、財産がない場合には、その妻女は再婚（妾奉公）することができる（他人の家に入っても無罪である）

第135条 再婚の破綻

前条の場合、元の夫（兵士）が戻ってきた時に、妻は元の夫のもと

に帰り、再婚で出来た子供達は、その実父のところに留め置かれる

第136条 逃亡夫の妻

自分から居住地を捨てた夫の妻は、誰と再婚しても良く、家出から戻ってきた夫に（決して）つれ戻されない（夫は妻を取り戻せない）

第137条 女神官妻の離婚

女神官だった妻女を離婚する場合は、持参金と不動産の一部を与え、子供の相続に関わる嫡出子の養育費を支払わなければならない

第138条 ^{うまつめ}石女の追い出し離婚

子供を生まなかった妻女を離婚するには、実家から持参した結納額の銀（貨）と持参金を払い戻した上で、離婚することができる

第139条 持参金なき女の離婚

婚姻するに際して、持参金（結納料）を持参してこなかった妻を離婚するには、1マナの銀を離婚料として支払わなければならない

第140条 ムシュケーヌム階層の離婚

離婚しようとする妻が、ムシュケーヌム階層の出身である場合には、その離婚料は、3分の1マナの銀（貨）を支払えばよい

第141条 妻の婚姻継承責任

妻が離婚しようと勝手に世帯道具をまとめたならば、その妻を追出すことも、あなたも奴隷の如く、夫の家に留めおくこともできる

第142条 妻側からの離婚

妻女から離婚を申出たる時に、その決定は家門（地区の行政）会議で調査し、夫に欠陥ある場合には、持参金を持参して実家に帰れる

第143条 家門による審判

（前条による審判で、）妻に責任あり（家事をないがしろにした）と認められたる場合は、水中に投げ込まれ処罰を下される

第144条 妻たる女神官の地位

女神官を妻に娶りその女奴隷が子供を生んだ時（女神官が子供を生んだと同様に扱い）その妻女が同意しない妾を囲うことができない

第145条 妾を囲える場合

（前条で）妻の女奴隷に子供が生まれなかったら、妾を囲うことが

できるが、同居した妾の地位は常に妻の下に置かれなければならない

第146条 子を生んだ女奴隷（アムタム）

（前2ケ条で）女神官（ナディトゥム）の連れてきた女奴隷は、その後も妻の下に置かれるが、その女奴隷（アムタム）は売り払われることはない

第147条 女奴隷（アムタム）の売却

（前3ケ条で）妻女となった女神官の女奴隷が、子供を生まなかったならば、その主人は女奴隷（アムタム）を銀（貨）で売却することができる

第148条 病気の妻は離別禁止

娶った妻女が、ラアブム病になった場合に、他に別の妻女を娶れ（正妻として）はするが、元の妻女を離別することはできない

第149条 妻の同意で離婚可

（前条の妻女が）自分の方からその家に住むことを欲しないならば（実家から持ってきた）持参金を持参して実家に帰ることができる

第150条 封印遺言証書

生前のとき自分の妻に粘土板の封印遺言証書が作成されていたならば、その妻女は（封印遺言証書に規定した）不動産を自由に処理することができる

第151条 妻の債権拘束性なし

（前条で）その妻女が、婚姻前に何らかの債権があったとしても、それらの婚姻前の諸債権は、夫婦いずれにも拘束性を有しない

第152条 共同の債権は率先支払

結婚してから生じた債務は夫婦共同して（優先的に）商人に支払いをおこなわなければならないものとする

第 XII 章 刑事法（殺人・近親相姦等）（第153条～第158条）

第153条 夫の殺害と杭刺し刑

他の男のために自分の夫を殺害した妻は「杭刺し刑」に処せられる

第154条 姦通罪

他人の子女と肉体関係をもち、その他人（アウィルム階層の男）がこの都市から出ていけと命じたら、（その姦通をした男は）追放される

第155条 息子の嫁との相姦

息子の嫁に手をつけた息子の父が、その嫁と同衾している時に（現行犯として）みつかったら、捕縛された上に水死の刑に処せられる

第156条 婚約中の息子の嫁

まだ婚約中の息子の嫁に手をつけたなら、1 マナの銀の罰金と（息子のところに持参した）持参金を（全額）返還しなければならない

第157条 近親相姦

母と相姦した者は、火刑によって、その母親と二人とも焼殺される

第158条 父の女奴隷との相姦

父親の死後、その（父親の子供を生んだ）女奴隷（正夫人）のところで自分の子供を生んだことが判明し、または同衾していることが露見したならばその息子は（父の家から）追放される

第 XIII 章 婚姻法、婚約と結婚（第159条～第184条）

第159条 婚姻の取消し

婚姻の無効及び取消しの場合に、結納金等持参したすべてのものを、娘の父は、自分の手中に留めおくことができる（返還の義務なし）

第160条 婚姻申込みの拒否

花嫁の側で、結婚の申し込みをしに来た花婿を拒否した場合は、持参してきた結納品の（額面において）倍額を返却しなければならない

第161条 中傷による拒否

中傷されたことによって娘の婚姻を拒否した義父も倍額を返済しなければならず、その中傷した者もその娘を娶ることができない

第162条 結婚の持参金と出産後の措置

子供を生んだ後に、死亡した妻の持参金は、その婿家の子供達が続し、（子を生んだ母親の）実家の父親は返還を請求できない

第163条 持参金の返還

子供を生まずに死んだ妻の持参金は、その妻の実家の父親が返還請求できる、但し結納金等婚姻費用は妻の実家にそのまま留め置かれる

第164条 持参金と結納の相殺

（前条で）結納を返さない実家の父には、持参金から花嫁の価値額を相殺して、その後に残額を返却すれば良い

第165条 長所ある子の優先相続

ある者が自分の気に入った息子に優先相続させた法的捺印証書は、その父親の死後も優先して相続され、その他は平等に相続させる。

第166条 未婚兄弟の保護

父親の死亡後まだ未婚の幼少の弟がいる場合は、その弟に銀を分け前として特別に与え、成長して妻を娶らせるまで養育する

第167条 母親の持参金で相続

最初の妻と二人目の妻がともに死亡し、子供が残った時にその妻達の持参金に応じて財産を受け取り、父の家の財産は平等に相続される

第168条 相続権の剥奪に関する一般原則

ある息子だけその相続権を剥奪（嫡出子として廃除）しようとしても、その正当事由なき場合は、裁判官の調査によって不可となる

第169条 相続剥奪事由が二つ以上の場合

（前条と同じく）その訴訟を起こすには、相続権を剥奪する理由が二つ以上（嫡出廃除の罪を二つ以上犯して）なければ、不可となる

（以上は山梨学院大学『法学論集』第48号、2001年11月20日 p.242～500に既述）

（ここから第229条までは『法学論集』第49号に掲載済み）

第170条 嫡出の認定、女奴隷の生んだ子供、嫡出庶子

父親の存命中に、女奴隷の生んだ子供を「自分の子」と宣言したならば（嫡出子とみなされ）、その子供の相続は他の子供と平等となる

第171条 認知しない女奴隷の子供（非嫡出子）と遺産分割

（前条と）同じ状況で（嫡出子と）認知しなかったら、相続はできないが自由の身分だけは与えられる、寡婦の生活費と贈与の公正証書

第172条 結納金なき婚姻の家

（前条から続き）、その男が結納金（贈与）を与えないで本妻をもらった時には、その妻と子の将来、裁判官はその背後の事情を調査して嫡出子への処断を判定することができる

第173条 再婚と子供の相続

（前2ヶ条に続き）再婚して子供を生んでから、死亡した妻女の持参金は、前の夫と後の夫の子供達で、分割して相続されることになる。

第174条 前夫の子供への相続

（前条の）再婚した女が、後の夫との間に子供がなかったら、その再婚した女の、前の夫の家にいる子供達だけが相続が可能となる

第175条 奴隷と自由人女との子

奴隷がアウィルム階層の女との間に子供をつくったならば、その奴隷の主人は、その子供を自分の奴隷（階層）としては扱えず、アウィルム階層の「嫡出子」のように扱わねばならない

第176条 前条の持参金

（前条の）奴隷が死亡したならば、婚姻後得た諸財産は、奴隷の主人とアウィルム階層の（奴隷と婚姻した）娘とが二分割して受領する

第177条 幼児ある女の再婚

幼児のいる女の再婚は、すべて裁判官の決定事項となる、旧夫の幼児の成長のため、家具類は一切売却禁止とされる（違反した者の支払いは没収）

第178条 女（神）官の持参金

持参金を与えられた女（神）官が、父親の死亡後受け取る不動産の措置について、その女（神）官が生存中だけそれを生活費（活計）にあてることができるが、娘の死後、相続分は兄弟が取得する

第179条 女（神）官の相続優位

（前条と同じ場合で、）父親が粘土板にその女（神）官の意志を優先する記載（捺印証書）があった不動産の措置は、その娘の死後、生前その娘が遺言した者に与えることができる

第180条 相続の特権なき女（神）官

父親が、まだ特別の持参金を与える約束をしていなかった女（神）官は、他の子供と同じ相続分を生存中は活計（生活費）として使用できるが、その娘の死後、財産は兄弟達の所有となる

第181条 特別の神への女（神）官

父親が、その娘を特別の神へ捧げる女（神）官とした場合には、その家の財産中、彼女の相続分の1/3を活計（生活費）に使用することができるが、死後は兄弟達のものとなる

第182条 マルドック神の女神官

父親が、その娘をバビロンの守護神マルドックに捧げる女（神）官にしたならば、父親の財産中で、彼女の相続分の3分の1を相続（兄弟と分割）でき、死後の遺贈も可となる

第183条 生前贈与は相続不可

父親が他人のシュゲーティム妾（シュギートゥム女官）となっている自分の娘に、生前贈与たる持参金（嫁資）を与え、改めて正式な夫に嫁がせたならば、父親の死後、その娘の相続は不可となる

第184条 生前贈与のなき妾

前条と同じく他人の妾（シュゲーティム女官）になった（自分の）娘に、父が存命中、自分の持参金も与えず、夫にも嫁がせなかったらば、父の死後その兄弟がその娘に嫁資等を与えなければならない

第 XIV 章 養子縁組と家族法（第185条～第191条）**第185条 養子縁組**

幼い子供の時から（アウィルム階層の職能にある人物が）自分の名をつけて（自分の家族名を冠して）養子にし成長させた後は、その子供を返還するよう請求することは出来なくなる

第186条 養子の解消が可能になる状況

養子を採用した場合に、(その息子が成長して) 自分の実の両親を捜しあて、その「もとの養子縁組」に反対したならば、採用した幼児は実家に戻される

第187条 宮廷関係(従事)者の養子

(古代バビロニアの) 宮廷の廷吏や奉公人の子供の養子縁組み手続きは、決して解消されることがないものとする

第188条 職工人の養子、養子縁組み取り消し不可

職人が(その職工技術を伝受させるため) 子供を養子として、自分の手工芸の技術を修得させたらば、その養子縁組みは解消できない

第189条 技術未修の養子、養子離縁可の事例

前条と同じ条件で、その養子とした子供が職工の技術を未修得のままなら、その養子縁組みは解消できることとする

第190条 養家での不遇、養子縁組みの解消可

養子として採用した子供を成長させたが、その養家で他の実子がその養子を同等に扱わないようならば、その養子縁組みは解消できる

第191条 養子の追い出し、養子の取扱い

養子をもってから、その養子縁組みをした家族に実子ができ、養子を追い出そうとしたならば、その養子縁組みを解消するには、成人した後にその1/3の生前贈与を与えなければならない

第XV章 特殊な刑法規範(第192条～第195条)

第192条 宮廷奉公人の養子、尊属否認の処罰

宮廷の廷臣がもらった養子が、自分の両親に対してその親であることを否定するような発言をしたならば、その舌を切り落とされる

第193条 養子が実家に戻る件、養父による処罰規定

前条の廷臣の養子となった者が養親を嫌って、実父の家に戻ってしまったならば、その養子の眼球は刳り抜かれることになる

第194条 養子及び乳母の責任と刑罰

乳母に預けた子供が死亡し、それを隠すため乳母が他の子供と取替えて授乳したならば、その乳母の胸(乳房)は切り裂かれる

第195条 息子の暴力、尊属殴打罪

息子がその父親を打つならばその息子の手は切り取る処罰がされる

第 XVI 章 傷害罪と反坐法（タリオ規範とその例外）

（第196条～第214条）

第196条 「目には目」の同害報復、Lēx talionis の代表規定

他人の目を潰したならば自分の眼も潰されることになる

第197条 「骨には骨」の同害報復

他人の骨を折ったならば自分の骨も折られることになる

第198条 ムシュケーヌム（階層）の目と骨

ムシュケーヌム（階層）の目を潰すか骨を折ったならば銀（貨） 1

マナの罰金を科されることになる

第199条 奴隸の目と骨の賠償

奴隸の目を潰すか骨を折ったら、その奴隸の（購入した）値段の半額を銀（貨）で支払えばよい

第200条 「歯には歯」の同害報復、Lēx talionis の代表規定

同じ身分の他人の歯を折ったならば自分の歯も折られることになる

第201条 ムシュケーヌムの歯、殴打の賠償（額）

ムシュケーヌム（階層）の歯を折ったら銀1/3マナの賠償額を支払う

第202条 高位の者に対する頬の殴打

自分よりも身分の高い人の頬を打ったら、牛の鞭で60回分叩かれる

第203条 同身分の頬を殴打

同じ身分の者の頬を殴打したる場合には、1 マナの銀（貨）をその損害賠償（費用）として支払わなければならないこととする

第204条 ムシュケーヌム（階層）の頬を殴打

同じムシュケーヌム（階層）の人物の頬を殴打したる場合には、10 シュケルの銀（貨）を損害賠償（費用）として支払わなければならない

第205条 奴隸が（自由人を）殴打したる時

奴隸が、アウィルム（階層）の人物の者（あるいはその子供）を殴打したる時には、その奴隸の耳が切り落とされなければならない

第206条 殴打による傷害の場合の損害賠償

他人を殴打して、それによって傷害を与えたる時には、宣誓した上、その相手の傷の治療費を、(すべて) 支払わなければならない

第207条 殴打により死亡した場合の賠償(額)

前条で相手が死亡した時に銀1/2マナ(500g)の損害賠償を支払う

第208条 ムシュケーヌム(階層)の者の殺害

(前2ケ条と同じ場合で)、相手がムシュケーヌム階層の者ならば1/3マナの銀(貨)が損害賠償として支払われなければならない

第209条 妊娠中の女性を流産、殴打による流産致死の賠償額

殴打した相手が妊娠中の女性で、その殴打されたがために流産(胎児殺害)したらならば、10シケルの銀がその損害賠償額となる

第210条 女性を殴打殺人した場合、同害報報

殺した相手がアウィルム階層の女性だったら、自分の娘も殺される

第211条 ムシュケーヌム(階層)の女性を殴打して流産させた場合の損害賠償

殴打した女性がムシュケーヌム階層の女性でその殴打のために流産(胎児殺害)したならば5シケルの銀を賠償費用として支払う

第212条 ムシュケーヌム(階層)の妊婦を流産(胎児致死)させた場合の損害賠償

(前の条文の)女性が死亡したら銀(貨)1/2マナの損害賠償を支払う

第213条 女奴隷の胎児流産

殴打されたのが他のアウィルム階層の女奴隷で、その殴打によって胎児が流産したならば、銀(貨)2シケルの損害賠償(額)を支払わなければならない

第214条 女奴隷を殴打殺害した損害賠償

(前条の)女奴隷が死亡したら、銀(貨)1/3マナの損害賠償を支払わなければならない

第XVII章 医師(外科医療)に関する規定(第215条～第223条)

第215条 外科と眼科治療

外科医が青銅のメスを使い、アウィルム階層の者に外科手術をしたならば銀（貨）10シケルの治療に対する謝礼を受け取ることができる

第216条 ムシュケーヌム（階層）の患者が外科手術

（前条の）外科手術をおこなった患者が、ムシュケーヌム（階層）の者であったならば、その治療費は、5シケルの銀（貨）とする

第217条 奴隷の患者が外科手術

（前2ケ条と同じ）外科手術を受けた患者が、アウィルム（階層）の奴隷ならば、その治療費は2シケルの銀（貨）とする

第218条 外科手術の失敗、医師の法的責任

青銅メスによる外科手術で、（医療過誤により）患者を殺害してしまったり、目を潰したりしたら、その外科手術をした外科医は（医療過誤の罰則として）その（手術した）手を切り取られる

第219条 外科手術で奴隷が死亡した時の損害賠償

（前条と）同じ手術で、ムシュケーヌムの奴隷を（医療過誤により）殺害してしまったら、その奴隷と同程度の奴隷を（その所有者に）賠償しなければならない

第220条 手術で奴隷の目が失明

（前条文3ケ条と同じような条件で）外科手術をおこない、奴隷の目を失明させたら、その奴隷の購入額の半額を損害賠償として（その奴隷の主人に）支払わねばならない

第221条 骨折治療の治療費

患者がアウィルム階層の場合には、その骨折治療の治療費として銀（貨）10シケルを支払わねばならない

第222条 ムシュケーヌムの患者、骨折と内臓治療費

外科医が骨折と内臓の（両方あるいは一方の）治療をした患者が、ムシュケーヌム（階層）の者だったら、その治療費（額）としては3シケル銀（貨）である

第223条 奴隷の治療費

前条（と同様）の治療をおこなった患者が、アウィルム（階層）所

有の奴隷ならば、その治療費は銀（貨）2 シェケルを支払わなければならない

第224条 獣医の治療代

外科医が、牛や驢馬を（青銅のメスで）切開手術したならば、その治療費は、1/6シェケルの銀（貨の薄片）である

第225条 獣医の手術ミス

外科医が、牛や驢馬を手術ミスで殺してしまった場合には、その家畜の値段の1/4の価格を家畜の持主に（損害賠償として）支払う

第 XVIII 章 烙印官の規定（第226条と第227条）

第226条 烙印官の責任

売買の出来ない奴隷を、その主人の許可をえないで、売買ができるような烙印を押したならば、その烙印官の手（指）は切り落される

第227条 虚偽の烙印

烙印官を騙して、売買の出来ない奴隷に烙印を押させたならば、その者は死刑となり、烙印官は知らなかった旨を宣誓すれば釈放される

第 XIX 章 建築家に関する規定（第228条～第233条）

第228条 建築家への報酬

家屋の建造を依頼した者は、その家屋が完成したら、建坪1サルあたり2 シェケルの銀（貨）で、建設費を支払わねばならない

第229条 建物の倒壊

依頼された建築家（石工）が、（その建築工法の）手を抜いて家屋が倒壊し、その家の主人が死亡したならば、その建築家も死罪とされる

（以上は山梨学院大学『法学論集』第49号まで、2003年3月10日までの『法学論集』に既述 p.746～928に既述）

（今号掲載分はここから）

第230条 倒壊による息子の死

（前条の）建物が（建築工法のミスで）倒壊して、屋主の息子が死

亡したならば、その建築家の息子もまた殺されなければならない

第231条 奴隸の死亡

（前 2 ケ条で、）その建物を所有している主人の奴隸が死亡したならば、その奴隸と同程度の奴隸を賠償として引き渡さなければならない

第232条 家具や家財道具の破損

同じく（前 3 ケ条の理由で）家具類が、家の倒壊で破損したならば、同等の家具類の損害賠償と家屋の再建をしなければならない

第233条 壁面の損壊

建築家は、自己の資金で、その壁面を補修しなければならない

第 XX 章 船頭・船大工の規定（第234条～第240条）

第234条 船大工の賃金

60 グルの船の建造費は、2 シェケルの銀（貨）を支払わなければならない

第235条 船の補修

船を建造したその同じ年に、建造した船が破損したら補修義務を負う

第236条 船の賃貸借料

船を賃貸借して（その船を操舵していた）船頭が、その船を沈めたら（同様の）船を損害賠償として、（引き渡さ）なければならない

第237条 船の荷物損失に対する賠償

船頭が不注意で船を沈め、積載した荷物を失ったならば、その船と荷物を損額賠償として支払わなければならない

第238条 沈没船の引上げ

船頭が、自分の（操舵していた船で）沈没させた船を引き上げたならば、その船の値段の半額を銀（貨）で支払わなければならない

第239条 船頭の年収、船頭雇用契約

船頭の給料は、一年間に穀物（大麦）6 グルを支払わなければならない

第240条 船の衝突

河川を上下する船と横断する船が衝突したならば、川を上下する船の
ほうが、横断する船の荷を損害賠償しなければならない

第XXI章 各種賃貸料と管理責任（第241条～第252条）

第241条 牛の抵当料、（牛の賃貸借契約）

牛を抵当として取る時に、その値は1/3マナの銀（貨の薄片）とする

第242条 馬鋤付き牛の賃貸契約

馬鋤のついた牛を一年間賃貸するには大麦4グルの賃貸料とする

第243条 胴繋ぎ牛の賃貸契約

胴で繋いだ牛を一年間賃貸するには3グルの賃貸料とする

第244条 賃貸した家畜の殺害と損害賠償

野原で賃貸した家畜が、ライオン（などの野獣）に殺されたならば、
その損害賠償は、持ち主の側（所有者）が負担しなければならない

第245条 賃貸した牛の殺害

不注意か打擲のために、賃貸した牛が死んでしまったらば、同じ程
度の牛を、損害賠償（として引き渡さ）なければならない

第246条 牛の足を折った賠償

賃貸した牛の足を折ってしまったならば、同程度の牛を損害賠償と
して、引き渡さなければならない

第247条 牛の目を潰した賠償

賃貸した牛の目を潰してしまったならば、その牛の価の半分にあた
るものを損害賠償として支払わなければならない

第248条 賃貸した牛の角と尾の賠償額

賃貸牛の角や尾等を切ってしまったならば、その牛の1/4の価にあた
るものを損害賠償として支払わなければならない

第249条 賃貸した牛の自然死

賃貸した牛を神が殺したなら（理由のわからない自然死をしたなら
ば）誓約の上で（多分、損害賠償はしないで）放免される

第250条 牛の角で人が殺害された場合の措置

牛が歩行中の者をその角で殺害したならば、それに対する処罰はな
い（いかなる損害賠償も処罰もない）ものとされる

第251条 突き癖のある牛が人を殺害した場合の措置

突き刺す癖がある牛に対して保護措置をしなかったために、人が殺されたならば、1/2マナの銀（貨）を損害賠償しなければならない

第252条 牛が奴隷を殺した時の賠償額

前条で（そのような牛が）奴隷を突き殺したらば、1/3マナの銀（貨）を損害賠償として、支払わなければならない

第 XXII 章 人の管理責任と盗難（第253条～第277条）

第253条 管理者の横領とその処罰

田畑の管理を依頼された者が、種子や飼料を横領したならば、その者の指は、（窃盗の罪として）切り落される

第254条 穀物食糧の横領

前条の者が穀物食糧を横領したならば、それに相応する穀物（大麦）を損害賠償すれば（それ以外の罪は問われず）それでよい

第255条 賃借の不誠実

前2ケ条で、賃借した牛を他人に重ねて賃借したり、飼料を盗んだために田畑に何も生えないようになったならば、収穫時に、10イクーにつき60グルの損害賠償（額）を支払わねばならない

第256条 賃貸借の賠償不能

前条の損害賠償が不能な場合には、その牛の代りに自分が（損害を補填するために）労働しなければならない

第257条 耕作人の雇傭

耕作人の雇傭費は、1年間に7グルの穀物を支払うことで足りる

第258条 牛飼いの雇傭

牛飼いの雇傭費は、1年間に6グルの穀物を支払うことで足りる

第259条 鋤の盗難

野原で鋤を盗んだらば、その損害に対する罰金は5シェケルの銀（貨）を（損害賠償として）支払わねばならない

第260条 開墾鋤か馬鋤の盗難

開墾鋤か馬鋤の盗難はその罰金として3シェケルの銀（貨）を（損害賠償額として）支払わなければならない

第261条 牧人の雇傭

牛や羊を飼育する牧人の雇傭費は、1年間128グルの穀物を支払う

第262条 〔原文欠損〕

「ある者が、牛や羊を……に」だけが記載されている（内容不明）

第263条 牛や羊の損失

渡された牛や羊の損失は同程度の損害賠償額とする

第264条 牧人の損失負担

手当を渡されて、預かった牛や羊の生産率を減少させたならば、その減少分の負担を、（損害賠償額として）なさねばならない

第265条 牧人の盗み

飼育のために渡された牛や羊を、牧人が銀のために売却したならば、その10倍に至るまでの損害賠償額を支払わねばならない

第266条 牧人の責任解除

家畜の自然死と野獣による殺害の場は、牧人が神の前で宣誓し、その責任を免かれる（いかなる損害賠償も負わない）ことができる

第267条 牧人の責任事項

牧人の不注意で、牛や羊が倒れたならば、それらを（もとの状況に）回復させてから、その持ち主に引き渡さなければならない

第268条 牛の脱穀用賃貸

脱穀のため牛を賃貸したならば、20シラの穀物（大麦）を（その賃貸料として）支払うべきものとされる

第269条 ロバの賃貸

前条でロバを賃貸したならば、その賃貸料は穀物10シラとされる

第270条 子羊の賃貸

前2ヶ条（と同様の条件）で子羊の賃貸は、その賃料として穀物（大麦）1シラを支払うこととする

第271条 運搬人の賃貸

荷車の牛やそれを運ぶ者を賃貸借したならば、その賃貸借料は、1日180シラの穀物（大麦）とされる

第272条 荷車の賃借料

自分で動かすことのできる荷車を賃貸借したならば、その賃貸料としては40シラの穀物（大麦）を支払う

第273条 日雇い労務者の賃銀

日雇い労働者の賃金は、季節により異り、5月までは6シェの銀（薄片）が支払われ、6月からは5シェの銀（薄片）が支払われる

第274条 各職人の給料

〔楔形原文が各部分欠損しているが〕各職人の給料は、だいたい1日4シェ〜5シェの銀（薄片）がその労働賃金として支払われる

第275条 〔原文欠落〕

前条と同じく、但しかなり安い1日3シェの職業が記されていたと思われるが原文が欠落しているため不明である

第276条 河川の上下船賃借

河川を上下する船を賃貸借する時は、1日につき2.5シェの銀（の薄片）がその賃借料として支払われなければならない

第277条 60グル船の賃借

60グルの容積をもつ船を賃貸借する場合は、1日につき1/6シェケルの銀（薄片）がその賃借料として支払われなければならない

第 XXIII 章 奴隷に関する法規範（第278条〜第282条）

第278条 病気の奴隷購入

奴隷を購入して、1ヶ月以内にペヌヌ病が発病したならば、その奴隷を売った者に戻し、支払った銀（貨）を取りかえすことができる

第279条 奴隷の所有権

奴隷を購入したが、その所有権を取り戻すように要請されたならば、売り主はそれを認める必要がある（所有権は確認される）ものとされる

第280条 外国での奴隷購入

外国で購入した奴隷を、そのもとの主人がバビロニア人だと確認したならば、その奴隷は解放されることになる

第281条 奴隷の地位確認

前条の外国で購入した奴隷が、他国の者であると判明したならば、

神前で支払った金額を告げ、その奴隷を取り戻すことができる


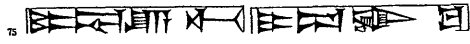
第282条 奴隷の身分否定

奴隷がその主人に向かって「貴方は自分の主人ではない」と言ったりしたならば、その身分を確認した上で、その奴隷の耳を切り落とすことができる

ハンムラビ法典後文

あとがき

第230条（原文・逐語訳）


 sum-ma mār be-el bitim uš-ta-mi-it
 （上記で）もし子が 主の 家の 死んだなら

 mār bānim su-a-ti i-du-uk-ku
 子が 大工の その 殺される

第230条（試訳）


（アッカド語の文章は前の第229条から続き、アウィルム階層の者に依頼されて家屋を建てた建築家の施工技術が下手だった為に家屋が倒れて）その家屋の主人の子供が死亡したる場合には、（その処罰として）その建築家の子供が殺されなければならないこととする。

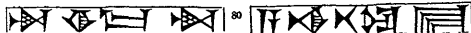
第230条の解釈

前条と同様、タリオ法規に則った事例がここに記されているが、建築家に子供がいなかった場合どのように処理されるかの具体的な記載はない。従って、同害報復を象徴的な事例として表示しただけのもの、と思われる。実際に子供がいなかった場合かなりの額の損害賠償で処理されたものではないかと思われる。この2行の条文を原田慶吉氏は「もし家の主の子を死亡せしめたるときは、〔彼等〕その大工の子を殺す。」〔loc. cit., p. 335〕と訳し、鈴木佳秀氏の重訳も「（家が倒壊して）この家の主人の息子を死なせた場合、その大工の息子は殺されなければならない。」〔loc. cit., p. 195〕と記されており、中田一郎氏もその条文の内容そのものはほぼ同じであるが石柱に記された「もし家の所有者の息子を死なせたなら、彼らはその大工の息子を殺さなければならない。¹³⁵⁾」〔loc. cit., p. 62〕というアッカド語文章の最後に脚注〔qq. v.〕で「135)『法典』碑は、「彼らは……殺さな


ければならない」となっているが、Pテキストは「(彼は) 殺されなければならない」となっている。」[ibid.,] という受動態の文章が他の粘土板テキストには出ているとあるが、このPテキストとは、出版されていない
p: BM 16567 (unpublished, identified by H. Figulla//XLII 64-81 (?), XLIV 7-27, XLIV 95-XLV 3(?)(OB?)のことであるらしいが、アッカド語をここまで詳細に解読するなら、訳語等の時代に則した解釈や比較法的な面も更に深く考慮していただきたいものである。

第231条 (原文・逐語訳)


 sum-ma warad be-el bitim us-ta-mi-it
 (上記で) もし奴隷が 主の 家の 死んだなら


 wardam ki-ma wardim a-na be-el bitim

奴隷を 同じ 奴隷と に 主 家の


 i-na-ad-di-in
 与える

奴隷
 象形文字 古拙文字

--	--

同じ楔形文字でもアッカド語

		ir ₂ nita ₂	ardu zikaru	男、奴隷 [ibid.,]
--	--	--------------------------------------	----------------	---------------

ではこの楔が交差した内側が、小さい楔で埋められている

第231条 (試訳)

(アッカド語の文章は、第229条より発し、前の第230条からこの条文へと続いている。即ち、倒壊した家屋によって) この家屋の主人の(所有する) 奴隷が死亡したる場合には、その建築家はその家屋の主人に対し、その死亡させた奴隷と同じ程度の奴隷一人を与えなければならないものとする。

第231条の解釈

この条文も先行する 2 ケ条と同じ広い意味での同害報復を述べたもので、タリオの原則に忠実な記載となっている。この条文の翻訳として、原田慶吉氏は「もし家の主の奴隷を死亡せしめたるときは、〔その〕奴隷に相当する奴隷を、家の主に与う。」〔loc. cit., p. 335〕というもので、これを第229条から連続した規定と解釈するハンス J. ベッカー（Hans Jochen Boecker）氏のドイツ語訳から重訳している鈴木佳秀氏は「（家が倒壊して）この家の主人の奴隷を死なせた場合、彼は家の主人に対し（死なせた）奴隷と同等の奴隷一人を与えなければならない。」〔loc. cit., p. 195〕と日本語訳し、中田一郎氏も「もし家の所有者の奴隷を死なせたなら、彼（大工）は同等の奴隷を（その）家の所有者に与えなければならない。」〔loc. cit., p. 62〕と翻訳している。この奴隷という楔形文字が、絵文字と象形文字から古拙文字となって古代バビロニアのアッカド語として使われるようになったその変遷過程を、楔形文字原文第 2～3 行の右側余白に挿入したが、アッカド語で *wardan* と呼ばれた時代に、その交差した楔の内側をかなり細かい楔で網の目のように配し、なかなか見事な文字となっているが、奴隷そのものは本来戦争で敗れた民族等が、人格のない「もの」として捕えられてきたと考えられ、古代バビロニアにあっては古代ローマよりはるかに厳しい存在として扱われていたものである。

第232条（原文・逐語訳）



sum-ma nig₂-ga uh₂-ta-al-li-iq mi-im-ma halāqu 失う、毀す

（上記で）もし器物を壊したときは 同等品を

85 

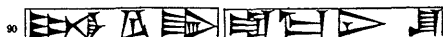
sa u₂-hal-li-qu₂ i-ri-ab u₃ as-sum

所の 壊した 弁償し、且つ のであるから



bitam i-bu-su la u₂-dan-ni-nu ma im-ku-tu

家を 建てた せず 堅固に 倒れた

90 

i-na nig₂-ga ra-ma-ni su

で 物（費用） 自身の 彼



bitam im-ku-tu i-ib-bi-eš

家を 倒れた （再び）建てる

第232条（試訳）

（第229条より始まるアッカド語の文章が、この条文まで続いており、建築家が建てた家屋が倒壊して）家財道具類が破損した場合には、建築家はその壊れたものと同等のものを弁済し、かつ自分の建築した家屋が堅固に施工されていなかったのだから、倒壊した家屋を自分の資金によって再度建て直さなければならないこととする。

第232条の解釈

この条文も同害報復のタリオ原則によって貫かれているが、建築家すなわち大工・石材工に対する責任の重要性は現代法の感覚からみてかなり飛び抜けて大きい、と言わねばならないだろう。この条文を原田慶吉氏の翻訳としては「もし物を滅失せしめたるときは、滅失せしめたるものを賠償し、且つ建てたる家を堅固にせず、ために倒れるのゆえをもって、彼自身の物をもって、倒れたる家を建て〔直す〕。」〔loc. cit., p. 335〕としており、ハンス J. ベッカー（Hans Jochen Boecker）氏の重訳として「（家が倒壊して）家財が破損した場合、彼はその損失分のすべてを償わなければ

ならない。また彼が建てた家が（十分）堅固に施工されていなかったがゆえに、倒壊したその家を彼は自分の資金をもって（もう一度）建て直さなければならない。」[loc. cit., p. 195] と鈴木佳秀氏は記しているが、中田一郎氏はこの第232条の訳を「もし彼（大工）が財産（家財道具）を毀損したなら、彼は彼が毀損した物は何であれ償わなければならない。そして、彼が万全を期して建てなかった家が倒壊したので、彼は、彼自身の財産で倒壊した家を建て（直さ）なければならない。」[loc. cit., p. 62] という文章で表現なさっている。しかしながら、中田氏の文章では、家財道具を毀損したのが、大工という風に読むことができ、アッカド語直訳の文章として楔形文字の上で筋が通っていたとしても、その日本語の訳文は全体の文章として適切とは言えない。

第233条（原文・逐語訳）

sum-ma bānūm bitam a-na a-wi-lim

もし 大工が 家を に 人

i-bu-uš ma ši-bi-ir šu la uš-te-iš-bi ma

建てたが、 仕事が 彼の なくて 堅く

šibū 囲む、囲める

igarum iq-tu-up bānūm šu-u₂

igāru < e₂-gar₃, e₂-sig₄


壁が 崩れ落ちた時は 大工は その

qāpu 落ち入る

Col.
XXXVI.

/ i-na kaspim ra-ma-ni šu

で 銀 自身の 彼

	sig ₄	libittu	煉瓦、壁
---	------------------	---------	------

参考、他の「煉瓦で造られた壁」[ibid.,]



igaram su-a-ti u₂-dan-na-an

壁を その 堅固にする

第233条（試訳）

建築家が、ある者のために家屋を建築したが、その仕事が堅固なものでなかったために、その家屋の壁面が崩れ落ちたる場合は、その建築家は自分自身の資金でその壁面を堅固にしなければならない。

第233条の解釈

この条文も原則としてはタリオ主義に立脚するものではあるが、アッカド語の文章としては、第229条から前の第232条に比較すると、それほど厳格に規定されているとは思えず「壁は崩れたところを自分の資金で補修すれば良い」と解釈すればそれで良いだろう。この第233条を原田慶吉氏は「もし大工が家を人のために建てて、彼の仕事を完全になし遂げず、ために壁が倒れ落ちたるときは、その大工は自己自身の銀をもって、その壁を堅固にす。」[loc. cit., p. 335]と翻訳され、ベッカー氏のドイツ語から重訳した鈴木佳秀氏も「大工がある人のために家を建てたが、その工事をきちんと施工していなかったため、壁が崩れそうになった場合、大工はその壁を自分の資金でもう一度補強し直さなければならない。」[loc. cit., p. 196]と訳し、中田一郎氏は、楔形文字第3行目に出てくる動詞 iq-tu-up を「壁が倒れ……」とか「壁が崩れそうになった……」とかの訳語でなく、「壁が曲ったなら……」と「曲る」という意味の動詞で「もし大工が人のために家を建てたが、彼の仕事を慎重に行わず、壁が曲ったなら、その大工は自費でその壁を強化しなければならない。」[loc. cit., p. 62]と翻訳なさっている。しかしながら各研究者が共通して「壁 igram」と訳している

家屋の壁は、楔形文字原文と逐語訳の右に「参考」として出しておいた一般的に丈夫な煉瓦として焼いた壁ではなく、おそらく igram という壁は土壁建築の隅にあるパットレスのように建物と一体となっていて、その屋根等を支える部材や柱の役割りをはたしていなかったからこそ、この第233条のような条文が出来たのではないか、と思われる。鈴木佳秀氏が重訳したハンス J.ベッカー (Hans Jochen Boecker) 氏は、このハンムラピ法典第229条から第233条までの解釈として「申命記」を引用してその解釈をおこなっており、その鈴木氏の重訳は「旧約聖書には、直接この法規の並行例となるものがない。過失に関わる賠償責任については、出エジプト記21章33-34節を想起することができるだろう。そこでは、地中の天水貯水槽の所有者がそれに蓋をしておかなければならないという責任規定が確認される。それを怠った場合、彼はそれによって生じた損失に対して賠償しなければならない。申命記22章8節が、引用したハンムラピ法典が問題とする事柄の領域に近いものを取り扱っている。そこでも、家の建築を問題としている。

あなたが新しい家を建てる場合、あなたは家の屋根に欄干を設けなければならない。こうしてあなたは血の責めをあなたの家に負わせないようにしなければならない。

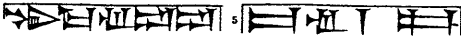


申命記22章8節

だがこの場合でも、旧約聖書の法はかくもバビロニアの法から隔っているのである。罪のない血を流すことによって、家が汚されるということを率直に語っている。血は罪の現実を創り出し、それが建物とそこに住まう者にふりかかるという。……」[ibid.,] となっている。

なおこの第233条の第3行目までハンムラピ法典石柱の裏面上方から第19欄（段落）目のコラムは終わり、次の第4行目から第20欄の右端に移っ

てゆき、同じように読み進めてゆくことになる。

第234条（原文・逐語訳）

 elippu < 𐎶𐎵 ma₂
 sum-ma malahum elippi 60 gur malahu < ma₂-lah₄
 もし 船頭が 船を 60 グルの
 a-na a-wi-lim ip-hi 2 siqil kaspim pihū 建てる
 に 人 作ったなら 2 シェケルの銀を
 a-na qi₂-is-ti su i-na-ad-di-is sum
 として 賃金 彼の 与える 彼に

第234条（試訳）

船大工（造船職人だが船頭と兼務）が、ある者のために60グル（約1万5千リットル強の積み荷を積載できる船舶）の船を造船したならば、その労働賃金として2シェケル（約17g弱）の銀（貨）を彼（船大工）に与えるものとする。

第234条の解釈

船大工としての労働賃金を規定した条文である。船の大きさすなわち容積単位はグルという価で示されている。このグルは、やはりハンムラビ法典の第44条や第56条に出てきた大麦をはかる単位と共通しているように思われる。すなわち第56条の解釈のところで説明したように、ウル第三王朝（B.C.2112～）から以降の容積単位としては『ウルナム法典』の規定する1グル＝300シラ（今日のメートル法で約255リットル）がそのまま適用

されていたのではないか、と思われる。

60グルの船は、この計算でゆくと15,300リットルであるが、これは船自体の容積というよりも、それだけの物資を運べる船と解釈するべきであろう。その建造する労働賃金が2シェケルの銀（約16.5g 強）（貨）ということになる。

この労働賃金は、第217条で医師がアウィルム階層の有する奴隷に外科手術をするのと同額であり、古代においても外科手術はかなり高額であったことがこれで理解できるのである。

なおこの条文に出てくる *malahum* というアッカド語の単語は、当時その呼び名で船大工と船頭をかねていたようで、第236条～第239条では同じ単語で「船頭としての業務」が規定されている。それゆえに、この条文では船大工と訳すが、上記の条文では船頭と訳することにする。

そしてこの船大工が、そのまま船頭として乗り込み操船する船の大きさが当時の平均的な容積重量トンとして60グル（15,300リットル）と定められていた、とみるべきであろう。











しかしながら、他の粘土板文書ではこれ以上の100グルを超える大型船が記載されており、当時すでに300グル位までの大型船は建造されていた、と考えられている。

後の第240条にも出てくることからわかるように、メソポタミアの両河川（ティグリス河とユーフラテス河）において、河川を上流から下流へ上下する船と両河川を横断して人や物も運ぶ船とは当然重量が大きく違っており、両河川を上下する船は比較的小さく方向が自由に変えられるように造られており、河川を横断するフェリーは比較的大きなものが使用されていた、と考えるべきであろう。

この第234条を原田慶吉氏は「もし船大工が60クールの船を、人のために建造したときは、銀2シクルを彼の報酬として彼に与う。」[loc. cit.,

p. 335〕と従来から翻訳されてきた elippi を「船」として訳しておられるが、中田一郎氏はこれらと全く異った解釈として、elipp(i)を「積み船の水密化工事」と訳し、その上に「コーキング」というルビを振っておられる。

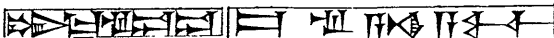







おそらく古代バビロニアの当時であっても60グル（原田氏はクール、中田氏はクル）の船を銀2シェケル（原田氏はシクル、中田氏はシキル）の値段で建造できるわけがない、という発想から出てきた解釈であろうが、とにかく中田一郎氏の翻訳とその下にある脚註を見てみると「もし船頭¹³⁶⁾が人のために60クル（約18,000リットル）積みの船¹³⁷⁾の^コ水密化^キ工^シ事を行なったなら、彼は彼の贈物として銀2シキル（約16.7グラム）を彼（船頭）に与えなければならない。」〔loc. cit., p. 62〕続けてこの脚註〔qq. v.〕には「136）船頭と訳した言葉は *malakhum* で、普通は§§236-239におけるように、船乗りを意味するが、§§234-235におけるように船大工の意味で使われることもある。137）60クル積みの船は当時にあつては標準的な船であつた。§277を参照。」となっている。はたしてこの elippi というアッカド語が、「船」そのものを意味していたのか古代からあつたアスファルト材などを使用した「^コ水密化^キ工^シ事」だけを意味していたのか、正確なところは良くわからないが、シュメール時代の絵文字から一般的な船としての意味で使われたであろう楔形文字（以下に示すような発展をとげた）

					ma	ma	船?
					ma ₂	elippu	船

loc. cit., 飯島紀氏著『アッカド語～楔形文字と文法～』国際語学社刊 p. 171

をここに参考として掲げておく。

第235条 (原文・逐語訳)

10	
	Sum-ma malahum elippam a-na a-wi-lim
	もし 船頭が 船を に 人
	
	ip-hi ma ši-bi-ir šu la u ₂ -tak-ki-il ma takālu 強める、航海に適した
	作ったが、 仕事が 彼の ないため 外航に適して
15	
	i-na Sa-at-tim-ma šu-a-ti
	に 年 その
	
	elippum ši-i iz-za-par hi-ṭi-tam ir-ta-si hiṭitu 非難、災害
	船が この 就航した 災難を 受けたときは
	
	malahum elippam šu-a-ti i-na-qar ma naqāru 解体する、修理する
	船頭は 船を この 修理して、 rasū 受ける
	
	i-na nig ₂ -ga ra-ma-ni šu
	で 物 自身の 彼
	
	u ₂ -dan-na-an ma elippam dan-na-tam
	堅固にして、 船を 堅固な
25	
	a-na be-el elippim i-na-ad-di-in
	に 主 船の 与える

第235条 (試訳)

船大工 (malahum) が、ある者のために船舶を建造したが、その仕事が堅固でなかったために航海に適さず、その建造した年にこの就航した船に不都合を生じたる時は、船大工はこの船を自分の資金で補修して、堅固な就航にたえる船にしてから、船主に渡さねばならないものとする。

第235条の解釈

この時代、船頭がそのまま船大工として働いていたようで、この条文は船大工として労働した責任について述べたものである。しかし、第229条～232条の建築家（家の大工）について規定した条文のように建造責任についてはそれ程厳格なものではなく、あえて比較すれば第233条の壁の修理と同様の規定がこの第235条の修理責任として規定されているのであるが、それも一年以内に破損したものに限って補修すると解釈することができるから、船大工の責任は家を造る大工と較べるとかなり軽いと言わねばならないだろう。それだけ当時の船は未だ丈夫ではなく、かなりその最初に造船したままの状態で維持していくのが難しかったものと考えられる。

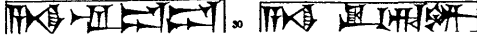
この第235条の翻訳として、原田慶吉氏は「もし船大工が船を人のために建造して、彼の仕事を信用しえるほどに行わず、ためにその年に既にその船が破損して、故障を生じたときは、船大工はその船を解体して、彼自身の物をもって堅固にし〔直し〕、もって堅固なる船を船の主に与う。」〔loc. cit., p. 335～p. 336〕のように記しておられるが、これに対して中田一郎氏はこの第235条の楔形文字原文第1行目の真中にある elipp(am)を前の第234条と同様「水密化工事」として以下のごとく「もし船頭が人のために船の水密^ユ化^キ工^シ事^グを行ったが、信頼に足る仕事をしなかったため、その年のうちにその船が傾き、欠陥が生じたなら、船頭はその船を解体し、自分自身の財産で堅固に作り直して、堅固な船をその船の所有者に与えなければならない。」〔loc. cit., p. 62-p. 63〕という翻訳文を掲げておられる。前の第234条はともかく、おそらく古代からバビロニアの河川にあったタールまたはアスファルトを使用した水密化工業であるコーキングなどが不完全であっただけで、その船を解体して堅固に作り直すようなことをするのであろうか、いくら古代の法とは言え、この中田氏の「水密化工事」という解釈は、前の第234条と完全に矛盾すると思われる。

第236条 (原文・逐語訳)



Sum-ma a-wi-lum elippi šu

もし 人が 船を 彼の



a-na malahim a-na ig-ri-im

に 船頭 で 賃借



id-di-in ma malahum i-gi ma

egū 不注意である、無視する

与え（貸し）たが、船頭が 不注意して



elippam ut-te-bi u3 lu uh2-ta-al-li-iq

船を 沈め、 又は なくしたなら



malahum elippam a-na be-el elippim i-ri-a-ab

船頭は 船を に 主 船の 弁償する

第236条 (試訳)

ある者が、自分の（所有する）船を船頭（前条の船大工と同一人）に賃貸借で貸し与えたが、その船頭の不注意により船を沈めたりあるいは失くしたりした場合には、その船頭は船主に船を弁償しなければならないものとする。

第236条の解釈

船頭としての一般的な責任について規定した条文で、アウィルム階層に属する者が所有している船を賃貸借した船頭（船大工）が、その船を沈没させたり失くしたりした場合にその船を弁償することが規定されている。しかしながら、船が沈没したり遭難したような場合、その船頭も生きて帰らぬことが多かったことはいつの時代でも同じで、そういう場合船頭から

どのような担保をとっておいたかの内容は不明である。

この条文に関して原田慶吉氏の翻訳としては「もし人が彼の船を船頭に、賃借料のために与え（賃貸し）たるに、船頭不注意にして、船を沈め、あるいはまた喪失せしめたときは、船頭は船を船の主に賠償す。」

〔loc. cit., p. 336〕としており、また中田一郎氏の訳文にもこれを口語風にした「もし人が彼の船を船頭に賃貸し、船頭が注意を怠り（その）船を沈没させたか、あるいは壊したかしたなら、（その）船頭は船を船の所有者に償わなければならない。」〔loc. cit., p. 63〕という訳文で、その内容はほとんど同一であり解釈の差が出てこないのが、この第236条の条文だと言えよう。

これに先立つ第234条からの解釈として、ホルスト・クレングル（Horst Klengel）氏は「……船大工も同じように特別の責任を負っていた（234～240条）。仕事をきちんと仕上げなかったので船に水が漏れ込んでくるようなときには、船大工は船を分解して自分の費用で新たに造船した（235条）。ここで述べられている船は、277条と同じく、60クルルの「容積トン」数、約1万8,000リットルの積載能力をもつ船である。おそらくこれが平均的な、あるいはもっとも多い船の大きさであったろう。しかし古バビロニア時代の手紙は120クルルとかあるいは300クルルもの積載能力のある船にも言及している。だからずい分大きな船もあったに違いない。手紙が示しているように、船はもしその方が便利ならば目的地で往々「分解され」て陸路を出発点まで運び戻された。ハンムラビがスィーンイッディナムに宛てた手紙は、船長たちに船もろとも大急ぎでバビロンへ来い。荷物を積んだ船が坐礁したならば、それをおろして陸路輸送せよ。そしてともかく定められた日にはバビロンに到着していよ、と命令している。

王は自ら輸送問題にたえず気を配っていたが、水路はとくに安くまた便


利であった。スィーンイッディナム宛ての手紙でハンムラピは、貨物船の建造に携る労働者が自分のところに送られて来ないと造船担当者が書き送ってきたことを伝えている。そこでハンムラピはスィーンイッディナムに対して、大至急労働者を手配してその者たちを『名前と賃金を記した』リストに書いて自分に送るよう厳しい指令を出している。……」〔op. cit., 江上波夫氏と五味亨氏の共訳『古代バビロニアの歴史』ハンムラピ王とその社会 p. 230～231〕と、ハンムラピ王の手紙文などを挿入して、これらの条文をかなり詳細に解説しておられる。


第237条 (原文・逐語訳)

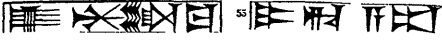
šum-ma a-wi-lum malaham u ₃ elippam	
もし 人が 船頭 と 船を	
i-gur ma seam šipātam šamnam suluppam	agāru 借りる
借りて、穀物、羊毛、油、 ナツメヤシ	Seu < Se
	sipātu < sig ₂
u ₃ mi-im-ma šum-šu sa si-nim	šamnu < i ₃ -giš
など 何であれ その名が の 積み荷	suluppu < zu ₂ -lum
	šinu 積み荷
i-ši-en ši malahum šu-u ₂	sēnu 満たす、積む
積んだが、 船頭が その	(下)シュメール時代の
i-gi ma elippam ut-te-ib-bi	tabū 沈む
不注意して、船を 沈め	
u ₃ sa li-ib-bi sa uh ₂ -ta-al-li-iq	
又は 物を 中の その 失ったなら	




gišimmar
ナツメヤシ

50 
malahum elippam sa u2-te-ib-bu-u2
船頭は 船と 所の 沈んだ


u3 mi-im-ma sa i-na li-ib-bi sa
と 同等品を 所と の 中 その


u2-hal-li-qu2 i-ri-a-ab
失った 弁償する

第237条（試訳）

ある者が、船頭（船大工）と船を借りて、穀物、羊毛、油、ナツメヤシなどその名が何であれ貨物を積み込んだが、船頭が不注意によってその船を沈め、その中に積載していた物を失ったならば、船頭は船とその中に積載した同等の失った品物を弁償しなければならないものとする。

第237条の解釈

船頭（船大工）が船を操船する時の注意義務を怠って、船を沈めてしまった時の民事責任を規定したもので、船頭はその失った船と積み荷を弁償しなければならない、という一般的な規定がこの第237条であるが、船頭に対しては家屋を建築する大工と異って、今日で言う刑事責任にあたるものが負わされていないのが古代法の特徴であろう。それだけ船の運航にはいつも危険がつきまっていたと思われるが、民事責任としてもかなりの高額にのぼったであろうこれらの弁済がはたして可能であったのかどうか疑問の残るところである。この条文を、原田慶吉氏の訳としては「もし人が船頭と船を賃借して、穀物、羊毛、油、棗またはいかなる物たりとも積み入れらるべきものを、それに積み入れたるに、その船頭不注意にして、船を沈め、かつその中にあるもの（積荷）を喪失せしめたるときは、船頭

は彼が沈めたる船と、〔彼が〕喪失せしめたるその中にあるもの（積荷）を賠償す。」〔loc. cit., p. 336〕という文章で表わし、中田一郎氏もこの条文の翻訳についてはほぼ同様に「もし人が船頭と船を賃借し、大麦、羊毛、油、ナツメヤシあるいはその他の積み荷をそれに積み込んだが、その船頭が注意を怠り（その）船を沈没させ、そのなかの積み荷を失わせたなら、船頭は、彼が沈没させた船と彼が失わせたそのなかの積み荷を償わなければならない。」〔loc. cit., p. 63〕という文章にしておられる。

ハンムラビ法典中のこの第237条は、言わば民事法における当然の原則を定めたもので、古代バビロニアのみならず現代法においても「損害賠償額の予定（英 liquidated damages 独 Vertragsstrafe 違約罰）」と言うべきものを規定してあり、損害に関する立証の困難を避けて賠償の請求を確実かつ容易にすることを目的として規定されているもので、日本民法の第420条にも「①当事者は債務の不履行に付き損害賠償の額を予定することを得。この場合においては裁判所はその額を増減することを得ず。②賠償額の予定は履行または解除の請求を妨げず。③違約金はこれを賠償額の予定と推定す。」という規定として、今日でも有効なものとして置かれている。

第238条（原文・逐語訳）



sum-ma malahum elippi a-wi-lim

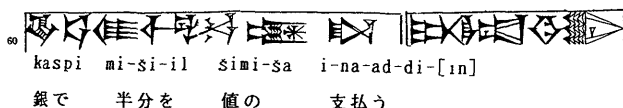
もし 船頭が 船を 人の



u₂-te-ib-bi ma uš-te-li-a-aš-si

elū 上げる

沈めたので、 引き上げたときは








第238条（試訳）

船頭（船大工）が、ある者の船を沈めたがそれを引きあげたる場合は、その値の半額を銀（貨）で支払うこととする。

第238条の解釈


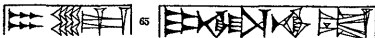

船頭（船大工）がアウィルム階層のある人から船を借りて、操船を誤り沈没させてしまった時、これを引きあげてそのアウィルム階層の者に戻した時は、その船と前条でいう積荷等の半額をそのアウィルム階層の者に銀（貨）で支払えばよい、という規定である。

アッカド語の文章が前の第237条と直接つながっていないので、積荷等はこの条文に適用されず「その値」は船の値だけかもしれない。原田慶吉氏はこの条文の翻訳として「もし船頭が人の船を沈め、その後これを浮揚せしめたときは、その値の半を銀にて与う。」[loc. cit., p. 336]という文章を、中田一郎氏もほぼ同じ内容のことを翻訳して「もし船頭が人の船を沈没させたが、そ〔れ〕を引き揚げたなら、彼（船頭）はそ〔の〕（船の）値段の半分の銀を与えなければならない。」[loc. cit., p. 63]と古代バビロニアにおいて、沈没した船を引きあげたら、ともかくその「半額分の損害賠償」を支払えば良いこと、を明示しておられる。

					ma ₂	elippu	船
---	---	---	---	---	-----------------	--------	---

[ibid.,]

第239条 (原文・逐語訳)

		絵 文 字		古拙文字
sum-ma a-wi-[lum] malaham [i-gur]		もし 人が 船頭を 賃借した時は		
		セ	𐎶	𐎶
6 [še-gur] i-na sa-na-[at]		大麦 6 グルを に 年		
		i-na-ad-[di]-is [sum]		
支払う 彼に				
		バビロニア アッシリア		
古典的 楔形文字	後 期 楔形文字	音 価		意 味
		シュメール	アッシリア	
𐎶	𐎶	gur taru kur ₃	gur taru qur	(容量単位) lgur • lugal = 300sila ₂

第239条 (試訳)

ある者が、船頭（船大工）を雇った場合（その給料として）年に穀物（大麦）6 グル（約1,800リットル）を支払うべきものとする。

第239条の解釈

古代バビロニア時代の船頭の給料としては銀（貨）のシェケルではなく食料となる穀物〔še-gur〕（大麦）6 グルが一人あたりの一年の給料として支払われていた。それがどの位の給料の価値であるか正確には把握できないが、このハンムラピ法典第44条の解釈のところで説明したように、10 イクーあたり大麦10グルとあるから、平均的に豊裕な農地で〔še-gur〕という穀物（大麦）が6 イクーあたりの土地で取れたもの、と解釈すべきだろう。

この条文を翻訳した原田慶吉氏の訳文は「もし人が船頭を賃借したときは、穀物 6 クールを年に彼に与う。」〔loc. cit., p. 336〕であり、中田一郎氏もこの短文の翻訳としてはほぼ同一の「もし人が船頭を〔雇〕ったなら、彼は〔彼（船頭）に〕年〔間〕〔大麦〕 6 〔クル〕（約1,800リットル）を与〔え〕なければならない。」〔loc. cit., p. 63〕と穀物を大麦と特定して

訳しておられる。

またホルスト・クレンゲル (Horst Klengel) 氏は、3ヶ条前にある第236条から、この条文までの一貫した解釈として「貨物船がバビロニアで果していた役割に鑑ると、私的商人たちも船の賃賃に手を出して、船の賃賃が多く、多くの文書で扱われているのも驚くには当たらない。それはハンムラビの法規のなかでいくつかの条文が対象としていることでもある。船を賃賃したところが不注意で船を失ってしまった船頭は、それを所有者に弁償しなくてはならなかった (236条)。荷物 (237条で列挙されているものは穀物、羊毛、油、ナツメである) を輸送するに当って船頭が雇われて難破したならば、かれは船と積み荷に責任を負った。沈んだ船を再び浮上させることに成功したときには、船の価値の半分を銀で弁償するだけで済んだ (238条)。船の水先案内人を雇う料金としては一年につき6クルルの穀物が定められる (239条)。これは牛飼いが受け取る料金と同じだが、農業労働者に対する報酬よりも2クルル少ない……。〔op. cit., 江上波夫・五味亨氏の共訳『古代バビロニアの歴史』—ハンムラビ王とその社会—1980年山川出版社刊、p. 231.〕』という解説文を記しておられる。このようにホルスト・クレンゲル氏は、この第239条の2行目にあった楔形文字を、第236条にすでに記載されたšeam (穀物) と同じものと判断して、他の多くの翻訳者のように「大麦」とは特定していない。この当時のメソポタミアでその田畑で収穫できた穀物 (šeam) が大麦 (še-gur) と特定して良いのかどうかは疑わしいが、中田一郎氏が一貫して翻訳用語として使用しているばかりでなく、解釈としては、一応穀物の中でも「大麦」であったろうことが、妥当しているようにも思われる。

数	5	𐎶	ham\$u	han\$et		𐎶	𐎶	ham\$u, ha\$šu	hamu\$tu
詞	6	𐎶	ši\$šu	ši\$še\$et	(序数)	𐎶	𐎶	ši\$šu, še\$šu	ši\$šitu
(基数)	7	𐎶	siba, sibi	sibittu		𐎶	𐎶	sibū	sibtu
	8	𐎶	samanu	samantu		𐎶	𐎶	samanu	samantu

第240条（原文・逐語訳）



sum-ma [elippum] ša ma-hi-ir-[tim]

mahāru 先立つ

もし 船が の 先行（？）

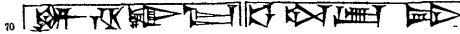
ここでは波れに沿って上下する



elippam ša mu-[uq]-qi₂-el-bi-[tim]

muqqēlbitu フェリーボート

船と の フェリー



im-ha-as ma ut-te-ib-bi

mahāsu 叩く、当たる

突き当たって、（それを）沈めた場合は



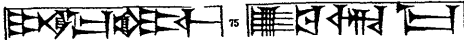
be-el elippim ša elippu šu te-bi-a-at

主は 船の 所の 船が 彼の 沈められた



mi-im-ma ša i-na elippi šu hal-qu₂

物は何でも 所の 中で 船の 彼の 失った



i-na ma-har i-lim u₂-ba-ar ma

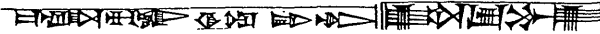
bāru 宣告する

で 前 神の 証言し、（その後で）



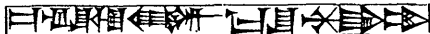
ša ma-hi-ir-tim ša

者は 先行の（？）所の



elippam ša mu-uq-qi₂-el-bi-tim u₂-te-ib-bu-u₂

船を の フェリー 沈めた



elippi šu u₃ mi-im-ma šu hal-ga-am

船 彼の と 物を 彼の 失われた



i-ri-a-ab sum

弁償する 彼に

第240条（試訳）

河川の流れに沿って上下する船（この船は後で第276条の賃貸借に出てくる）が、河川を横断する船と衝突して沈没させた場合は、その船を沈められたところの船主（被害者のほう）は、その船の中に積載していて失った品物の名（称）を神の前（神殿の神の像の前）で証言し、しかる後に流れに沿って上下する船の主（加害者）は、河川を横断する船の失われた品物とその船を弁償することとする。

第240条の解釈

この条文の文頭において、前の239条と同様アッカド語の楔が一部欠けていて正確な文章がわからないが、この条文で規定する船は、ティグリス河とユーフラテス河のような両大河を上流から下流へと移動する船と、河岸から河岸へ移動するフェリー・ボート（渡し船）との衝突を記述したものの、と思われる。その場合、当然のこととして回避義務を負うのは川を上（下）に移動する船で、渡し船のほうはその積載したものを、バビロニアの神の前で一定の形式に従って宣誓し、それから後に示談の交渉が始まるが、だいたい回避義務を負った河川を上流から下流に移動する船の船頭が、その船と積荷を損害賠償したものである。

このメソポタミア地方において、ティグリス・ユーフラテス両河川を上下する交易船はヘロドトス著『歴史』[qq. v.] の中で第1巻の第194章によれば、……*τὰ πλοῖα αὐτοῖσι ἐστὶ τὰ κατὰ τὸν ποταμὸν πορευόμενα ἐς τὴν Βαβυλῶνα, ἔοντα κυκλωτερέα, πάντα σκύτινα. ἐπεὰν γὰρ ἐν τοῖσι Ἀρμενίοισι τοῖσι κατύπερθε Ἀσσυρίων οἰκημένοι νομέας ἰτέης ταμόμενοι ποιήσωνται, περιτείνουσι τούτοις διφθέρας στεγαστρίδας ἔξωθεν ἐδάφους τρόπον, οὔτε πρύμνην ἀποκρίνοντες οὔτε*

πρώρην συνάγοντες, ἀλλ' ἀσπίδος τρόπον κυκλω-
 τερέα ποιήσαντες καὶ καλάμης πλήσαντες πᾶν τὸ
 πλοῖον τοῦτο ἀπιείσι κατὰ τὸν ποταμὸν φέρεσθαι,
 φορτίων πλήσαντες· μάλιστα δὲ βίκους φοι-
 νικηίους κατάγουσι οἴνου πλέους. ἰθύνεται δὲ
 ὑπὸ τε δύο πλήκτρων καὶ δύο ἀνδρῶν ὀρθῶν
 ἐστεώτων, καὶ ὁ μὲν ἔσω ἔλκει τὸ πλήκτρον ὁ δὲ
 ἔξω ὠθέει. ποιέεται δὲ καὶ κάρτα μεγάλα ταῦτα
 τὰ πλοῖα καὶ ἐλάσσω· τὰ δὲ μέγιστα αὐτῶν καὶ
 πεντακισχιλίων ταλάντων γόμον ἔχει. ἐν ἐκάστῳ
 δὲ πλοίῳ ὄνος ζωὸς ἔνεστι, ἐν δὲ τοῖσι μέζοσι
 πλεῦνες. ἐπεὰν ὦν ἀπίκωνται πλέοντες ἐς τὴν
 Βαβυλῶνα καὶ διαθέωνται τὸν φόρτον, νομέας
 μὲν τοῦ πλοίου καὶ τὴν καλάμην πᾶσαν ἀπ' ὧν
 ἐκήρυξαν, τὰς δὲ διφθέρας ἐπισάξαντες ἐπὶ τοὺς
 ὄνους ἀπελαύνουσι ἐς τοὺς Ἀρμενίους. ἀνὰ τὸν
 ποταμὸν γὰρ δὴ οὐκ οἶά τε ἐστὶ πλέειν οὐδενὶ
 τρόπῳ ὑπὸ τάχεος τοῦ ποταμοῦ· διὰ γὰρ ταῦτα
 καὶ οὐκ ἐκ ξύλων ποιεῦνται τὰ πλοῖα ἀλλ' ἐκ
 διφθερέων. ἐπεὰν δὲ τοὺς ὄνους ἐλαύνοντες ἀπί-
 κωνται ὀπίσω ἐς τοὺς Ἀρμενίους, ἄλλα τρόπῳ τῷ
 αὐτῷ ποιεῦνται πλοῖα.

……船には船首と船尾の別なく、

恰も盾のように円形で、藁がいっぱいつまっている。人々は荷を積み込む
 と川の流れを下ってゆく。積荷はその殆どがブドウ酒で赤粘土の壺の中に入
 っている。船は真直ぐ立った二人の男による竿で漕がれる。一人が手操
 ると他の一人は突いて押す。船の大きさはさまざまで、最も大きいものは
 5000タラントンぐらいまで積める。どの船にも一頭の生きたロバを乗せて
 おり、最も大きなものにはもう一頭乗せているに違いない。バビロンで積
 載物を人々に引き渡す時、彼らは船体や藁をも売り払ってしまうが、皮袋

だけはロバにのせ再びアルメニアへと帰ってゆく……」〔拙著『アルメニア史』泰流社 p.19参照。op. cit.,ヘロドトス『歴史』松平千秋訳、岩波文庫、青405-1、p145～146 も参照のこと〕

勿論ヘロドトスの生きていた時代は、ハンムラビ王の古代バビロニア時代からみて、年代的に考慮して約1,200年も後のことなので、同じような船がそのまま使われていたとは考えられないが、ティグリス・ユーフラテス両河川を上下する船は、だいたいこのように船頭2人で自由に方向が変えられるような機動性をもった船がそのまま使われ、両河川を横断する船は言わばフェリーだから積載重量も船の大きさもかなりものが使用され、自由に方向を変えられなかった、と判断すべきであろう。

なおこの第240条を翻訳した原田慶吉氏も、こうした船の運行について「撓船」と「帆前船」として訳し、その後に註をつけておられ、その訳文は「もし⁶⁷撓船が⁶⁹帆前船に⁷⁰突き当たりて、⁷¹沈めたるときは、⁷²沈める船の船主は、彼の船の中にて喪失し居れるものを、神の前において証明し、しかるのち帆前船を沈めたる撓船の者（船主）は、彼の船と喪失し居れる彼の何物かを、彼に賠償す。」〔loc. cit., p. 336〕としているが、その後につけた原田氏の註〔qq. v.〕として「(67-69行) 本来前者は流れに遡って櫂を撓ぐ船、後者は流れに乗って走れる船の意ならん。Lückenbill は前者は流れにそって上下する船、後者は流れを横ぎる船とする。」〔ibid.,〕と記しておられる。

この翻訳に対し、中田一郎氏は前者リュッケンビル（Lückenbill）氏の「(川) を遡る船」と「(川) を下る船」と同様に解釈して以下の如く「もし(川) を遡る船の船長の〔船〕が(川) を下る船の船長の船に衝突し、(川) を下る船の船長の船を) 沈没させたなら、沈没した船の所有者は彼の船のなかにあって無くなった物を神前で明らかにしなければならない。そして、(川) を下る船の船長の船を沈没させた(川) を遡る船の船長は、

彼（沈没した船の所有者）の船と無くなった物すべてを彼に償わなければならない。」〔loc. cit., p. 63-p. 64〕と翻訳しておられるが、はたしてどちらがその当時のナソポタミアの現実を正確に理解しているかはわからない。前述のホルスト・クレンゲル（Horst Klengel）氏も第234条からこの第240条までの解釈としては、この第240条だけ独立した文章において中田氏と同様「流れを遡っている船と流れを下っている船」とに分けて、その条文を「……流れを下っている船と遡っている船とが衝突した場合がさらに扱われている。傷ついた船とか衝突で沈められた下りの船の所有者は誓言した上で蒙った損害の価値を申告して弁償してもらう（240条）。きっと漕いで遡っている船の方がおそらく急スピードで帆走している下りの船よりも操舵の余裕があるものという前提があるのだ。……」〔op. cit., 江上・五味両氏共訳 p. 231〕と解釈しておられるようである。

第241条（原文・逐語訳）



šum-ma a-wi-lum alpam a-na ni-bu-tim

もし 人が 牛を に 抵当



it-te-bi 1/3 ma-na kaspim i-ša-qal

取ったならば 1/3 マナの銀を 支払う

第241条（試訳）

ある者が、牛を抵当（質種）に取ったならば、その値として3分の1 マナの銀（貨）（約170g 弱）を支払う。

第241条の解釈

アッカド語の文章が短く、正確なところはわからないが、抵当に取る（質の種として差し押さえる）ということはどうも勝手に牛を差し押さえたことらしく、そうした場合に3分の1 マナ（20シェケル）の銀の薄片を支払うべきもの、と解釈するしかなさそうである。それにしても20シェケルの銀（貨）を抵当の費用として支払うのはあまりにも高すぎるようで、単なる質借料とか抵当料ではないように思われる。多分マナというのは単なる通貨の単位だけではなく、何かの間違いか、他の深い意味があったのかも知れない。この第241条に関して原田慶吉氏は「もし人が牛を質に取りたるときは、銀3分の1 マヌー支払う。」[loc. cit., p. 336] と ni-bu-tim を質として解釈した上で、翻訳しておられる。

また中田一郎氏も同じく「質」という言葉を使用して「もし人が牛を質に取ったなら、彼は銀3分の1 マナ（約167グラム）を支払わなければならない。」[loc. cit., p. 64] とほぼ同様の訳文としておられる。今日の我々が「質」と言うと、金を借りる代わりに、保証として相手に預ける品物とかある約束を実行する保証として相手に預けておくものを意味することが多いが、この条文中にある楔形文字のアッカド語が、はたして ni-bu-tim という単語で今日の「質」を意味していたのであろうか、原田慶吉氏はアイラース Eilers 氏の論文を参照して、その〔註〕において「不法の差押？」と疑問符をつけて考慮しておられたようである。その場合に、不法の差し押えをする代価として3分の1 マナを抵当権料として支払ったのかどうか、当時の経済上の慣行を熟知していない我々には、その法制度的解釈にこれ以上立ち入って考慮することは些か難かしい、と言わざるをえない。

分数は次のように書く。

1/2 𐎶



1/3 𐎵

2/3 𐎶𐎵

5/6 𐎶𐎵𐎶

[ibid.,]

第242条 (原文・逐語訳)

ss				
Sum-ma	a-wi-lum	a-na	Sattim 1 i-gur	Sattu < mu
もし	人が	間 年	1 賃借するなら	
				a ₂ > id
a ₂	gud-da-ur ₃ -ra	4	še-gur	gud-da-ur ₃ -raまぐわの付いた牛
料金は 馬鋤つきの牛の 大麦 4 グルである				

第242条 (試訳)


ある者が、馬鋤のついた牛を1年間賃貸借するときは、その賃貸借料は穀物（大麦）にして4グル（約1,000リットル余の量を支払うこと）とする。

第242条の解釈

馬鋤つきの牛を1年間賃貸借する時の料金が、穀物（大麦）で4グルというのは約1,200シラ、今日でいう252cm³で約1,020リットルに相当すると思われるが、古代バビロニアでは「馬鋤つきの牛」はそのくらいの価値を有していたものと思われる。この第242条中にある単語で、一番問題となるのは、アッカド語の gud-da-ur₃-ra で、これを原田慶吉氏は疑問符つきで「軌畜 (?)」とし、中田一郎氏のほうは「後曳の牛」と解釈して、以下の如く翻訳なさっている。まず原田氏は、賃借する対象を出さないで「もし人が1年間賃借したるときは、軌畜 (?) の借料として、穀物4クル。」[loc. cit., p. 336] という訳文にし、中田一郎氏のほうは先に目的物を鉤括弧に入れてから「もし人が〈牛を〉1年間賃借したなら、後曳の牛の料金としては大麦4クル（約1,200リットル）」[loc. cit., p. 64] のように翻訳なさっている。一般的に「まぐわ（馬鋤）」と言うと、馬につけて引かせる鋤（鋤）のように思われているが、このハンムラビ法典第43条

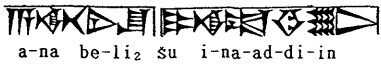
の解釈のところで言及したように、どこの世界でも農耕用の鋤や鋤には大小のみならず形や用途によって、さまざまなものが多種多様に存在していたように思われる。この第242条のアッカド語 *gud-da-ur₃-ra* が、中田氏の解釈するように「後曳の牛」だけを意味するものか、あるいは、第43条に出ているように「鋤 (*ma-a-a-ri*)」をも意味して「馬鋤で均す (*i-sa-ak-ka-ak*)」ことも含めた諸農具をも、その抵当 (質種) に差し押さえたものであるかどうか、は解釈の分れるところであるが、まず牛だけではない (馬鋤を常につけていた牛) と考える方が常識的ではないだろうか。

第243条 (原文・逐語訳)



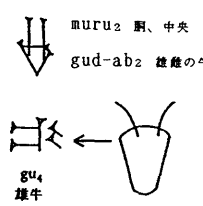
 a₂ gud-ab₂-muru₂-sag 3 se-gur

(上記で) 胴で繫いだ牛では大麦 3 グルを



 a-na be-li₂ su i-na-ad-di-in

に 主 その 与える



 muru₂ 胴、中央
 gud-ab₂ 雄雌の牛
 gu₄ 雄牛






第243条 (試訳)

(アッカド語の文章は前の第242条から続いており、ある者が) 胴で繫いだ牛を (1年間のあいだ質貸借する場合には) 穀物 (大麦) 3 グル (約 900 シラ ≒ 765 リットル) を、その牛の飼い主に支払うこととする。

第243条の解釈

この条文で記載されているような「胴で繫いだ牛」を借りる場合、前の第242条よりはだいぶ作業がはかどるわけだから、こちらのほうが質貸料

が高いと思われるが、当時の古代バビロニアの時代では「馬鋤つきの耕作道具」のほうが牛1頭よりも高く評価されていたとみえ、第242条のほうが高く見積られている。穀物（大麦）3グルは900シラ、189cm³で765リットルにあたる。この第243条の楔形文字で一番問題となるのは gud-ab₂-muru₂-sag の解釈であろう。一般的に雄牛だけを意味するのは楔形文字原文と逐語訳の右側に引用した「gu₄」で、gud-ab₂は雄と雌の両性を含むどちらの性も指し示さない「牛」のことで、この象形文字（絵文字）から楔形文字への発達は

					gud gu ₄ ab ₂	alpu lid	牛	(ibid.,)
---	---	---	---	---	---	-------------	---	----------

で示されるが、その後の muru₂（中央、胴）をどのように解釈するかが問題である。飯島紀氏はこの後に続く -sag を「繋ぐ」と解釈して「胴で繋いだ牛」と逐語訳しておられるが、中田一郎氏は第242条の「後曳の牛」と関連するとみて「中曳きの牛」と解釈しているようである。筆者はこの -sag を「軛 yoke をかけたもの」と解釈し、牛の胴の中程を軛で結びそれを鋤か鋤で引かせるようにしたものではないかと思うのだが、これを原田慶吉氏は、牛の種類は不明という〔註〕を後につけて〔qq. v.〕以下のように文頭を想定符として「……牛の借料として、穀物3クールをその主に与う。」〔loc. cit., p. 336〕と翻訳なさっておられる。この翻訳手法に対して、中田一郎氏のほうは、普通の文章として書き出した形で「中曳きの牛の料金としては大麦3クル（約900リットル）をその所有者に与えなければならない。」〔loc. cit., p. 64〕という翻訳文を掲載なさっている。この第243条の条文は、アッカド語の文章としては2ヶ条前の第241条から始まっていると考えられるが、はたしてこの「料金」という訳語が適当であるかどうかは疑問である。

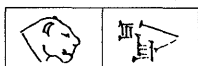
この第234条の末 i-na-ad-di-in（与える、与う、支払う）を中田氏は命

令文で「与えなければならない」と訳しているが、この動詞のところに關して、ハンムラビ法典のスーサで発掘された石柱は、その裏面に刻された楔形文字が上から第20欄がすべて左端（少し脇のほう、側面にまで達している）で終り、次の第244条の最初から第21欄が始まり、その場所は裏面というよりも少し裏から見て右側のほうから、下側に段を変えて読み始めてゆくことになる。

第244条（原文・逐語訳）

/	sum-ma	a-wi-lum	alpan imēram i-gur ma
もし	人が	牛や	驢馬を 賃借したが、
i-na	ši-ri-im	ur-mah	id-du-uk šu
で	野	ライオンが	殺したなら それを
a-na	be-li ₂	šu	ma
側に	主	その	（損害はある） [loc. cit., p. 172]

古拙文字



		ug ₂	labbu	ライオン
		ne ₃	ne ₃	

第244条（試訳）

ある者が、牛や驢馬を賃借したが、原野でライオンがその家畜を殺害したような場合には、その持ち主側が（牛や驢馬の）損害を負担することになる。

第244条の解釈

この第244条は、賃借した家畜の賠償について規定されており、牛や驢馬などを賃借したアウィルム階層の者が、それらを原野につれていった時

などに、その賃借した家畜がライオンに襲われて殺されたとしても、それは不可抗力 (vis major) によるものとして、アウィルム階層の者に損害賠償義務を負わせてはいない。これはタリオ主義原則の例外と言える規定である。

この規定は、セム語系民族のあいだで賠償する側はそのまま詳細な規定に発展していったものと思われる。ハンムラピ法典の第244条ではライオンという象徴的な野性獣の例によって規定されているが、旧約聖書『出エジプト記』第22章9節から14節までに、賃借した家畜についての損害賠償がかなり細かく規定され、その中で第12節が「野獣にかみ殺された場合は、証拠を持って行く」とハンムラピ法典よりも証拠提出義務が附加された規定となって発展する。〔The NIV. “Inlerlinear Hebrew-English, Old

כִּי- יִתֵּן אִישׁ אֶל-				Testament” Zondervan, p. 207)			
to man he-gives if (9)				(「出エジプト記」第22章、9 節～14節)			
רֵעוֹ	חֲמֹר	אוֹ- שׁוֹר	אוֹ- שֶׂה	וְכָל-	בְּהֵמָה	לְשֹׂמְרָהּ	
neighbor-of-him	donkey	or	ox	or	animal	to-safekeep	
וּמָת	אוֹ- נֹשֶׁבֶר	אוֹ- נִשְׁבָּה	אֵין	רֹאֶה:	שְׁבַעַת		
and-he-dies	or	he-is-injured	or	he-is-taken-away	no-one	looking	(10)
יָהוָה	תִּהְיֶיהָ	בֵּין	שְׁנֵיהֶם	אִם-	לֹא	שָׁלַח	יָדוֹ
Yahweh	she-must-be	between	two-of-them	that	not	he-laid	hand-of-him
בְּמִלְאָכָהּ	רֵעוֹהּ	וְלָקַח	בְּעָלָיו	וְלֹא			
on-property-of	neighbor-of-him	then-he-will-accept	owners-of-him	and-not			
יִשְׁלָם:	וְאִם-	נָגַב	יִנָּבֵה	מֵעִמּוֹ			
he-must-restitute	but-if	to-be-stolen	he-was-stolen	from-with-him			(11)
יִשְׁלָם	לְבָעָלָיו:	אִם-	טָרַף	יִטָּרֵף			
he-must-restitute	to-owners-of-him	if	to-be-torn	he-was-torn			(12)
יְבִאֵהוּ	עֵד	הַטָּרְפָה	לֹא	יִשְׁלָם:	וְכִי-		
he-shall-bring-him	evidence	the-torn-animal	not	he-must-repay	and-if		(13)

יִשְׁאֵל אִישׁ מֵעַם רֵעֵהוּ וְנִשְׁבֵּר אוֹ-מֵת
he-dies or and-he-is-injured neighbor-of-him from-with man he-borrows

בְּעֵלָיו אֵם-יִשְׁלֹם: שְׁלֹם אֵיךְ עִמּוֹ
owners-of-him if (14) he-must-restitute to-restitute with-him not owners-of-him

עִמּוֹ לֹא יִשְׁלֹם אִם-שָׂכִיר הוּא בָּא בְּשָׂכְרוֹ: [ibid.,]
by-hire-of-him he-covers he hired if he-must-repay not with-him

人が隣人にろば、牛、羊、その他の家畜〔上記ヘブライ語の英訳〕In all cases of illegal possession of an ox, a donkey, a sheep, a garment, or any other lost property about which somebody says, 'This is mine,' both parties are to bring their cases before the judges. The one whom the judges declare guilty must pay back double to his neighbor.

を預けたならば、それが死ぬか、傷つか、奪われるかして、しかもそれを見た者がいない場合、自分は決して隣人の持ち物に手をかけなかった、と両者の間で主に誓いが必要ならなければならない。そして、所有者はこれを受け入れ、預かった人は償う必要はない。ただし、彼のところから確かに盗まれた場合は、所有者に償わねばならない。もし、野獣にかみ殺された場合は、証拠を持って行く。かみ殺されたものに対しては、償う必要はない。(上、9節～12節)

人が隣人から家畜を借りて、それが傷つくか、死んだならば、所有者と一緒にいなかったときには必ず償わねばならない。もし、所有者と一緒にいたならば、償う必要はない。ただし、それが賃借りしたものであれば、借り賃は支払わねばならない (14節)。

〔新共同訳『聖書』日本聖書協会 p. 130〕

原田慶吉氏は「もし人が牛馬を賃借したるに、野の中にて獅子がそれを



¹⁰“If a man gives a donkey, an ox, a sheep or any other animal to his neighbor for safekeeping and it dies or is injured or is taken away while no one is looking, ¹¹the issue between them will be settled by the taking of an oath before the LORD that the neighbor did not lay hands on the other person's property. The owner is to accept this, and no restitution is required. ¹²But if the animal was stolen from the neighbor, he must make restitution to the owner. ¹³If it was torn to pieces by a wild animal, he shall bring in the remains as evidence and he will not be required to pay for the torn animal.

¹⁴“If a man borrows an animal from his neighbor and it is injured or dies while the owner is not present, he must make restitution. [ibid.,]

殺したときは、〔損害は〕正しくその主に。〕〔loc. cit., p. 337〕とこの条文を訳しておられるが、中田一郎氏のほうは「もし人が牛あるいはロバを賃借し、ライオンが野でそれ（賃借した家畜）を殺したなら、（その損害は）その所有者に帰属する。〕〔loc. cit., p. 64〕のようにこの第244条を翻訳しておられる。はたして ur-mah というアッカド語が、「野性の猛獣」を意味していることだけはこの条文において当然理解できるが、今日のアフリカにいるようなライオンが中近東のメソポタミアにもいたのか、という問題がある。古代ローマが帝政期にイタリア半島から現在のシリアあたりまで領域とした、その範囲内にはすでにライオンもおり、古代バビロニアにもそれを描いた図像が多く残されていることから、この ur-mah が楔形文字原文と逐語訳の右脇に示した ug₂（バビロニア）や labbu（アッシリア）の用語〔第244条の右図参照〕で意味したライオンとほぼ同じものであったろう、と想定できるのである。

この第244条の文頭からハンムラピ法典の石柱裏面に刻まれた楔形文字の欄は上から第21番目の欄に入り、この第1行目が第21欄（段落）の右上から下に読み、次がそれから左へと移行してゆくように読んでゆくことになる。

第245条（原文・逐語訳）


Sum-ma a-wi-lum alpaṁ i-gur ma
もし 人が 牛を 賃借したが、

i-na me-gu-tim uš lu i-na ma-ha-zi-im
のため 不注意 又は のため 打擲

10
 us-ta-mi-it al-pam ki-ma al-pim
 殺したときは 牛を 同じ 牛と

 a-na be-el al-pim i-ri-a-ab
 に 主 牛の 弁償する

第245条（試訳）

ある者が、牛を賃貸借したところ、その牛を不注意によってかあるいは打擲したために、死亡させてしまったようなときは、牛の所有者に対し、その牛と同じような（価値の）牛をもって、弁償しなければならないものとする。

第245条の解釈

賃貸借した牛を死なせてしまった時、これもタリオの原則に従って同等の牛をもってその所有者に返還しなければならない、という一般的なタリオ主義が貫かれている条文である、と思われる。一般的にタリオ法規 Lex talionis は刑事法上の原則とみられているが、その語源 talio < talis、からして「同じもの、似たようなもの、このようなもの」といった意味のところから派生した古代ラテン語であり、その語源から考慮してもこのような民事法上の損害賠償のほうが先行していた、と考えられている。

旧約聖書では、その『出エジプト記』第22章13節で、牛とは限定せず、「借りた家畜を傷つけるか死なせてしまった場合、所有者と一緒にいなかったときには必ず償わなければならない」（ibid.,）と規定され、タリオ主義の原則を直接表に出すヘブライ語の文章とはなっていない〔直前の第244条の解釈を参照のこと〕。そこでは、所有者と一緒にいるかいらないかに

よって償うか償わないかの原則が決ってくるのである。この第245条を原田慶吉氏の翻訳としては「もし人が牛を賃借して、不注意の結果、あるいはまた殴打の結果、死亡せしめたときは、〔その〕牛に相当する牛を、牛の主に賠償す。」〔loc. cit., p. 337〕のように記されており、その後かなりたってから翻訳した中田一郎氏は「もし人が牛を賃借し、不注意あるいは殴打によって死なせたなら、彼は牛の所有者に同等の牛を償わなければならない。」〔loc. cit., p. 64〕と記しておられる。

第246条（原文・逐語訳）

	
sum-ma a-wi-lum alpam i-gur ma	
もし 人が 牛を 賃借したが、	
	
sēpi šu is-te-bi-ir u ₃ lu la-bi-a-an šu	sēpu < gir ₃
足を その 折り 又は 腱を その	
	
it-ta-ki-is alpam ki-ma alpim	nakāsu 切る
切った時は 牛を 同じ 牛と	
	
a-na be-el alpim i-ri-a-ab	
に 主 牛の 弁償する	

第246条（試訳）


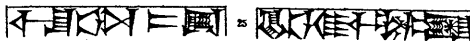

ある者が、牛を賃借したが、その足を折ってしまったかあるいはまた（牛の）腱を切ってしまった時は、牛の所有者に対し、その牛と同じような牛をもって、弁償しなければならない。

第246条の解釈

この条文で規定するところは、タリオの原則から言えば完全に同等ではないように思えるが、牛が足の腱を切るか足を折ってしまった場合、その牛を貸し出して労働にあたらせることができなくなってしまったわけであり、このような場合は同等の牛を弁償することになる。原田慶吉氏はこの条文を「もし人が牛を賃借して、その足を折り、あるいはまた筋頸の腱を切り取りたるときは、〔その〕牛に相当する牛を、牛の主に賠償す。」

〔loc. cit., p. 337〕と訳しており、これに対して中田一郎氏はその翻訳文として「もし人が牛を賃借し、その足を折ったかあるいは首の筋を切ったなら、¹³⁸⁾彼は牛の所有者に同等の牛を償わなければならない。」という内容に変えており、特に第2行目の末にある *la-bi-a-an* を原田氏が「筋頸の腱を切り取りたるとき」とあったところを「首の筋を切ったなら」と変えたところに、138) という脚注〔qq. v.〕をつけ「138) p テキストには、『法典』碑の「その足を折ったかあるいは首の筋を切ったなら (*GÎR-šu iš-te-bi-ir û lu la-bi-a-an-šu*)」とは異なり、「その足を折ったかあるいはその腰部の皮に傷をつけたなら (文字どおりには、皮を剥いだなら) (*GÎR-šu iš-te-bi-ir û lu gi-li-is-sû iš-ta-ḫa-aṭ*)」とある。」〔loc. cit., p. 64〕と解説している。なお、この p テキストとは中田氏の著書の巻末で BM16567 (unpublished, identified by H. Figulla)//XLII64-81(?), XLIV7-27, XLIV95-XLV3(?)(OB?) 〔loc. cit., p. 212〕とあり、未公刊のテキストであることがわかるが、ここまで解釈の詳細な箇所こだわらなければならないのかどうか疑問である。いずれにせよこの第246条の規定する内容は、その牛が歩行できないような状態になったこと、従って *la-bi-a-an* は (牛の脚部にあたる) 腱とする、ことで十分な解釈となるのではないだろうか。

第247条（原文・逐語訳）


 sum-ma a-wi-lum alpam i-gur ma
 もし 人が 牛を 賃借したが、

 in šu uh₂-tab-it kaspi mi-si-il šimi šu
 目を その 潰したなら 銀を 半分の 値の その

 a-na be-el alpim i-na-ad-di-in
 に 主 牛の 与える

第247条（試訳）

ある者が、牛を賃貸借したが、その目（眼球）を潰してしまったような場合に、牛の所有者に対し、その牛の価値の半額を銀（貨）で弁済しなければならないものとする。

第247条の解釈

前の第246条では、牛の足を折ったりして歩けなくなったのだからその牛と同等の牛をもって弁済しなければならなかったが、この第247条は牛の目を潰してしまったために歩行が困難になったから、どうやらその半額を弁済すれば足りる、という単純な論理であろう。この条文を原田慶吉氏は「もし人が牛を賃借して、その眼を潰したときは、その値の半を銀にて牛の主と与う。」〔loc. cit., p. 337〕と翻訳し、それに対して中田一郎氏のほうは、その訳文として「もし人が牛を賃借し、その目を損ったなら、彼は牛の所有者にその値段の半分の銀を与えなければならない。」〔loc. cit., p. 65〕という文章を訳しておられる。第247条のような短い文章で、しかも第246条と密接に関連する「牛の身体」に関する内容を規定したこの条文において、これ以上解釈することは難しいのではなからうか。

第248条（原文・逐語訳）

								一番下に続く			
šun-ma a-wi-lum alpam i-gur ma				もし 人が 牛を 賃借したが、							
				角を その 折り その尾を 切ったり							
qarni šu iš-bi-ir zibba-zu it-ta-ki-is											
				又は 肉 背中の その 切り落としたなら							
u ₃ lu šer pasutti šu it-ta-sa-ak											
				銀を 1/4 の 値の その 与える							
kaspi igi 4 gal simi šu i-na-ad-di-in											

第248条（試訳）

ある者が牛を賃貸借したが、その角を折ったりその尾を切ったりその背中の肉をそり落としたりした場合には、その牛の価格の4分の1を銀（貨）で弁済しなければならないものとする。

第248条の解釈





アウィルム階層の者が牛を賃借して、角や尾を切って売ったりあるいはその肉の一部分を切り取って（食用にしたような）場合に、前の第247条の更に半額、すなわちその牛の価格の4分の1を銀（貨）で支払えばよい。直前の第247条は目を潰されて歩行に支障が出たのだから半額の弁済であったが、こちらのほうはおそらく牛の一部分を切り取ってもまだ生きているのだから、更にその半額にあたる4分の1の価格を支払えばよい、という論理であろう。

ハンムラピ法典においては、家畜の例として、この牛の規定だけが出て

いるが、他の家畜もだいたいこの牛の例によって、その類推からその損害賠償の額面が決められていたのではないか、と思われる。

この賠償額に関して、1/4か1/5、について楔形文字の解釈が分れ、原田慶吉氏はこれを1/5、一方の中田一郎氏は一応1/4としながらも括弧の中に1/5と疑問符つきで入れてある。また原田慶吉氏はこの第3行目の *lu šēr pasutti* を「〔鼻〕輪のところの肉」と解し、中田氏のほうは同じ楔形文字のアッカド語を「ひずめ腱」と解しているようである。それではこの第248条の原田氏の訳は「もし人が牛を賃借して、その角を折り、その尾を切り取り、あるいはまた〔鼻〕輪のところの肉をひきちぎりたるときは、その値の5分の1を銀にて与う。」[loc. cit., p. 337] となっており、それに対して中田一郎氏の翻訳は「もし人が牛を賃借し、その角を折るか、尾を切断するか、あるいはひずめの腱を切ったなら、彼はその値段の4（あるいは5？）分の1を与えなければならない。」[loc. cit., p. 65] としている。これらをどう解するかがこの第248条の難しいところであるが、いずれにせよ牛の（生・死には関わらないような）どこかの肉を切り取ったぐらゐに解釈することが妥当で、その箇所は単なる例として規定したものにすぎない、ことは明らかであろう。

第249条（原文・逐語訳）

						
<i>šum-ma</i>	<i>a-wi-lum</i>	<i>alpam</i>	<i>i-gur</i>	<i>ma</i>		
もし	人が	牛を	賃借したが、			
						
<i>i-lum</i>	<i>im-ha-zu</i>	<i>ma</i>	<i>im-tu-ut</i>			
神が	打って、	死んだときは				

40 
a-wi-lum sa alpam i-gu-ru

人は 所の 牛を 賃借した


ni-is i-lim i-za-qar ma u2-ta-aš-šar mašāru 自由に行く

もとで 神の 証言すれば 自由に行く

第249条（試訳）

ある者が牛を賃貸借したが、神がその牛を打って（理由がわからない突然死で）死亡させたる時は、その牛を賃借したる者は神のもとで誓約をせねばならず、（その後、その者は）放免され、自由になる。

第249条の解釈

原文のアカド語を読めばわかるように、牛を賃貸借したのがアウィルム階層の者でなければならず、また神が打って（an act of God）牛を殺したということは、その賃借した牛が説明不可能な方法（日射病とか雷など）で、あるいは不可抗力（仏 par force majeure クラテン語 vis maior）によって死亡したことを意味するものであろう。そのような場合に、この牛を賃借したアウィルム階層の者は神殿などの神の前で、全く不可抗力によって（un cas de force majeure）この牛が死亡したことを神にかけて誓わねばならず、そうした一連の手続きを経て、無罪の推定がなされて、放免されるものとする。この第249条の条文を原田慶吉氏は「もし人が牛を賃借したるに、神がこれを擲ちて、死亡したるときは、牛を賃借したる者は、神のもとに誓いて、放免せらる。」〔loc. cit., p. 337〕と訳しており、中田一郎氏は神が打つを「病気が原因で」と括弧つきで以下の如く「もし人が牛を賃借し、神がそれを打ち（病気が原因で）、（牛が）死んだなら、牛を賃借した人は、神に誓ったのち釈放される。」〔loc.

cit., p. 65] というように翻訳しておられる。このように単純な条文にあってはその翻訳において各研究者の解釈もあまり差が出てこないようである。いずれにせよ、現代においても家畜としての牛には原因不明の病気、例えば狂牛病（BSE 海綿状脳病）などで死亡することがあり、後の第267条のようにその牛を飼育する牧人の場合においては牛の病気を治療して、もとの持ち主に返せばよかったが、単に賃借した者の場合、このような手続きを踏んでその責任を免かれたのが、古代バビロニア社会の掟であったようだ。

第250条（原文・逐語訳）

šum-ma	alpum	zu-ga-am	i-na	a-la-ki	šu	sūqu	道路、市場		
もし	牛が	道路を	中に	歩行	その				
a-wi-lam	ik-ki-ib	ma	us-ta-mi-it			nakāpu	角で刺す		
人を	突き倒して、	殺したとしても							
di-nu-um	šu-u ₂	ru-gu-um-ma-am	u ₂ -ul	i-šu					
場合	この	罰は	全くない						

第250条（試訳）

ある牛が、道路を歩行中にある者を角で突いて殺したとしても、この事例からは何の罪科も生じるものではない。

第250条の解釈

このアッカド語による楔形文字原文は短いが、解釈はかなり厄介であ

る。古代バビロニアにおいて、この条文から一切何の罪科も生じないとみるべきで、牛に対する処罰にも言及していないが、同じセム系言語文化を継承するユダヤ法においては、旧約聖書『出エジプト記』第21章28節において、牛の所有者には罪がないものとされるが、その牛は石で打ち殺され、その肉は食べてはならない、という規定となって最終的に定着する。

(ここから左方向へ読む)

יָנָה וְיָקָר יָנָה שׁוֹר אֶת־אִישׁ אִם אֶת־אִשָּׁה
he-gores and-if (28) woman *** or man *** bull

וְיָמָת סֶקוּל יִסָּקֵל הַשּׂוֹר וְלֹא יֵאָכֵל
so-he-dies to-be-stoned he-must-be-stoned the-bull and-not he-may-be-eaten

אֶת־בִּשְׂרוֹ וּבֶעֱלֵי הַשּׂוֹר וְיָקָר : (右から左の順で下に読む)
meat-of-him *** but-owner-of the-bull not-liable

^{28/} If a bull gores a man or a woman to death, the bull must be stoned to death, and its meat must not be eaten. But the owner of the bull will not be held responsible. (同英訳)

[The NIV “Interlinear Hebrew-English Old Testament” Edited by John R. Rohlenberger III, Zondervan p. 205]

²⁸ 牛が男あるいは女を突いて死なせた場合、その牛は必ず石で打ち殺されなければならない。また、その肉は食べてはならない。しかし、その牛の所有者に罪はない。〔新共同訳『聖書』日本聖書協会、p. 104〕

ローマ法大全 (Corpus Iuris Civilis) においては、ユスティニアヌス帝の法学提要 Institutiones の第 4 巻第 9 章において「もし四足獣がいてその獣が害を加えた、と言われた時（は、以下の規定によって処理すべきである）si quadrupes pauperiem fecisse dicitur」という規定が設けられているが、これは牛だけでなく四ツ足の獣が、唯がしかけたものでもなく、人に害を加えた場合、それを表題にあるように、パウペリエス pauperies（四足獣による損害）として、十二表法で定めた規定がそのまま適用されるとされ、その獣の所有者が「損害を加えられたものの 2 倍額を賠償する」というのが、東ローマ帝国では一般的になってきたようで

ある。

いずれにせよ「違法におこなれた損害ではなく」本文にもあるように「意識を欠く動物は違法をおこなったと言われることがないからで、これが加害訴権 *noxalem actionem*（下に示した1の前の末尾の熟語）に関する本来の理由と考えられているから、である。それに関する「法学提要」の原文は以下の通り。

SI QUADRUPES PAUPERIEM FECISSE DICITUR


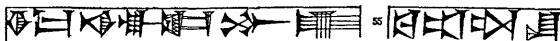
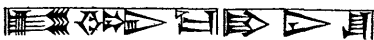

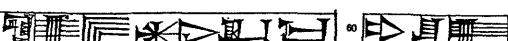


Animalium nomine, quae ratione carent, si quidem⁸ lascivia aut fervore aut feritate pauperiem fecerint, noxalis actio lege duodecim tabularum prodita est (quae animalia si noxae dedantur, proficiunt reo ad liberationem, quia ita lex duodecim tabularum scripta est): puta si equus calcitrosus calce percusserit aut bos cornu petere solitus petierit. haec autem actio in his, quae contra naturam moventur, locum habet: ceterum si genitales sit feritas, cessat.⁹ denique si ursus fugit a domino et sic nocuit, non potest quondam dominus conveniri, quia desinit dominus esse, ubi fera evasit. pauperies autem est damnum sine iniuria facientis datum: nec enim potest animal iniuriam fecisse dici, quod sensu caret. haec quod ad noxalem¹⁰ actionem pertinet.

1 Ceterum sciendum est aedilicio edicto prohiberi nos canem verrem aprum ursum leonem ibi habere, qua vulgo iter fit: et si adversus ea factum erit et nocitum homini libero esse dicetur, quod bonum et aequum iudici videtur, tanti dominus condemnatur, ceterarum rerum, quanti damnum datum sit. dupli. praeter has autem aedilicias actiones et de pauperie locum habebit: ¹¹numquam enim actiones praesertim poenales de eadem re concurrentes alia aliam consumit.

この第250条の条文を、ローマ法学者である原田慶吉氏は「もし牛が道路を通行中人を突きて、死亡せしめたるときは、その場合は請求権決して

なし。〕〔loc. cit., p. 337〕と翻訳し、アッカド語研究者の中田一郎氏のほうは「もし牛が道を歩いていて、人を突き死なせたとしても、この事例は（損害賠償）請求の対象とはならない。〕〔loc. cit., p. 65〕と訳しており、その事例があまり複雑でないためにその解釈の違いにそれ程変化がない。

第251条（原文・逐語訳）


 sum-ma alap a-wi-lim na-ak-ka-a[m ma] naggapu 突き刺す者
 もし 牛が 人の 突く性質があるので、

 ki-ma na-ak-ka-pu-u₂ ba-ab-ta šu
 のように「突き刺す者」 欠点を その

 u₂-še-di-šum ma qar-ni šu idū 知る
 知らせたが、 角を その

 la u₂-šar-ri-im alpi šu šarāmu パッドで保護する
 ず 保護せ また 牛を その

 la u₂-sa-an-ni-iq ma alpum šu-u₂
 ないため 繫が 牛が その

 mār a-wi-lim ik-ki-ib ma
 子を 人の 刺して

 uš-ta-mi-it 1/2 [ma]-na kaspim i-[na]-ad-di-in
 殺したならば 1/2 マナの銀を 支払う

第251条（試訳）

ある者の（所有する）牛が、角で突く性質があるので、その牛は「突き刺す癖あり」とその都市の行政区域担当者から告知はされていたが、その角を保護せず、また牛が繋がれていなかったために、その牛がアウィルム階層の子供（家族）を刺し殺したならば、その者は2分の1 マナ（約250 g）の銀（貨）を支払わなければならないものとする。

第251条の解釈

この規定は、アウィルム階層の所有する、突く癖のある牛が同じアウィルム階層の子供を突き殺した例として、このハンムラビ法典の第251条に規定されているものであるが、その罰金2分の1 マナ（30シェケル）という額は、そのまま旧約聖書の『出エジプト記』第21章30節の奴隷を突いた額に、（全く変更されずに）引用されているものと思われる。そして、その後の法文化の展開によって、所有者は死刑に処せられるか、要求されたままの賠償金を支払わなければならない、という相当厳格な規律となって明文化され、ユダヤ教の律法からタルムードへの発展の基礎に位置づけられている。

しかしながら、多くのアッシリア学者によって、この突く牛に関する規定が旧約聖書に導入されたのはハンムラビ法典よりもわずかに先行して公布された『エシュヌナ法典』（イラクのバグダット近郊テル・ハルマルで発掘）という現在までに見つかっている最古のアッカド語法典に由来する、と考えられている。だが罰金額については、エシュヌナ法典では奴隷についての銀（貨）15シェケル、アウィルムに対しては3分の2 マナとなっており、第三者が牛の所有者に警告するという旧約聖書の記述に則しただけで、エシュヌナ法典からの直接導入というには余りにも短絡すぎる結論と思われる。

因みに旧約聖書『出エジプト記』では

וְאִם שׂוֹר נָחַ	(ヘブライ語原文ここから左そして下に読む)		
he-gored bull but-if (29)			
וְהָיָה כִּי יִשְׁמְרֵנוּ וְלֹא יִשְׁמְרֵנוּ	רוֹא מִתְמַל שְׁלֹשָׁם וְהוּעַד בְּבָעָלָיו		
he-penned-him but-not to-owner-of-him and-he-was-warned past on-yesterday he			
וְהָיָה אִישׁ אִשָּׁה הַשּׂוֹר יִסְקַל וְגַם בְּעָלָיו	וְהָיָה אִישׁ אִשָּׁה הַשּׂוֹר יִסְקַל וְגַם בְּעָלָיו		
owner-of-him and-also he-must-be-stoned the-bull woman or man and-he-kills			
וְהָיָה אִם כָּפַר יִשְׁתָּ עָלָיו וְהָיָה	יִשְׁתָּ עָלָיו וְהָיָה אִם כָּפַר יִשְׁתָּ עָלָיו		
then-he-may-pay from-him he-is-demanded payment if (30) he-must-die			
וְהָיָה נֶפְשׁוֹ כָּל־אֲשֶׁר יִשְׁתָּ עָלָיו אִם בֶּן	פְּדִיּוֹן נֶפְשׁוֹ כָּל־אֲשֶׁר יִשְׁתָּ עָלָיו		
son if (31) from-him he-is-demanded that by-all life-of-him redemption-of			
וְהָיָה אִם בָּתּוּלָה יִשְׁתָּ עָלָיו וְהָיָה	וְהָיָה אִם בָּתּוּלָה יִשְׁתָּ עָלָיו		
to-him he-applies the-this also-the-law he-gores daughter or he-gores			
וְהָיָה אִם עֶבֶד יִשְׁתָּ עָלָיו וְהָיָה	וְהָיָה אִם עֶבֶד יִשְׁתָּ עָלָיו		
thirty silver-of female-slave or the-bull he-gores male-slave if (32)			
וְהָיָה אִם עֶבֶד יִשְׁתָּ עָלָיו וְהָיָה	וְהָיָה אִם עֶבֶד יִשְׁתָּ עָלָיו		
he-must-be-stoned and-the-bull to-masters-of-him he-must-pay shekels			

²⁹ただし、もし、その牛に以前から突く癖があり、所有者に警告がなされていたのに、彼がその警告を守らず、男あるいは女を死なせた場合は、牛は石で打ち殺され、所有者もまた死刑に処せられる。³⁰もし、賠償金が要求された場合には、自分の命の代償として、要求されたとおりに支払わねばならない。³¹男の子あるいは女の子を突いた場合も、この規定に準じて処理されねばならない。³²もし、牛が男奴隷あるいは女奴隷を突いた場合は、銀30シケルをその主人に支払い、その牛は石で打ち殺されなければならない。〔新共同訳『聖書』日本聖書協会 p. 129、但しアンダーラインのところは筆者による〕





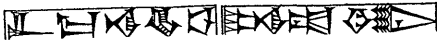

(上の文の英訳は) ²⁹If, however, the bull has had the habit of goring and the owner has been warned but has not kept it penned up and it kills a man or woman, the bull must be stoned and the owner also must be put to death. ³⁰However, if payment is demanded of him, he may redeem his life by paying whatever is demanded. ³¹This law also applies if the bull gores a son or daughter. ³²If the bull gores a male or female slave, the owner must pay thirty shekels of silver to the master of the slave, and the bull must be stoned. [loc. cit., p. 205]

なお、この第251条の条文にある ba-ab-ta (bābtum) というアッカド語に「都市の行政区、都市の門」を意味し「その行政上の役人が牛の所有者に警告を発する」と解する解釈もあるがあまりにも行政的な制度がゆき亘っていると考えすぎているので、ここでは「その欠点」とだけ訳しておくことにする。bābta は bābtum の単数与格だから「その行政区域の門のところで……」と解釈することもできる。

この第251条のほうは、前の第250条と違って旧約聖書などとの関わりが深くあるせいか、その翻訳と解釈について各研究者にかなりの違いが出ている。まず原田慶吉氏の翻訳を見てみると「もし人の牛が突く癖ありて、突く癖あるものとして、彼の『門』(163条参照)が彼に知らしめたるに、その角を短く切らず、その牛を繋かず、ためにその牛が「人の息」(7条参照)を突きて、死亡せしめたるときは、銀半マヌーを与う。」[loc. cit., p. 337] という文章となっており、それに対して中田一郎氏のほうはウェストブルック氏などの解釈や論文を根拠に、以下の如く翻訳し「も〔し〕人の牛が突〔く癖があり〕、彼の地区(当局)が、突く癖があることを彼に知らせていて、(しかも)彼がその角を切らず彼の牛の監視をせず、(その結果)その牛がアヴィールム仲間¹⁴⁰⁾を〔突〕き死〔なせたなら〕、彼は銀2分の1〔マ〕ナ(約250グラム)¹⁴¹⁾を与えなければならない。」[loc. cit., p. 65] という文章の中に二ヶ所の脚注〔qq. v.〕を以下の如く「140) R. Westbrook は『アヴィールムの息子』と理解する (*Studies*, pp. 57-58)。§§251-252については、エシュヌンナ『法典』の並行例§§54-55を参照。奴隷を突き殺した場合は、15シキル(約124.5グラム)の賠償金を支払うべしとなっている。141) これは§207の殴り合いでアヴィールムを死亡させた場合の賠償額と同じである。なお、同じ事例を扱うエシュヌンナ『法典』§54では、3分の2マナとなっている。」という解説を下に加えて、この第251条を解釈しているようである。なお、アヴィールム階層の子

供というのは、子供だけでなく全家族を含む、と解釈すべきだろう。

第252条（原文・逐語訳）

 分数は次のように書く。
 [sum-ma] warad a-wi-lim 1/2  1/3  2/3 
 もしそれが 奴隷なら 人の
 5/6 
 1/3 ma-na kaspim i-na-ad-di-in
 1/3 マナの銀を 支払う

第252条（試訳）

（アッカド語の文章は、前の第251条より続いていて、以前から突く癖のある牛が突き殺した相手が）アウィルム階層の所有する奴隷なら、（その牛の所有者たるアウィルム階層の者は、その奴隷を所有していたアウィルム階層の者に）3分の1マナ（約170g弱）の銀（貨）を支払うこととする。

第252条の解釈

ハンムラピ法典においては、アウィルム階層の子供（家族）が殺されても2分の1マナで、この第252条のようにアウィルム階層の所有する奴隷が殺された場合においてさえ3分の1マナ（20シエケル、約170g弱に相当する）と、それ程大きな差が無く、損害賠償の額面が規定されている。

それに比較すると、旧約聖書のほうはユダヤ民族の自由人に対する賠償額は際限なく拡大され、そのような突く癖を持っていた牛を、他人から警告されながらも人に対する保護措置をとっていなかった者に対して、本来

は死刑に処されるべきだから、「もし、賠償金が要求された場合には、自分の命の代償として要求されたとおりに支払わねばならない」となって上限が無制限の賠償額を規定している。但し、奴隷が突き刺された時はハンムラピ法典のアウィルム階層の子供と同じ額を支払うよう規定されており、「突き刺された……」とあるだけで殺されなくとも賠償金がとれたように解釈できるヘブライ語の記述となっている。

同じセム系民族でありながらも、バビロニアに捕囚となったユダヤ人 (B.C. 597～582) は、このバビロニアの法制度を受け入れるにあたってかなり改変したことが窺われるが、このように根本的な法の骨格は、セム的な内容をそのまま改変せずに、受容したと考えられる。更に『旧約聖書』では、男奴隷あるいは女奴隷と両性の奴隷を示しているが、ハンムラピ法典ではただ「奴隷」という記述しかなされていない。この条文を原田慶吉氏は「もし人の奴隷なるときは、銀3分の1マヌーを与う。」[loc. cit., p. 337]と翻訳し、これに対して中田一郎氏は「もしアヴィールムの奴隷なら、銀3分の1(?)マナ(約167グラム)¹⁴²⁾を与えなければならない。」[loc. cit., p. 65～p. 66]と訳し、その損害賠償の賠償額が各法典などで異っていることを指摘[qq. v.]している。その脚注は「142) エシュメンナ『法典』§55では、4分の1マナとなっている。」という内容として出てはいるが、ハンムラピ法典の石柱条文では1/3となっている以上その賠償額についてここまで解釈にこだわる必要はないのではなかろうか、と思う。

	基数		序数	
	男性	女性	男性	女性
1	𒀭 išten, ešten	istenit	𒀭 𒄀 mahrū	mahrītu
2	𒁺 šina, šena	šitta, šittin	𒁺 𒄀 sanū	sanītu, sanūtu
3	𒁻 salašu	salaštu, šelaltu	𒁻 𒄀 salšu	saluštu
4	𒄠 arbau, erba	erbittu, erbit	𒄠 𒄀 rebū, rabū	rebitu
5	𒄡 hamšu	hanšet	𒄡 𒄀 hamšu, haššu	hamuštu

[loc. cit., p. 124]

第253条 (原文・逐語訳)

𐎶𐎵𐎶𐎶𐎶

〔飯島紀氏著『アッカド語』国際語学社刊 p. 184〕

第253条 (試訳)

ある者が、自分の田畑の前（のところで）で、監督してもらうために他の
同じアウィルム階層の者を雇用して、（その管理費として）穀物を貸与し、

牛などを交付し田畑の耕作のための契約を締結したのであるが、この者が（開耕時の）種子や飼料を盗んだ場合、その者の手の中でこれを取り押えたる時は、この者の指を切り取ることができる。

第253条の解釈

古代の雇用管理契約で、アウィルム階層のある者が同じアウィルムの他の者を雇用してその管理費用として穀物を貸与したり、牛などを交付して（貸し与えて）使用させていたにも関わらず、その雇われている者が裏切って種子や飼料を盗んだ（横領したる）時、まだその盗んだものを手の中に持っている（すなわち盗品を自分のところに保管している）ことがわかって現場を押さえることができたならば、この者の指をその窃盗の罪で切断することができるというのがこの第253条の規定であると考えられる。

古代法において、こういう条文の事例は多くあるが、現代刑法のスリの現行犯逮捕など異って窃盗を現行犯で逮捕するのは難しいだろうし、こういう規定を拡大解釈して、盗品を自分のところに保管してあったというだけで処罰を下すには、その判断と実行においてかなり難があったと思われる。この第253条を原田慶吉氏は「もし人が人を、彼の原の面前に番に立たんがために（原の番をせしめんがために）賃借して、農具を彼に託し、牛を彼に託し、原の耕作に対して彼を拘束したるに、もしその者が種子あるいはまた飼料を盗みて、彼の手の中にて取り押さえられたるときは、〔彼等〕彼の手を切り取る。」[loc. cit., p. 337] と訳している。

それに対して中田一郎氏は下に長い脚注をつけ「もし人が自分の耕地の世話をしてもらうために他の人を雇い、彼に〔（播種および飼料用の）穀〕物を〔託し、〕牛（複数）を預け、彼と耕地の耕作の契約を結んだなら、〔も〕しその人が種麦および飼料用の麦を盗み、（盗んだ物が）彼の手のなかで取り押えられた場合、彼らは彼の腕を切り落とさなければならな

い。¹⁴³⁾」[loc. cit., p. 66]と翻訳し、その脚註[qq. v.]のところで「143) このパラグラフには、〔穀〕物〔a〕*ldûm*、種(麦)*zêrum* (NUMUN)、および飼料*ukullâm* (ŠĀ. GAL)などの言葉が使われているが、その厳密な使い分けについてはかならずしも明瞭ではない。そのため G.R. Driver-J. C. Miles などは§253の後半部分『〔も〕しその人が種麦または飼料用の麦を……彼の腕を切り落とさなければならない』は、本来§254と§255の間にくべきもので、§253の前半部分は§254へと続けて読むほうがよいのではないかと提案している (BL I, p. 446)。しかし、ここでは CAD A₁, p. 337他にしたがって、〔穀〕物〔a〕*ldûm* は、用途にしたがえば、種(麦)*zêrum* (NUMUN)および飼料*ukullâm* (ŠĀ. GAL)に分れ、内容的には大麦であったと理解しておく。」[ibid.,]と書いておられる。この楔形文字中の al-da-a-am (穀物、中田氏の脚註においては〔a〕*ldûm*と主格形を縮小して書かれている)をその種において「大麦」と特定することには問題があると思われるが、このように大麦と解釈することが第253条などハンムラビ法典の翻訳では、ほぼ通説となっていることは事実である。

第254条 (原文・逐語訳)

sum-ma al-da-a-am il-qi ₂ ma ab ₂ -gud-ha ₂	
(上記で) もし 穀物食糧を 取り、 牛などを	
u ₂ -te-en-ni-iš ta-a-na šeim	a-na (エメサル語「どんな」と関係あるか ?)
弱らせたのであれば 若干量 (?) の大麦で	
ša im-ri-ru i-ri-ab	marāru 炭で焼す
所の 耕した 弁償する	šc 大麦

第254条（試訳）

（アッカド語の文章と条文の事例は、直前の第253条より始まっていて、その雇用された者が）穀物食糧を盗み、牛などを弱らせたのであれば、耕作したそれに相応する量の穀物（大麦）を弁償することによい。

第254条の解釈

第253条で、田畑にまく種子や家畜に与える飼料を盗んだ場合は手を切られるが、それよりも軽い法規定として、自分達の食べる穀物食料などを盗んだ（横領した）り、飼料を十分に与えなかったりしたために家畜を弱らせたりした程度なら、あとで耕作した穀物（大麦）をその損害を与えた分量に応じて支払えばよい、と読み、そのように解釈することができる。



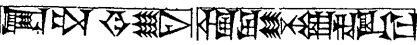




この第253条と第254条の規定は、同じセム系法文化の中に約2000年間に上り下りして継承され、イスラーム聖法『シャリーア』第5の刑罰、特に「窃盗（盗みの）罪」としての片手切断に宗教法としての結実をはたしている、と思われる。

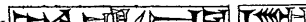
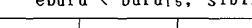







確かに第253条は *rittē* 「手（の指）」であり、片手（あるいは腕）の切断までは規定してはいない、と思われる（直前の第253条参照）が、窃盗の刑罰として手（の先）を切断するという方法は、セム系法文化の特色として記されるべき性質のもの、とみることができるだろう。

イスラーム法のハディース（イスラーム伝承集成）第一巻において「盗みを働くな」という規定は、バドルの戦いに参加したウバーダ・ブン・サーミトが『アカバの誓い』として予言者ムハンマッドに誓ったことから始まっているが、同じくハディース「予言者達」の項に、例えば予言者ムハンマッドの娘ファーティマが盗みをおこなったとしても彼女の手を切り落とす、という記述で、宗教法としてのイスラーム法によって盗みを犯した場合に手を切断されることが決定された、と考えられている。ところでこの

第254条を翻訳した原田慶吉氏は「もし農具を取りて、牛を弱らせたるときは、取りたる穀物の……を賠償す。」〔loc. cit., p. 338〕と文章の間に想定符を入れて翻訳し、中田一郎氏も「もし彼が（播種および飼料用の）穀物を取り、（十分な飼料を与えず）牛を弱らせたなら、彼は彼が受け取った大麦を倍にして償わなければならない。」〔loc. cit., p. 66〕と訳しているが、この条文は前の第253条からアッカド語が続いていると思われるので、その解釈に際しては前の条文と一緒にして考察しなければならないだろう。更に、中田氏は ta-a-na を「倍」の量と解釈してこのように翻訳しておられるが、この単語が純粹にアッカド語であるかどうかで、その解釈に差が出てくるとと思われる。これは寧ろ「それに相応する量」と解釈したほうが良いのではないかと思われる。

第255条（原文・逐語訳）

 Sum-ma ab ₂ -gud-ha ₂ a-wi-lim a-na ig-ri-im もし 牛達を 人の のため 賃借料	右は 〔シュメール の古拙文字〕	
⁹⁰  it-ta-di-in u ₃ lu se-numun is-ri-iq ma 渡したり 又は 飼料を 盗んだため、		
 i-na eqlim la us-tab-si に 畑（何も）ないなら 生え	bašū ある、持つ	 初期 楔
 a-wi-lam šu-a-ti u ₂ -ka-an-nu šu ma 人に この 確認して、 （その後）	右はシュメール 文字とその音価	 šc 大麦

<div data-bbox="148 167 454 188">  </div> <div data-bbox="152 189 542 204"> i-na ebūrim 10 gan-e 60 še-gur </div>	<div data-bbox="657 196 885 204"> ebūru < buru₁s, šibir₂ </div>									
<div data-bbox="152 245 580 253"> 時に 収穫 10 イクーにつき 60 グルの大麦を </div>	<div data-bbox="626 225 878 252">  </div>									
<div data-bbox="148 269 301 290">  </div> <div data-bbox="152 292 297 298"> i-ma-ad-da-ad </div>	<div data-bbox="847 274 893 282">(ibid.)</div>									
<div data-bbox="152 347 359 355"> 秤量（支払い）させる </div>	<table> <tr> <td data-bbox="389 319 504 354">  </td><td data-bbox="504 319 580 354">  </td><td data-bbox="580 319 825 354"> <table> <tr> <td data-bbox="588 322 687 352"> kar₂ gan₂ ga₃ </td><td data-bbox="687 322 817 352"> kar₂ kan ikū </td><td data-bbox="710 325 809 347"> 農地 イク（面積単位） </td></tr> </table> </td><td data-bbox="825 319 901 354"> 秤量する </td></tr> </table>					<table> <tr> <td data-bbox="588 322 687 352"> kar₂ gan₂ ga₃ </td><td data-bbox="687 322 817 352"> kar₂ kan ikū </td><td data-bbox="710 325 809 347"> 農地 イク（面積単位） </td></tr> </table>	kar ₂ gan ₂ ga ₃	kar ₂ kan ikū	農地 イク（面積単位）	秤量する
		<table> <tr> <td data-bbox="588 322 687 352"> kar₂ gan₂ ga₃ </td><td data-bbox="687 322 817 352"> kar₂ kan ikū </td><td data-bbox="710 325 809 347"> 農地 イク（面積単位） </td></tr> </table>	kar ₂ gan ₂ ga ₃	kar ₂ kan ikū	農地 イク（面積単位）	秤量する				
kar ₂ gan ₂ ga ₃	kar ₂ kan ikū	農地 イク（面積単位）								

第255条（試訳）

（アッカド語の文章は第253条からそのまま続いており、同じアウィルム階層から雇用契約を結んで管理を委託された者が）他の者のために牛などに対して賃借料を取って貸し与えたり、飼料を盗んだために田畑に何も生えないようなら、この者に確認して、収穫時に10イクー（約6.5ha）について60グル（約1万5千リットル余）の穀物（大麦）を支払わなければならない。

第255条の解釈

同じアウィルム階層の者が、田畑などに関し雇用管理契約を結びながら、その貸し与えられた牛などを他のアウィルム階層の者に賃借料を取ってまた貸ししたり、飼料を盗んだりしたために、その田畑に何も収穫物が生えてこなかったりしたような場合には、その雇用されていた者は管理を依頼された田畑10イクーについて60グルの穀物（大麦）をもって損害賠償をしなければならない、という規定である。




この同じハンムラピ法典の第44条の解釈で説明したように、田畑を開墾するという約束で土地を借りた者が満足に開墾しなかった時の損害賠償は、10イクーにつき10グルであるから、本条の損害賠償額はその6倍という高額なものであることがわかる。

大麦の収穫は1イクーあたり1～2グルとみられており、60グルは8,

640シラ (15,300リットル) に相応する、と考えられている。

この第255条の翻訳をみると、原田慶吉氏は「もし人の牛を賃借料のために与え（賃貸し）、あるいはまた種子を盗みて、原の中に〔何物も〕生ぜしめざりしときは、〔彼等〕その者に【彼に】確証し、しかる後収穫〔時〕において、〔彼は〕1 イクーにつき穀物60クールを量る。」[loc. cit., p. 338] と訳し、それに対して中田一郎氏は「もし彼がその人の牛（複数）を又貸ししたりあるいは〔種〕麦を盗み、（種を播かなかったために）耕地に何も生じさせなかったなら、彼らはその人（の違約）を立証しなければならない。そして彼は収穫のときに（耕地面積）1 ブル（約6.5ヘクタール）につき大麦60クル（約18,000リットル）を計り与えなければならない。」[loc. cit., p. 66] と訳しておられる。

第256条（原文・逐語訳）

	
sum-ma pi-ha-zu a-pa-lam la i-li-i	apālu 返戻する、支払う
(上記で) もし義務が 支払の ないなら 出来	
	lēu 出来る
	
i-na eqlim su-a-ti i-na gud-ab ₂ -ha ₂	
で 畑 その として (の代わりに) 牛	
¹⁰⁰ 	
im-ta-na-aš-ša-ru su	mašāru 残す
残す	

第256条（試訳）

(第253条から続いているが、前の第255条で規定した10イクーにつき60ブルを支払う損害賠償の) 支払い義務が履行できないならば、その田畑で


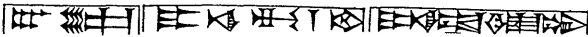
牛の代りに残されて（その損害賠償額が支払えるまで）働かねばならない。

第256条の解釈

アッカド語の文章は、前の第255条からそのまま続いていて、前条の損害賠償が支払えない場合は、多分その牛の代りに自分がそのまま残されて働き、10イクーにつき60グルの収穫があげられるまで、その畑を耕やせ、という規定であろうと思われるが、アッカド語の微妙な意味がどうもはつきりしない。この第256条に関して、原田慶吉氏は「もしその義務を弁済すること能わざるときは、その原の中にて、牛にて〔彼等〕彼を曳摺る。」[loc. cit., p. 338]と訳しておられるが、原田氏はこの条文の最後に出ている動詞 *im-ta-na-aš-ša-ru* を「牛で曳摺る」（牛でその人間を引きずりまわす）という意味に解しておられるようである。中田一郎氏もそれとほぼ同様に解釈しておられるようだが、括弧つきで「死ぬまで」引きずり回す、と拡大解釈なさっているようである。その中田氏の翻訳は「もし彼が彼の義務履行の責任を負うことができないなら、彼らはその耕地で彼を牛（複数）に引かせて（死ぬまで）引きずり回さなければならない。」[loc. cit., p. 66-p. 67]という文章である。この解釈で、一番問題なのは *i-na* という前置詞と上に記した動詞をどのように結びつけて理解するかであろう、*i-na* という前置詞を「～として（～の代わりに）」と解釈すると拙訳のようになるが、動詞を「引きずる」という意味にとると、原田氏や中田氏の翻訳文に近く解釈しなければならないことになる。

数 詞 (基 数)	6	𒌷	<i>sišsu</i>	<i>siššet</i>	(序 数)	𒌷 𒌵	<i>sišsu, šeššu</i>	<i>siššitu</i>
	7	𒌷𒍪	<i>siba, sibi</i>	<i>sibittu</i>		𒌷𒍪 𒌵	<i>sibū</i>	<i>sibtu</i>
	8	𒌷𒍪𒍪	<i>samanu</i>	<i>samantu</i>		𒌷𒍪𒍪 𒌵	<i>samanu</i>	<i>samantu</i>
	9	𒌷𒍪𒍪𒍪	<i>tišu</i>	<i>tišittu, tišit</i>		𒌷𒍪𒍪𒍪 𒌵	<i>tišū</i>	<i>tiltu</i>
	10	𒌷𒍪𒍪𒍪𒍪	<i>ēšru</i>	<i>ēšrit, ēšerit</i>		𒌷𒍪𒍪𒍪𒍪 𒌵	<i>ēšrū</i>	<i>ēšritu</i>

第257条 (原文・逐語訳)


 šum-ma a-wi-lim / ak-šu₂ i-gur šu₂ 投げる、ここでは麦を投げる人
 もし 人が 耕作人を 雇った時は

 7 se-gur i-na šattim l^{ka} i-na-ad-di-is šum
 大麦 7 グルを に 1 年間 支払う 彼に

第257条 (試訳)

ある者が、耕作人を雇った時は（その標準的な契約内容として）1年間に7グル（約1,800リットル）の穀物（大麦）をその者に支払うこととする。

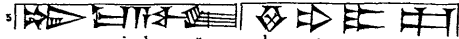

第257条の解釈

アッカド語の楔形文字原文を見ればわかるように、雇う側の者はアウィルム階層であるが、雇われる側は耕作人 ak-šu₂ とあるだけで正確にはどのような階層の者かは良くわからない。しかしながら奴隷などの場合にこのような条文は必要ないと思われるから、やはり雇われる者もアウィルム階層の者と考えerべきであろう。その労働賃金が第251条などの損害賠償と異り、食用にする穀物をもって支払われ、1年間で7グル（2,100シラに相当し、それは現在の約1,785リットルになる）の穀物（大麦）というのが当時において十分な給与として認められていた、ということであろう。

この条文を原田慶吉氏は「もし人が耕作人を賃借したときは、穀物8クルを1年に彼に与う。」[loc. cit., p. 338]と翻訳し、中田一郎氏は「もし人が農業労働者を雇ったなら、彼は1年間に大麦8クル（約2,400リットル）を彼に与えなければならない。」[loc. cit., p. 67]とほぼ同様の

訳文を出しておられるが、楔形文字が石柱に記されたところを見る限り、数詞は7のように見えるが、後に発掘された粘土板文書ではその殆どが8となっていたので、このように翻訳されたものと思われる。この第257条の最初の行にある a-wi-lim (アウィルム階層) のところで、ハンムラビ法典の石柱裏面に刻された楔形文字は一番上から数えて第21欄目が左端で終了し、次の ak-šu₂ (耕作人、農業労働者) のところから下の欄 (上から第22段目) の右端上部から第22欄の縦書きの行が始まるのである。

第258条 (原文・逐語訳)


 sum-ma a-wi-lum ša-a-gud i-gur
 もし 人が 牛飼いを 雇ったなら

 6 se-gur i-na šattim l^{kam} i-na-ad-di-is sum
 大麦 6 グルを に 1 年間 支払う 彼に

第258条 (試訳)


ある者が、牛飼いを雇った時は (その標準的な契約内容として) 1 年間に 6 グル (約1,600リットル) の穀物 (大麦) を、その者に支払うこととする。


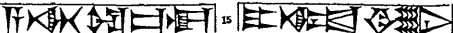
第258条の解釈

前条と同じような規定であるが、田畑の耕作人は、1 年間で穀物 (大麦) 7 グルに対し、牛飼いのほうは 1 グル低い 6 グル (1,800シラ、1,596リットル) の穀物 (大麦) が雇用賃金として、古代バビロニアにおいて決

められていたもの、と思われる。現代法においても、アメリカ合衆国の最低賃金法などは何年かに一度改定されているが、古代においてはそれ程経済の動向は変わらず、この賃金がかかなり後まで、そのまま維持できたものと思われる。むしろ日本の現代社会において、このような厳格に守らねばならぬ最低賃金法なる法律が欠如していることが不思議なくらいである。それはともかく、これを「最低賃金法」と考えるか、標準あるいは最高賃金法と考えるかは解釈上の問題であるが、試訳にも入れておいたように「標準的な契約」を明示したものと思われる。この条文を原田慶吉氏は「もし人が牛番を賃借したときは、穀物 6 クールを 1 年に彼に与う。」〔loc. cit., p. 338〕と訳し、中田一郎氏も「もし人が牛追い人夫を雇ったなら、彼は 1 年間に大麦 6 クル（約 1,800 リットル）を彼に与えなければならない。」〔loc. cit., p. 67〕という同じような訳文を掲げておられる。中田氏は、前の条文でも同じく 1 シラ \approx 1 リットルと考えておられるようだが、換算率の解釈は夫々の研究者によってかなり異っている。

第259条（原文・逐語訳）


¹⁰ sum-ma a-wi-lum *i³apin i-na ugarim ugaru < a-gar₃
 もし 人が 鋤を で 野


 is-ri-iq 5 šiqil kaspim
 盗む時は 5 シェケルの銀を

 a-na be-el *i³apin i-na-ad-di-in apin > epennu
 に 主 鋤の 与える
















第259条（試訳）

ある者が、野原で鋤を盗んだ時は（その損害賠償として）5 シェケル（約40g 強）の銀（貨）を鋤の持主に支払わなければならないものとする。

第259条の解釈

アッカド語の原文を読めばわかるように、鋤を盗んだ者はアウィルム階層の人間で、アッカド語の原文には記載されていないが、当然その盗んだ鋤をその者が持っていることが見つかった場合に、その盗んだ者が鋤の持主に損害賠償として5 シェケル（約40g 強）の銀の薄片（貨）を支払わねばならないこと、というのが本条の規定である。この条文の翻訳に関して、原田慶吉氏は「もし人が犁を田野の中にて盗みたる時は、銀5 シクルを犁の主に与う。」[loc. cit., p. 338] と翻訳し、中田一郎氏のほうも「もし人が耕区で播種装置付き犁を盗んだなら、彼は銀5 シキル（約41.7 グラム）を犁の所有者に与えなければならない。」[loc. cit., p. 67] と^{gis} aspinを「播種装置付き犁」という風にかかなり限定して記されておられる。原田慶吉氏の訳した時代には単に「犁」あるいは「鋤」という単語を使っていたが、古代の農耕社会でもこのような田畑を耕やす道具もかなり多くの種類があり、以下の象形文字（絵文字）から発達した楔形文字を見ればわかる様に、この第259条で定められている aspin という「犁」はシュメール時代からかなり大きな家畜に引かせるものであったことがわかるのである。（一番下の絵文字参照）

る。(一番下の絵文字参照) 女性				(序数)	男性	女性	
数詞(基数)	1	𒌷	išten, ešten	istenit	𒌷 𒌷	mahrū	mahrītu
	2	𒌷𒌷	šina, šena	sitta, sittin	𒌷 𒌷	sanū	sanītu
	3	𒌷𒌷𒌷	salašu	salaštu, selaltu	𒌷𒌷 𒌷	salšu	saluštu
	4	𒌷𒌷𒌷𒌷	arbau, erba	erbittu, erbit	𒌷𒌷 𒌷	rebū, rabū	rebitu
	5	𒌷𒌷𒌷𒌷𒌷	hamšu	hanšet	𒌷𒌷 𒌷	hamšu, haššu	hamuštu

バビロニア					アッシリア		意 味
絵 文 字		古拙文字	古典的 楔形文字	後 期 楔形文字	音 価		
					シュメール	アッシリア	
					al	al	鋏
					mar war ₂	mar	鋏
					apin	ussu	鋤

中田氏の訳文にある「播種装置付き犁」が、はたして正確な訳かどうかは判断できないが、この文字で表現される犁はシュメール時代から開発され、バビロニア時代にはかなり普遍的に使用されていた動物に引かせる大きい犁であったようで、かなり古代バビロニア時代においても農耕用に使われていた大規模な農器具に近いものであった、と思われる。

第260条（原文・逐語訳）



sum-ma e² apin-tuk₂-gur₁₀

もし

開墾鋤

apin-tuk₂-gur₁₀ > harbu



u₃ lu e² gan₂-ur₃ is-ta-ri-iq

又は まぐわを 盗んだときは

gan₂-ur₃ > maškakātu



3 siqil kaspim i-na-ad-di-in

3 シェケルの銀を 与える

第260条（試訳）
















（アッカド語の文章としては、直前の第259条の主語として使用された

アウィルム階層の者から始まって、本条としてはそれが省略されている) ある者が、開墾鋤または馬鋤を盗んだ時は、(その損害賠償として) 3 シェケル (約25g 相当) の銀 (貨、銀の薄片) をその持ち主に支払わなければならないものとする。









第260条の解釈

本条の開墾鋤または馬鋤のほうが第259条の鋤よりも小型であるのか、あるいは野原で盗むことのほうが、より罪が重いのか、本条のほうが第259条よりも2 シェケル安い3 シェケル (約25g) の損害賠償となっている。

この第260条も前の第259条と同じく農耕用の「犁」「まぐわ」「耙」といった器具を表わしているが、その正確なものがどのような形であったか良くはわからない。この条文の翻訳として原田慶吉氏は「もし□犁あるいはまた耙を盗みたる時は、銀3シクルを与う。」[loc. cit., p. 338] という文章を、犁の前を空白にした形で記載しており、中田一郎氏のほうは「もし深耕用の犁あるいはまぐわ (耕地をならすための農具) を盗んだなら、彼は銀3シクル (約25グラム) を与えなければならない。」[loc. cit., p. 67] という訳文を出しておられる。この「開墾鋤」あるいは「馬鋤」もしくは原田氏の「犁」や「耙」、また中田氏の「深耕用の犁」などを正確に解釈する時には、この条文に先行する第259条の解釈の末に掲げておいた古代の鋤類が象形文字 (絵文字) から楔形文字に、どのように発展したかを参照していただきたい。

数	6		sišsu	siššet	(序			sišsu, šešsu	sišsitu
詞	7		siba, sibi	sibittu	数)			sibū	sibtu
(基	8		samanu	samantu				samanu	samantu
数)	9		tišu	tišittu, tišit				tišū	tiltu
	10		ēšru	ēšrit, ēšerit				ēšrū	ēšritu

第261条 (原文・逐語訳)

					
Sum-ma	a-wi-lum	nāqidam	a-na	nāqidu	na-kad
もし	人が	飼育に	の		
					
ab2-gud-ha2	u3	šēnē	ri-im	i-gur	šēnu < sig2-udu-ha2
牛達	や	羊達、	牧人を	雇ったら	
					rēū 羊飼
					
8	se-gur	i-na	sattim	l1	i-na-ad-di-iš Sum
大麦 8	グルを	に	1 年間	与える	彼に

第261条 (試訳)

ある者が、牛や羊を飼育するために牧人を雇ったら、1 年間に 8 グル (約2,040リットル余) の穀物 (大麦) をその者に支払うこととする。



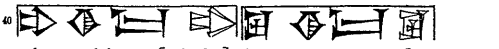

第261条の解釈

第257条の耕作人 (7 グル) や第258条の牛飼い (6 グル) と比較して、牛や羊の牧人 (牧者) を雇う時は 1 年間に 8 グル (2,400シラすなわち約 2,040リットル) の穀物 (大麦) を給与として与えなければならない、と規定されているのがこの第261条である。

牧人が、遊牧社会において象徴的な地位を占めていたことは、このハンムラビ法典の後文にも、ハンムラビ王自身がバビロンの都市の保護者として rēum (牧者) というアッカド語を使用している (本条の ri-im はその対格形)。この条文に出てくる「牧人」という職種が、メソポタミア地方において統治者を意味するようになった背景は、前文の第 1 段落のところで詳述したが、この条文から第267条ぐらいまでは、現実の職業としての「牧人」の規定が詳細に説かれている。この条文を原田慶吉氏は「もし人が番人を、牛または小家畜の飼育のために賃借したときは、穀物 8 クー

ただこの直前の第261条から始まる牛や羊といった家畜に関する規定が、旧約聖書『出エジプト記』第21章の(5)財産の損傷、(6)盗みと財産の保管などの規定、に影響を与えていたことは確かなようである。この条文の原田慶吉氏訳は「もし人が牛あるいはまた羊の……のために……」〔loc. cit., p. 338〕で、中田一郎氏も同様に「もし人が牛あるいは羊を……のために（以下破損）。」〔loc. cit., p. 67〕という同じ想定符つきの翻訳で、この楔形文字の欠けたところを、文章上も欠落させて表現しているのである。

第263条（原文・逐語訳）

	
sum-ma [alpaṃ] u ₃ lu immeram	
もし 牛 や 羊を	
	
ša in-na-ad-nu sum uh ₂ -ta-al-li-iq	halāqu 失う、毀す
所の 渡された 彼に 失ったならば	
	
alpaṃ ki-ma [alpim] immeram ki-ma [immerim]	
牛 同じ 牛と 羊を 同じ 羊と	
	
a-na be-li [šu-nu] i-ri-a-[ab]	
に 主 彼らの 弁償する	

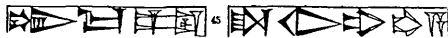
第263条（試訳）

牛や羊を渡されたところの者が、それらを失ったならば、それと同じ程度の牛や羊を、それらの持ち主に弁償しなければならないものとする。

第263条の解釈

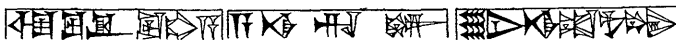
この第263条の規定は多分第261条から始まっている「牧者」の規定で、石柱が第262条のように文章がわからなくなる程長くはないが第263条の各部分も一部分破損しているため、アッカド語が一体どのように続いているのか良くわからないが、牛や羊を預かった牧者は、それを失った場合と同じ程度の家畜をもって弁償しなければならない、ということを規定したのが本条であると思われる。この主旨において本条もハンムラビ法典一般に共通したタリオ主義に従った条文とすることができであろう。この第263条を原田慶吉氏の翻訳としては「もし彼に与えられたる牛、あるいはまた羊を喪失せしめたるときは、〔その〕牛に相当する牛、〔その〕羊に相当する羊を、彼等の主に賠償す。」[loc. cit., p. 338] という文章を掲載し、中田一郎氏のほうも、ほぼ同じく「もし〔彼〕に寄託された〔牛〕あるいは〔羊〕を失〔った〕なら、彼は〔牛〕には牛をあるいは〔羊〕には羊を〔その〕所有者に償〔わ〕なければならない。」[loc. cit., p. 67-p. 68] という訳文を出しておられる。この冒頭、家畜を与え（寄託された）られた者は、前の第262条から続くが、次の第264条にある「牧人」とほぼ同じ職業階級に属する者であろう、と判断できるのである。

第264条（原文・逐語訳）



šum-ma [rēum] ša ab₂-gud-ha₂

もし 牧人が 所の 牛達



u₃ lu sēnē a-na ri-im in-na-ad-nu šum

や 羊達を のため 飼育 された



az-su (?)~ra-tim

手当を



ma-hi-ir li-ib-ba su ta-ab

mahāru 受ける

受領して 心は 彼の 満足したが



ab₂-gud-ha₂ [uz]-za-ah-hi-ir

ṣiheru 減らす

牛達が 減少し



ṣēnē uz-za-ah-hi-ir ta-li-id-tam

羊達が 減少し

生産率を



um-ta-di a-na pi ri-ik-sa-ti su

maṭū 少なくする

減らした時は によって 言葉 約束の 彼の



ta-li-id-tam u₃ bi-il-tam i-na-ad-di-in

biltu 収入、税

生産率 や 収入（の目標）を 与える

第264条（試訳）

牧人が、飼育のために渡された（牛）や羊（複数）について、そのすべての手当を（受領して？）その額に満足したものの、牛や（羊）が減少しその生産率を（減少したる）時は、その約束した言葉によって（その家畜の）生産（率）や収入（増加率）の減少を負担しなければならない。

第264条の解釈

古代バビロニアの時代、狩猟から遊牧と農耕の定着混合時代に落ちつき、セム系各民族もある程度の領域をもった牧畜社会を構成していたようであるが、牧人の役割りと地位はまだ特殊な存在と考えられていたようで、この条文にもあるように特定の宣誓文句を神や牧畜を依頼した者に誓

い、それから牧者の仕事についたもの、と思われる。

この傾向は、同じセム系民族のユダヤ人にもあったようで、牧者に関する規定はその後特に象徴的な発展を遂げてキリスト教の中に牧師という階級を生み出してゆくことになるのである（特に前文と後文の「牧者」に関する解釈を参照のこと）。しかしハンムラピ法典においては、牧者に関するそのような伝承を伝えつつも、本条のようにタリオ主義に従った損害賠償が規定されることになる。この第264条を原田慶吉氏は「もし牛あるいはまた小家畜が飼育のために自己に与えられたる牧人が、彼の給料を全部受領し、彼の心は満足したるに、牛を少数にし、小家畜を少数にし、生まれたる子供を減少したるときは、彼の契約の文言に従いて、生まれたる子供と繁殖（家畜の）（？）を与う。」[loc. cit., p. 338]と翻訳されているが、第264条末行の ta-li-id-tam と bi-il-tam を「子供と繁殖」と疑問符つきで解釈しているのに対し、他方そのかなり後にこの箇所を中田一郎氏は「子供と産物」と解釈して、「もし牛あるいは〔小家畜〕の〔放牧〕を寄〔託された〕〔牧夫が、〕彼の〔全〕労賃を受け取って満足し、牛（の数）を減らしたり〔小〕家畜（の数）を減らしたり、子供の出産を少なくしたなら、彼は彼の契約にしたがって（小家畜の）子供と産物を与えなければならない。」[loc. cit., p. 68]という文章で翻訳している。この最後の文中で、ta-li-id-tam が家畜（牛や羊）の子供であるとしても bi-il-tam のほうはその子孫が増えることを意味しているので「産物」という言葉ではまだ不十分なのではないかと思われる。なお、この条文中の単語として「牧夫」とか「牧人」という訳語にしているアッカド語の rēum に関しては、すでに記載した前文第1段落のところに詳述した（その解釈のところを参照されたい）。

第265条 (原文・逐語訳)



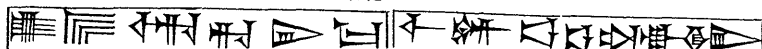
sum-ma rēum sa ab₂-gud-ha₂

もし 牧人が 所の 牛達



u₃ šēnē a-na ri-im in-na-ad-nu šum

や 羊達を のため 飼育 渡された



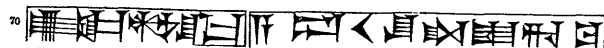
u₂-sa-ar-ri-ir ma šī-im-tam ut-ta-ak-ki-ir sarāru 不正直である

不正直で 契約を 変更して nakāru 異なる、争う



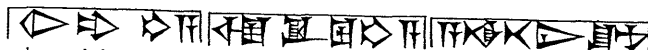
u₃ a-na kaspim it-ta-di-in

ために 銀の 売ったならば

⁷⁰ 


u-ka-an-nu šu ma a-du 10 šu sa iš-ri-qu₂

確認した上 彼に まで 10 倍 所の 盗んだ



ab₂-gud-ha₂ u₃ šēnē a-na be-li šu-nu

牛 や 羊を に 主 彼らの

⁷⁵ 

i-ri-a-ab

弁償させる

第265条 (試訳)

牧人が、飼育のために渡された牛や羊について不正直なことを考え、その契約（家畜に刻印された印）を変更して銀のためにこれらを売却したならば、その者に確認した上で、牧人が盗んだ牛や羊をその10倍に至る（a-du）まで、それらの牛や羊の持ち主に弁償しなければならない。

第265条の解釈

ハンムラビ法典の場合は、牛や羊を盗んだ者が牧人であるという条件の

もとにこの第265条が規定されているが、旧約聖書の『出エジプト記』ではその第21章の末に「盗みと財産の保管」という項目で次の第22章にかかる過渡的な条文の規定中に、一般的な盗人の規定として登場する。ハンムラピ法典では、その損害賠償は a-du 10 šu 「10倍まで～」という規範であるから、それらの牛や羊を預けた者との妥協がはかられたように思われるが、旧約聖書のほうは、牛 1 頭の損害賠償は牛 5 頭、羊 1 匹の賠償は羊 4 匹ときちんと倍数が決められていて、そこに損害賠償を支払う最高額のところで差が生じている。

これは明らかにハンムラピ法典の第265条が「10倍まで」という規定を置いていることに関連し、ユダヤの律法などにおいて、新たな解釈となつて倍率が決定したもの、と思われる。

因みにその旧約聖書『出エジプト記』第21章第37節～第22章 3 節までの記述は、[op. cit., “The NIV Hebrew-Englinh Old Testament”

אִם יִגְנוֹב אִישׁ שׁוֹר אוֹ-שֶׁה (ここから左へ)
or and-he-slaughters-him sheep or bull man he-steals if (37)*

מִכָּרָו חֲמִשָּׁה בָקָר יִשְׁלַם תַּחַת הַשׁוֹר וְאַרְבַּע-צֶאֱן תַּחַת
for sheep and-four the-bull for he-must-pay-back cattle five he-sells-him

הִשָּׂה: אִם-בְּמַחְתָּרָת יִמָּצָא הַגָּנוֹב וְהָיָה
and-he-is-struck the-thief he-is-caught in-the-break-in if (22:1)* the-sheep

וְנָתַתּוּ אֵין לוֹ דָּמִים: אִם-זָרְחָה הַשֶּׁמֶשׁ עָלָיו דָּמִים
bloodsheds on-him the-sun he-rose if (2) bloodsheds to-him not so-he-dies

לֹא שָׁלַם יִשְׁלַם אִם-אֵין לוֹ וְנִמְכָּר
then-he-must-be-sold to-him nothing if he-must-restitute to-restitute to-him

בְּגִנְבָתוֹ: אִם-הִמָּצָא תִמָּצָא בְּרֹדוֹ הַגְּנוּבָה
the-stolen in-hand-of-him she-is-found to-be-found if (3) for-theft-of-him

(ibid., p. 206) מִשׁוֹר עַד-חֲמֹר עַד-שֶׂה חַיִּים שְׁנַיִם יִשְׁלַם:
he-must-pay-back double alive-ones sheep or donkey or whether-ox

However, if it was known that the bull had the habit of goring, yet the owner did not keep it penned up, the owner must pay, animal for animal, and the dead animal will be his.

Protection of Property

22 "If a man steals an ox or a sheep and slaughters it or sells it, he must pay back five head of cattle for the ox and four sheep for the sheep.

²"If a thief is caught breaking in and is struck so that he dies, the defender is not guilty of bloodshed; ³but if it happens² after sunrise, he is guilty of bloodshed.

"A thief must certainly make restitution, but if he has nothing, he must be sold to pay for his theft.

「(6)盗みと財産の保管


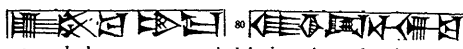
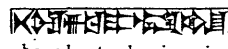
³⁷

人が牛あるいは羊を盗んで、これを屠るか、売るかしたならば、牛1頭の代償として牛5頭、羊1匹の代償として羊4匹で償わねばならない。彼は必ず償わなければならない。もし、彼が何も持っていない場合は、その盗みの代償として身売りせねばならない。もし、牛であれ、ろばであれ、羊であれ、盗まれたものが生きてままで彼の手もとに見つかった場合は、2倍にして償わねばならない。」

〔共同訳聖書実行委員会編『聖書』新共同訳(旧) p.129〕となっている。

なおこのハンムラビ法典第265条を原田慶吉氏は「もし牛あるいはまた小家畜が飼育のために自己に与えられたる牧人が、不正直にして、〔家畜の〕目印を変更し、もって銀のために与えたる(売却したる)ときは、〔彼等〕彼に確証し、しかる後〔牧人は〕盗みたるものをその10倍方、牛または小家畜を、彼等の主に賠償す。」〔loc. cit., p. 338〕と翻訳している。またこの条文に関して中田一郎氏の訳文も「もし牛あるいは小家畜の放牧を寄託された牧夫が(小家畜に付された所有者の)マークを偽って変更し(その小家畜を)売却したなら、彼らは彼(の罪)を立証しなければならない。そして彼は、牛あるいは小家畜で、彼が盗んだものを10倍にしてその所有者に償わなければならない。」〔loc. cit., p. 68〕と a-du を「～方」「～にして」と翻訳している。

第266条 (原文・逐語訳)

	sum-ma i-na tarbašim	tarbašu < tur ₃
もし 中で 小屋の		
	li-bi-it i-lim it-tab-ši u ₃ lu	liptu 病気、訪問
訪問が 神の あり、 又は		
	ur-mah id-du-uk rēum ma-har ilim	
ライオンが 殺すことあれば 牧人は 前に 神の		
	u ₂ -ub-ba-am ma mi-ki-it-ti tarbašim	ebēbu 無罪を証する、純化する
無罪を誓い、 倒れた者を 小屋に		maqātu 倒れる
	be-el tarbašim i-mah-har šu	
主は 小屋の 引き取る (それを)		

第266条 (試訳)





囲い込んだ柵の中で、神の手（直訳『神の訪問』後に欧米では「神の行為」an act of Godと翻訳される）によりあるいはライオンが殺したる場合に、牧人は神の前で無罪（潔白たること）を誓約し、柵囲いの中で倒れたるもの（家畜）を、その柵囲いの所有者が、引き取らなければならないものとする。

第266条の解釈

第261条から続く、牧者の責任において野原へ連れ出したのではなく、囲い込んだ柵（小屋）の中で原因不明（不可抗力 vis maior）で死亡したかあるいはライオン等の野性獣が侵入してきて、その柵囲いの中の家畜を殺してしまった場合、牧人はその責任を「神に対する誓約をすること」で免かれ、そうした家畜の損害は、小屋を持っている者すなわち柵で囲い込

んだ土地の所有者であるところの家畜の所有者が、それを負担しなければならない、というのが本条の規定であると思われる。

前の第265条の規定と同様、牧者（牧人）に対しては特別な「神への誓約」という義務が課せられており、それが同じセム系民族であるユダヤ人により宗教的に発展させられ、キリスト教の一神教概念へと関連して展開するのである。なお「神の訪問」とは人の関知しない突然の死を意味し、神の手によって当時の人はそれが死亡したと思ったのであろう。この第266条を原田慶吉氏は「もし畜舎の中に、神の触り（伝染病）が発生せしめられ、あるいはまた獅子が殺したるときは、牧人は神の前にて雪冤の盟を立て、しかる後畜舎の〔中にて〕倒れ〔たる家畜〕を畜舎の主が彼より受け取る。」〔loc. cit., p. 339〕と翻訳している。その一方、かなり後に翻訳した中田一郎氏の訳文としては「もし牧場で疫病が発生したかライオンが殺したなら、牧夫は神前で自らを無罪放免しなければならない。そして牧場の所有者は牧場の（家畜の）死骸を彼から受け取らなければならない。」〔loc. cit., p. 68〕というかなり無理をした文章を訳しておられる。この条文の楔形文字原文第3行目にある ur-mah が、今日我々の認識しているライオンかどうかは良くわからないが、当時の古代バビロニアにも今のアフリカに生息するようなライオンがいたようで、シュメール時代の象形文字（絵文字）から楔形文字へは

				ug ₂ ne ₃	labbu ne ₃	ライオン
---	---	---	---	------------------------------------	--------------------------	------

〔loc. cit., p. 172〕

のように展開していったことがわかっている。

第267条（原文・逐語訳）



šum-ma rēum i-gu-ma i-na tarbašim

もし 牧人が 不注意で に 小屋



kaz-za-tam uš-tab-ši rēum hi-ṭi-it kaz-za-tim

麻痺が（発生）あれば 牧人は 損害から 麻痺の kazzatu 病気の一様



ša i-na tarbašim u₂-ša-ab-šu-u₂

所ので 小屋 発生した



ab₂-gud-ha₂ u₃ šēnē u₂-ša-lam ma

牛達 と 羊達を 回復した上で



a-na be-li šu-nu i-na-ad-di-in

に 主 それらの 渡す

第267条（試訳）

牧人が、柵囲い（小屋）の中でその不注意から病気が発生したのであれば、牧人は病気の損害から柵囲いの中で倒れた牛や羊を回復させた上で、それらの持ち主に渡す（それらの家畜を所有者に返還する）こととする。

第267条の解釈

囲い込んだ柵の中で、第266条のように自然死した家畜とライオン等の野性獣が侵入してきて死亡した家畜とは、牧人が神の前で誓いをする事でその責任を免れたが、牧人の不注意から病気を起こしたり、（それが原因で）家畜が倒れた場合は、牧人の責任としてその家畜を治療し、もとの状態にしてその所有者に戻さねばならない、というのがこの第267条の規定である、と思われる。



しかしながら第266条とこの第267条とはかなり重なるところがあり、神の手で殺されたのかどうか牧人に預けた家畜の主人はその衛生管理から牧人のせいにしただろうし、牧人のほうは神の前で宣誓することによって逃げようとしただろうと思われる。そうした場合、同じような症状で倒れた家畜が多かった時、この kag-za-tam（麻痺、病気）ということで、その回復が義務づけられたのではないかと思う。

この第267条の条文に関して、原田慶吉氏の訳文と注釈は「もし牧人が不注意にして、⁸³畜舎の中に麻痺病（？）を発生せしめたる⁸⁴ときは、牧人は⁸⁵畜舎の中⁸⁶にて発生せしめたる⁸⁴麻痺病の損害を完全⁸⁷に賠償して、牛または⁸⁸小家畜を彼等の主に与う。」が翻訳文であり、さらにその註釈として2ヶ所が挙げられており「(83行) Ungnad 参照。疥癬の如き腫物を想像する学者もあり。Eilers 註参照。(86行、87行) ここのところの文章の構造は明瞭を欠く。筆者は86行と87行とを入れ換えるときは意味が判然とすると考え、仮にその様に訳して見た。」〔loc. cit., 原田慶吉著『楔形文字法の研究』清水弘文堂 p. 339〕と追加して解説されておられる。なおこの83～87という数字の行は、ハンムラビ法典の石柱裏面の上から数えて第32欄（第32段目）にある縦書きの楔形文字を右端から数えて第83行にある、また87行という場合は第87行目にある楔形文字の単語を意味することである旨は既に説明した。この第267条に関して、中田一郎氏の翻訳のほうは「もし牧夫が怠慢で牧場で旋回病（？）を発生させたなら、その牧夫は牧場に発生させた旋回病による牛あるいは小家畜の欠損を完全に賠償し、その所有者に与えなければならない。」〔loc. cit., p. 68〕という文章を記しておられこの翻訳文の中で、中田氏は kaz-za-tim というこの第2行目（原田氏は第32欄の83行目として表示）のアカド語の病名を疑問符つきで「旋回病（?）」と翻訳しているが、それに対する説明がついていない。原田氏のように、ウングナッド（Ungnad）氏とアイラーズ（Eilers）氏という2

人の学者名をその訳語に関する参照事項として掲載するだけであるのも問題であるが、一応日本語として訳語を書きながら、その説明と根拠を全く書かないというのも更に問題があると思われる。今日でも牛の「狂牛病（正式には海綿状脳症 BSE）」など、その実体があまり良く把握できていない家畜の伝染病などが多くあり、まして古代の衛生状態では原因不明の家畜伝染病などもかなり多かったのではないか、と思われる。それにしても、先行する第249条のように賃借した牛が死亡したのではない場合で、それが牛を飼育する役目をもった牧人である時は、その賃借した牛の病気を回復させて持ち主に返す必要があったのである。

この問題は、メソポタミアにおける古代の「牧畜社会」の形成とどこの世界においても共通しておこなわれた食用動物を家畜化する (animal domestication) 過程において、必ず経過しなければならない諸事項を含んでいる、とみななければならないだろう。

第268条 (原文・逐語訳)


 sum-ma a-wi-lim alpam a-na di-a-si-im
 もし 人が 牛を のため 脱穀

 i-gur 20 (silas) seim a₂-šu dāsu 借む、脱穀する
 賃借したなら 20 シラの大麦が手数料 (である)

第268条 (試訳)

ある者が、脱穀のために牛を賃借したならば、20シラ（約17リットルに相当すると思われる）の穀物（大麦）が、その賃借料である。

第268条の解釈

牛の賃借料の規定であるが、20シラの穀物（大麦）というのは約17リットルということで、当時の脱穀のために賃借する牛の賃借料は、この程度のものであったようである。この短い条文を原田慶吉氏は「もし人が牛を打穀のために賃借したときは、穀物20クーがその借料。」[loc. cit., p. 339]と訳し、中田一郎氏は「もし人が脱穀するために牛を賃借したなら、大麦2スート（約20リットル）がその料金である。」[loc. cit., p. 68]という訳文を出しておられる。なお古代の度量衡でシュメール時代はシラ SÎLA それをアッカド語で qû(m)（カ）と読み、これが今日我々が使用する単位のリットルにその容積がほぼ匹敵するのではないか、と思われている。そして10 qû(m)すなわち10シラが1 sūtu(m)スートというアッカド語の単位となるので、中田一郎氏は2スートという訳文にしているようである。このハンムラビ法典の書かれた（刻まれた）文章としては確かにアッカド語であるが、縦書きの形式だけではなくシュメール語の単語など楔形文字は、そのままシュメール語が表意文字（西欧の学者は Ideogram と表示）として直接的に原語をそっくり使用している以上、単位などでシュメール語をそのまま使ったものが普及しているからには、アッカド語学者としてはアッカド語に改めたい気持もあろうが、わざわざ2スート（約20 qû(m)）に変えることまで無かろうと思われる。

第269条（原文・逐語訳）



sum-ma imēram a-na di-a-si-im i-gur

もし 驢馬を のため 脱穀 賃借した時は



10 (sila₃) šeim a₂-š_u

10 シラの大麦が手数料（である）

第269条（試訳）



（アッカド語の文章としては、前の第268条のアウィルム階層の者が主語としてそのままこの条文まで続いており）ある者が、脱穀のために驢馬（小型の馬）を賃借したならば、10シラ（約8.5リットルに相当すると思われる）の穀物（大麦）が、その賃借料になると思われる。

第269条の解釈

前条と同じ牛を脱穀用に賃借した場合の20シラに較べると、驢馬（小型の馬）の賃借料はその半分で10シラだから約8.5リットルぐらいの分量に相当する穀物（大麦）ということになる。この条文を原田慶吉氏の訳文としては「もし馬を打穀のために賃借したときは、穀物10クーがその借料。」[loc. cit., p. 339] として、同様に中田一郎氏はこの imēram をもう少し小型の「ロバ」と確定して「もし脱穀するためにロバを賃借したなら、大麦1 スート（約10リットル）がその料金である。」[loc. cit., p. 68] と翻訳なさっている。この訳文中で単位が1 桁違うことは 1 sūtu = (10 カ qû(m) = シュメール語 SĪLA ÷ 1 リットル弱) となるからであり、これらのことは、すでに前の第268条など随所でその換算率を説明してある。

基数		序数	
男性	女性	男性	女性
1 𒌦	išten, ešten ištenit	𒌦 𒀭 mahrū	mahrītu
10 𒌷	ēšru ēšrit, ēšerit	𒌷 𒀭 ēšrū	ēšrītu
20 𒌷𒌷	ēšrā	𒌷𒌷 𒀭 ēšrū	
30 𒌷𒌷𒌷	šelašā	𒌷𒌷𒌷 𒀭 šelašū, šalašū	

第270条（原文・逐語訳）


 sum-ma lalām a-na di-a-si-im i-gur lalū k maš₂-tur
 もし 小さい子羊を のため 脱穀 賃借したなら

 1 sila₃ seim a₂-šu
 1 シラの大麦が 手数料（である）

第270条（試訳）
















（この条文も、前の第269条と同様にアッカド語の文章としては第268条の主語「アウィルム階層の者」がそのまま続いて機能している）ある者が、脱穀のために小さい子羊（山羊あるいは小家畜）を賃借したならば、1シラ（約0.85リットル）の穀物（大麦）がその賃借料となる。

第270条の解釈

子羊（山羊または小家畜）の賃借料は、第268条の牛の20分の1すなわち第269条の驢馬（小型の馬）の10分の1で、1シラ（約0.85リットル）という極めてわずかなものである。こういうわずかな賃借料まで決められているところから、古代の経済の詳細が良くわかって面白くなる、と言えきだろう。

この条文を原田慶吉氏は「もし子家畜を打穀のために賃借したときは、穀物1クーがその借料。」〔loc. cit., p. 339〕と何の家畜が特定せずに翻訳し、同じく中田一郎氏は「もし脱穀するために山羊を賃借したなら、大麦1カ（約1リットル）がその料金である。」〔loc. cit., p. 69〕と訳しているが、lalāmが具体的にいかなる家畜なのかは不明である。筆者は山羊（ヤギ）等の家畜だとは思いますが、他に古代メソポタミアには、我々の知らない小家畜がその当時いたのかも知れない。

第271条 (原文・逐語訳)

				
sum-ma	a-wi-lum	ab ₂ -gud-ha ₂	şumbam	şumbu < *i ³ mar-gid ₂ -da
もし	人が	牛達	荷車	
				
u ₃	mu-ur-te-di	ša	i-gur	ridū 運転する
や	運ぶ者を	それを	賃借した時は	
				
/ i-na	ūmi	1* ^{am}	180(sila ₃)šim	i-na-ad-di-in
につき	一日	180	シラの大麦を	支払う
				180 = 60 x 3

第271条 (試訳)

ある者が、荷車の牛やそれを運ぶ者を賃借したる時は、一日につき180シラ (約150リットル余) の穀物 (大麦) を (その賃借料として) 支払う。

第271条の解釈




先行した第268条から第270条は、脱穀のための一時的な賃借であるが、この第271条は荷車を運ぶため、荷車用の牛と運ぶ者を1日の単位で賃借したような場合に、1日につき180シラ (約153リットル) の穀物 (大麦) をその賃借料として支払わなければならない、という規定である。

この条文を原田慶吉氏は「もし人が牛、荷車及びこれを運ぶ者を賃借したときは、一日に穀物180クーを与う。」〔loc. cit., p. 339〕と翻訳し、同様に中田一郎氏もその翻訳文を「もし人が牛 (複数) と荷車と馱者を賃借したなら、彼は1日につき大麦3 パーン (約180リットル) を与えなければならない。」〔loc. cit., p. 69〕としている。これらの容積単位の違いについては、先行する第268条や第269条でも解説したが、中田一郎氏はアッカド語の呼称パーン pānu(m)に、かなり拘泥しているようである。この1パーンは6 スート sūtu(m)に相当し、1 スートは10カ qū(m)として計算され

ていたようであるが、このカ qû(m)がシュメール時代では SILA のことであり、パーンもシュメール時代にはじあるいはバリガ BARIGA という単位（約60リットル）で計算されていた。またこのアッカド語パーンは、バビロニア時代のシュメール人からはシュメール語でパルシカットとも読ばれていたようである。このようにその時代の容積単位にこだわると、その換算率がかなり複雑になるが、60進法を推進したメソポタミア（特に古代バビロニア期）にあつては、それらを考慮せざるを得ないところがある。

この第271条の楔形文字原文第2行目で、イランのスーサで発掘されたハンムラピ法典の石柱裏面に刻されている楔形文字原文としては、その上から数えて第32欄目が左端（側面の方まで入っているが）で終了し、次の第271条の第3行目から下の段である第33欄（第33段目）の右側（これも右側面）から下に1行ずつ左側に次の第272条へと読み進めてゆくことになる。

第272条（原文・逐語訳）

 šum-ma a-wi-lum šumba ma もし 人が 荷車を	〔10桁の数詞〕 20 << ešrā
 a-na ra-ma-ni ša i-gur で 自身 彼 賃借するなら	30 <<< selašā 40 <<< arbaa 50 <<< hanšā, haššā
 i-na ūmi 1 ^{šam} 40 (sila ₃) šeim i-na-ad-di-in につき 一日 40 シラの 大麦を 支払う	60 ! išten sūšsu 70 !< sibā 80 !<< samanā 90 !<<< tišā 100 !-, !<<< meat

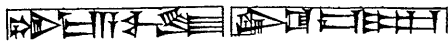

第272条（試訳）

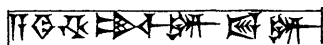
ある者が、荷車（だけ）を自分自身で動かすのに賃借するならば（その賃借料として）、1日あたり40シラ（約34リットル）の穀物（大麦）を支払うこととする。

第272条の解釈

前の第271条は、荷車と同時にそれを運ぶ牛と運搬する運送人の両方を賃借する場合であったが、本条では荷車だけで牛も運搬する者も雇わず、荷車だけを借りる場合は1日40シラ（約34リットル）の穀物（大麦）を賃借料として支払えば足りる、という内容である。この条文を原田慶吉氏は「もし人が実に荷車を賃借したるときは、1日に穀物40クーを与う。」〔loc. cit., p. 339〕と翻訳し、中田一郎氏のほうは「もし人が荷車のみを賃借したなら、彼は1日につき大麦4スート（約40リットル）を与えなければならない。」〔loc. cit., p. 69〕と訳しているが、中田氏の使用している単位スート sūtu(m)とシラとが1桁違うことは第268条と第269条の条文などに既に詳細に解説した。このような条文の中で使用される換算率の違いと用語の差は、各研究者によって仕方がないと思われる。

第273条（原文・逐語訳）


 sum-ma a-wi-lum a-wi-lum agram i-gur agru < hun-ga₂
 もし 人が 日雇い労働者を 雇った時
 10 
 is-tu ri-es sa-at-tim
 より 初め 年の



a-di ha-am-si-im arhi-im

arhu < itu

まで 五 月



6 se kaspim i-na ūmi l^{ka}m i-na-ad-di-in 1 se = 1/180 シェケル

6 シェの銀を につき 一日 支払い



is-tu [s]i-si-im arhi-im

より 六 月



a-di ta-ak-ti-da ša-at-tim

までは 終わり 年の



5 se kaspim i-na ūmi l^{ka}m i-na-ad-di-in

5 シェの銀を につき 一日 支払う

第273条（試訳）

ある者が、日雇い労働者を雇う場合、1年の始めより5月までは1日につき（給与として）銀6シェ（約0.28g）の薄片（貨）を支払い、6月より1年の終わりまでは1日につき（その給与として）銀5シェ（約0.23g）の薄片（貨）を支払わなければならない。

第273条の解釈

日雇い労務者の賃金であるが、季節により少し差があり、1年の最初から5月までは1日の労働賃金が6シェ、6月より1年の終りまでは日当5シェに下がるというものである。世界で最初に60進法を確立したこのメソポタミア（古代バビロニア期）において、1シェという単位は180分の1シェケルで、1シェケルが約8グラム強であるから、6シェで約30分の1グラムというわずかな銀の薄片（貨）が古代バビロニア時代の日当であっ

たとえられる。当時において貨幣としての銀（貨）は未だ無かったが、銀を薄く一定の型に鑄造して支払ったものと思われる。因みに古代ローマで銀が貨幣として鑄造されたのが B.C. 269年で、それ以前のローマでは 1 ポンドの重量に限定した青銅 aes を貨錠として重量をはかって支払いをなし、これを *ās librālis*（アース・リブラーリス）と定められていた。この略号 lbs が通貨として使われるようになり、後になって英ポンドの £ の通貨記号も出来たわけであるが、ローマで銀が貨幣として採用されるよりも約 1,500 年以上も前に古代バビロニアでは、このように銀の薄片（貨）を貨幣以前の重量をもって、取引に使用していたものである。

またこのシェという単位は、ホルスト・クレンゲル (Horst Klengel) 氏によれば「ウツェトゥ」という単位に置き換えられ、6 ウツェトゥが約 2.5g 余に計算されているが、クレンゲル氏自身他の重量計算についての換算について、かなり他に誤りもあるので、当時の正確な重量は良くわからない。ただ 30 分の 1 グラムというのは余りにも少量であるので、この点ではクレンゲル氏の換算のほうが正しいのかも知れない (op. cit., ホルスト・クレンゲル Horst Klengel 氏著、江上波夫・五味亨氏訳『古代バビロニアの歴史』山川出版社 p234 参照)。この第 273 条を原田慶吉氏は「もし人が質銀労働者を賃借したときは、年の初より第 5 月までは、銀 6 シェを 1 日に与え、第 6 月より年の終りまでは、銀 5 シェを 1 日に与う。」

[loc. cit., p. 339] と翻訳しておられる。ホルスト・クレンゲル氏ばかりでなく中田一郎氏もこの第 273 条の翻訳については「もし人が質労働者を雇ったなら、彼は年の初めから第 5 月までは 1 日 6 粒（約 0.28 グラム）の銀を与えなければならない。第 6 月から年の終りまでは、1 日 5 粒（約 0.23 グラム）の銀を与えなければならない。」[loc. cit., p. 69] としておられるが、その極少量にあまり関心が払われていないようである。

それでは、その労働者の日当という観点から考察しているクレンゲル氏

の文章を江上氏と五味氏の共訳でみると「料金は1日当りで決められる。人間や家畜の雇傭は短期間のものが多かったからである。料金は穀物（大麦のことである）で定められている。労働者一般あるいは特定の手工業者の雇傭を論じている2条文でのみ支払いは銀で示されている（273、274条）。そこでは日当は銀4～6ウツテトゥのあいだである。長期にわたって雇われている人への支払いでは、最初の5カ月分は幾分高額となっているのが興味を引くし、また雇傭契約文書の実際とも一致している。『もしもある人が労働者を雇傭したときには、かれには年の初めから5月までは1日当り6ウツテトゥ（約2.5グラム余）を与え、6月から年末までは1日当り5ウツテトゥを与える』（273条）。その相違はたいていの農作業が1年のうちの最初の5カ月、私たちの今日の暦では3月半ばから8月半ばに集中していたといえ、納得できるであろう。他の月々は農閑期であるから、報酬も幾分低かった。手工業者にはそのような区別はない。かれらにとっては年中同じ様に仕事があったのである。』〔loc. cit.,ホルスト＝クレンゲル氏著『古代バビロニアの歴史』山川出版社 p.234〕と記述している。

クレンゲル氏は、このように季節によって、1ウツテトゥの差があったことを指摘しているが、この古代バビロニアの月名をシュメール時代から見てみると、

	アッシリア	バビロニア	シュメール（ニップル）
nisannu	𒀭𒄩𒂍	𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍	'''bar ₂ (-zag-gar) 3～4 月
aiaru, iyyar	𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍	𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍	'''gu ₄ (-si-sa ₂) 4～5 月
siwannu, simānu	𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍	𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍	'''sig ₄ (-ga) 5～6 月
dūzu, tammuz	𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍	𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍	'''su (-numun-na) 6～7 月
abu	𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍	𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍	'''ne (-ne-nig ₂) 7～8 月
ululu, elulu	𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍	𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍	'''kin (-'inanna) 8～9 月
tišritu	𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍	𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍𒀭𒄩𒂍	'''du ₆ (-ku ₂) 9～10月




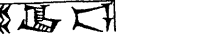




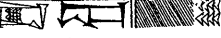

arahsamna		''apin(-du-a)	10~11月
kisiliwu, kislumu		''gan(-gan-na)	11~12月
tebetu		''ab(-ba-e)	12~1月
šabātu		''ziz(-a-an)	1~2月
addaru		''še(-gur.o-ku)	2~3月
atār-addaru		''diri-še(-gur.o-ku)	

シュメール、バビロニア、アッシリアと文字は略体化していくが、月名そのものに変化はない。ただ、その読み方は変わっていく。漢字の中国読みと訓読みの相違みみたいなものである。〔op. cit. 飯島紀氏著『アッカド語』国際語学社 p. 126参照〕

このように殆ど呼称としては変化せず、従って手工業者の賃金もシュメール時代に定められたものが、そのまま古代バビロニアにおいても適用されていたもの、と思われる。

第274条（原文・逐語訳）

	sum-ma a-wi-lum mār ummānim	ummānu < um-mi-a
もし 人が 子を 職人の		
	i-ig-ga-ar a2 5 še kaspim	
雇う時は 給料は ~ の 5 シエの銀を	a2 > idū	
	a2 5 še kaspim gab-a	gab-a > labānu
給料は 煉瓦鋳造者の 5 シエの銀を		
	[a2] 5 še kaspim kad	kad > kitū
給料は 亜麻職人の 5 シエの銀を		
	[a2] 5 še kaspim sun2	sun2 > narṭabu(?)
給料は 麦芽汁職人の --シエの銀を		

		ga > sizbu
給料は 牛乳職人の	--シェの銀を	
		simug > nappāhu
給料は 鍛冶屋職人の	--シェの銀を	
		alla > nagāru
給料は 大工の	4 シェの銀を	
		ašgab > aškāpu
給料は 皮なめし工	---シェの銀を	
		
給料は 芦細工人の	--シェの銀を	
		bānu < dim ₂
給料は 建築家の	--シェの銀を	
		
につき 一日	支払う	

第274条（試訳）

ある者が、職人の（階級にある技術）者を（1日）雇う（賃借する）場合は、その給料（として）は……の5シェの銀（貨、銀の薄片）を

煉瓦製造者の給料は5シェの銀（貨）を……

亜麻職人の給料は5シェの銀〃を……

麦芽汁職人の給料は……シェの銀〃を……

牛乳職人の給料は……シェの銀〃を……

鍛冶屋職人の給料は……シェの銀〃を……

大工の給料は4シェの銀〃を……

皮なめし工の給料は……シェの銀 \mathcal{N} を……

蘆（葎）細工人の給料は……シェの銀 \mathcal{N} を……

建築家の給料は……シェの銀 \mathcal{N} を……

（それぞれ）1日につき（日当として）支払うものとする。

第274条の解釈

本条は、古代バビロニア時代の職人あるいは手工業者の給料を規定したものであるが、この条文に先行する第273条で、おそらく重労働である日雇い労務者の賃金が、1日6シェから5シェと決められ、本条もだいたいそれに準じて給料が定められているものと考えられる。途中でだいぶ石柱に欠落があるので正確なところはわからないが、屋内で仕事する特殊な熟練工でも季節の良い時以外の日雇い労務者の給料に一致していたようで、5シェは約36分の1グラムというわずかな「銀の薄片（貨）」が、当時の日当としては認められていたようである。

当時の古代バビロニアは、今日の遺跡として発掘されるような自然環境ではなく、レバノン杉の森に覆われ、現在よりも季節などが豊かであったと考えられる。この条文に関して原田慶吉氏の翻訳としては「もし人が『手芸人の息』（＝手芸人）を賃借するときは、……の給料として銀5シェ、煉瓦師（？）の給料としては銀5シェ、麻織人（？）の給料としては銀 \square シェ、印業者（？）の給料としては銀 \square シェ、宝石細工人（？）の給料としては銀 \square シェ、鍛冶工（？）の給料としては銀 \square シェ、指物師（？）の給料としては銀4シェ、皮職人の給料としては銀 \square シェ、蘆細工人の給料としては銀 \square シェ、大工の給料としては銀 \square シェを1日に与う。」[loc. cit., p. 339-p. 340]としており、これに対して中田一郎氏のほうは、四角の空白で楔形文字が欠けているところを示さず「もし人が職人を雇おうとするなら、彼は1〔日につき〕、〔……〕職人の労賃として銀5粒を

(約0.23グラム)、〔織物〕職人(?)の労賃として銀5(?)〔粒〕(約0.23グラム)を、リネン〔職〕人(?)の〔労賃〕として銀〔x粒〕を、〔印章〕彫刻師の〔労賃〕として銀〔x粒〕を、〔弓〕矢職人(?)の〔労賃〕として銀〔x粒〕を、〔金属〕細工師の〔労賃〕として銀〔x粒〕を、大工職人の〔労賃〕として銀4(?)粒(約0.18グラム)を、皮細工師の労賃として銀〔x〕粒を、葦細工師の〔労〕賃として銀〔x〕粒を、建築師の〔労賃〕として銀〔x粒〕を、〔与えなければならない。〕」〔loc. cit., p. 69〕という文章の形で空白をアルファベットのxの字で表現し、翻訳なさっている。

楔形文字の欠落があるために、正確には復元できず、どの職種か明確に表示され、その給与がどの位であったか正確にはわからないが、先ず最初に手工業者一般の給与が5シェと定められているので、だいたいこれ前後の給与が日当として支払われていたもの、と考えられる。この6シェから5シェという給料は、銀の薄片(貨)で約1/4(4分の1)グラムを同じ型に切ったものと考えられ、その当時において軽い労働とみられていた職種においては、それよりも少々軽い重量の銀薄片が作られていたようである。中田氏は粒と考えておられるようであるが粒状にする程の重量は無く、薄い板状の薄片ではなかったかと思われる。直前の第273条にも記したように、古代社会においては、その貨幣単位を示す数字がその金属に記されることなく、古代ローマになってさえ(共和制時代でも)まだ同じ型の金属「銅」の薄片を、重量で計測して(天秤などで細かく計った)その価値(ās librālis)を示していたのである。〔アッカド語の数詞2～6〕

2	𐎶	sina, šena	sitta, sittin	𐎶 𐎶	sanū	sanitu, šanūtu
3	𐎶𐎶	salašu	salaštu, šelaltu	𐎶𐎶 𐎶	salšu	saluštu
4	𐎶𐎶𐎶	arbau, erba	erbittu, erbit	𐎶𐎶𐎶 𐎶	rebū, rabū	rebitu
5	𐎶𐎶𐎶𐎶	hamšu	hanšet	𐎶𐎶𐎶𐎶 𐎶	hamšu, haššu	hamuštu
6	𐎶𐎶𐎶𐎶𐎶	šiššu	šiššet	𐎶𐎶𐎶𐎶𐎶 𐎶	šiššu, šeššu	šiššitu

〔参考〕古代世界の銀（貨）

古代バビロニアの銀（貨）

バビロニア社会で、銀（貨）は1 マナ（現在の数価で約500g）の度量衡が定められていた。この下の単位は、古代バビロニアで60



進法が採用されていたので1 マナの60分の1を1 シェケルとして使用されていたので、今日の8.33gに相当する。この銀貨は、紀元前6世紀頃のギリシアで鑄造された約1.5シェケルの重量があると計算されるので、バビロニア社会の労働者はこの銀貨の約 $\frac{1}{40}$ の薄片が一日の労働者の賃金として支払われていたものと思われる。従って1ヶ月以上の労働によって、やっとこの長方形の銀（貨）1ヶの労働賃金を、何とか獲得できたはずなのである。

古代メソポタミア地方の銀（貨）

古代の通貨は、多様な金属などがさまざまな形態で、その都度「重量を計って」経済価値あるものとして使用されていた。銀（貨）も同様に、古代バビロニアでは労働者の賃金など銀の薄片の形で使用され、ある程度蓄積されることのないような厚みある長方形の「銀（貨）」として保存されていた。上はギリシア時代になってからイルカ型に鑄されたもの *𐎶*, in the shape of a dolphin



エレクトラム貨

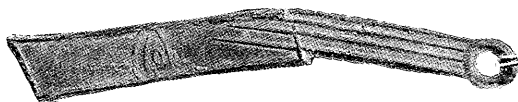
歴史の父ヘロドトスによれば「リュディア人は我々の知る限りでは、最初に金銀の貨幣を鑄造して使用した民族であって……」（『歴史』第I巻94）と記述されているが、現在の考古学（貨幣学）では、この





硬貨は「金と銀との天然合金」であり、俗称「琥珀金」（すぐ上の写真参照）と呼ばれていたが、おそらく紀元前450～330年に鑄造されたアケメネス朝ペルシア時代になってからのものであろうと見られている。バビロニアの銀（貨）と銀の薄片はそれよりも古かったと考えられている。

中国古代の銅貨（上のメソポタミアならびにギリシア時代の硬貨と比較参照）

これも同様に重量や枚数を計算して取り引きに使われていたと思われる。



第275条（原文・逐語訳）


⁴⁵ [sum-ma a]-wi-lum ----da(?) i-gur
 もし 人が --- を 雇ったら

 i-na ūmi 1^{kam} 3 še kaspim a₂ ša
 につき 一日 3 シェの銀が 給料 その（である）

第275条（試訳）






ある者が……を雇ったら、1日につき3シェの銀薄片（貨）が、その給料として支払われる。

第275条の解釈

雇われる者のところが、石柱の楔形文字において欠落しているので正確なところはわからないが、先行する第274条の条文から類推して、かなり程度の低い最も軽い労働に支払われていた賃金と見て良いだろう。3シェの銀は約60分の1グラムという極小さくて薄い銀の薄片であったと考えられる。この欠けている楔形文字のところをそのままの形で翻訳せず、原田慶吉氏は「もし人が大船を賃借したときは、1日に銀3シェがその借料。」〔loc. cit., p. 340〕という風に次の第276条との関連から、他の研究者の類推をそのまま利用した形で訳しておられる。これに対して、中田一郎氏は、この第275条に関しては石柱のまま「〔もし〕人が〔……〕を雇ったなら、1日当たり銀3粒（約0.14グラム）がその料金である。」〔loc. cit., p. 69-p. 70〕と数値をわざわざ正確な形で入れて、その職権を大船の賃借と特定せずに、翻訳なさっておられる。

シェという微細な重量を表わす単位が、もともと「大麦」を意味する言葉とアッカド語において同じであるところから、大麦の「粒」から警微な

重量を表わすこの単位が派生してきたとも考えられて、中田氏は粒という訳語を使用したと思われる。なおその象形文字（絵文字）から楔形文字への発達はシュメール時代から分っているが、以下に示すようなその経過を辿って、次のように

					se	se seu	大麦
---	---	---	---	---	----	-----------	----

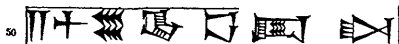
右側に移行したような楔形文字となり、古代バビロニアでは、それを重量単位として使ったか「麦の重さ」を比喩的に重量として使用していたのかは、明確なところはわかっていない。

第276条（原文・逐語訳）



sum-ma ma-hi-ir-tam i-gur

もし 川下り船（？）を賃借した時は



2+ 1/2 se kaspim a2 sa

2+ 1/2 シェの銀を 給料として その



i-na ūmi i-na-ad-di-in

に 一日 支払う

第276条（試訳）

（ある者が）河川を上下する船を賃借したる時は、2.5シェの銀薄片（貨）を、その1日の給与として、支払わねばならないものとする。



分数は次のように書く。

1/2 𐎶 1/3 𐎵 2/3 𐎶𐎵 5/6 𐎶𐎵𐎶

第276条の解釈

この条文に出てくる船舶を意味するアッカド語 *ma-hi-ir-tam* は、すでにこのハンムラビ法典第240条にも属格形の語尾 *-t-im* として登場してきたもので、その形態は後に古代ギリシアのヘロドトスがその著書『歴史』第1巻、第194章で「船には船首と船尾の区別なく、あたかも楯のように円形で、藁がいっぱいつまっている。人々は荷を積み込むと川の流を下ってゆく。その殆どの積荷はブドウ酒で赤粘土の壺の中に入っている。船は直立した2人の男による竿で漕がれるのだ。1人が手操ると他の1人は突いて押す。船の大きさはさまざまで、最も大きいものは5,000タランぐらいまで積める……」〔拙著『アルメニア史』泰流社刊 p. 41参照〕と述べているように、昔からどちらかと言うと丸い形の船でこのように運行されていたのではないか、と思われる。




船の大きさなどは、時代によって異なるかもしれないが、ティグリスとユーフラテスの両河川を上下する交易船の形態はだいたいこのようなものが多く使用されていて、その運賃が1日2.5シェの銀薄片（貨）だったということだろう。この条文に関して原田慶吉氏の翻訳としては「もし撓船を賃借したときは、銀2シェ半をその借料として、1日に与う。」〔*loc. cit.*, p. 340〕としているが、中田一郎氏も「もし人が川を遡る船を賃借したなら、彼は1日につき銀2粒半（約0.12グラム）をその料金として与えなければならない。」〔*loc. cit.*, p. 70〕と訳している。はたして「川を遡る船」とは同じ船でその川を下ることはないのか、そして下る場合は別料金なのかどうか疑問であるが、このような *ma-hi-ir-tam* という船ではなく、河川を（上）下する *-hi-ir-tam* が取れた一般的な「船」を意味する楔形文字 *ma* がシュメール時代の象形文字（絵文字）から楔形文字にまで発達した経過は以下の如く、

					ma	ma	船？
---	---	---	---	---	----	----	----

(ibid)

のように理解されている。

第277条（原文・逐語訳）

	elippu < ^{ma} ma ₂
sum-ma a-wi-lum elippi 60 gur i-gur	Y は 1 でなく 60
もし 人が 船を 60 グルの 賃借した時は	
	
i-na ūmi l ^{ka} m igi 6 gal ₂	
に 一日 1/6 シェケルの	
	
kaspim a ₂ ša i-na-ad-di-in	ardu < waradu < ir ₃
銀を 給料に その 支払う	amtu < geme ₂

第277条（試訳）









ある者が、60グルの船（約1万5千リットル余を積載できる船）を賃借する時は、1日につき6分の1シェケル（約1.5g 弱）の銀薄片（貨）をその賃借料として支払うべきものとする。

第277条の解釈

直前の第276条の船と違って、どこにでも行ける性能をもった（多分河川を横断する、平水地域に使用する）かなり大きな船の賃借料であると思われる。60グルの船とは、それが積載できる重量を容積で表示しているものとするならば15,300リットルであり、その賃借料が6分の1シェケル（1.33g）の銀（貨）ということになる。この条文の翻訳として、原田慶




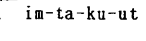
吉氏は「もし人が60クルの船を賃借したときは、1日に銀6分の1〔シクル〕をその借料として与う。」[loc. cit., p. 340]と訳し、中田一郎氏のほうは、相変らず単位の名前の読み方（グルをクルに、シェケルをシキルに、同様に原田氏もグルをクル、シェケルをシクルに）を変えて「もし人が60クル（約18,000リットル）積みの船を賃借したなら、彼は1日につき銀6分の1（シクル）（約1.34グラム）をその料金として与えなければならない。」[loc. cit., p. 70]と翻訳しておられる。

なおこの双方の単位が、シュメールの象形文字（絵文字）から楔形文字に変更した経過は以下の通りである。

				バビロニア	アッシリア		
絵文字		古拙文字	古典的 楔形文字	後期 楔形文字	音価		意味
					シュメール	アッシリア	
				gur taru kur ₃	gur taru qur	(容量単位) lgur・lugal = 300sila ₂	
				aga ₂ gin ₂ tu du ₃	pastu siqlu tu tun ₃	シェケル(重さ) 深さ	

[op. cit., 飯島紀氏著『アッカド語』～楔形文字と文法～国際語学社刊 p. 170 と p. 201参照]

第278条（原文・逐語訳）

	
sum-ma	a-wi-lum wardam amtam
もし	人が 奴隷 女奴隷を
	
i-sa-am	ma arhi su la im-la ma
買ったが、	月が その ないのに 終わら
	
bi-en-ni	e-li su im-ta-ku-ut a-na
ベヌ病が	上に その 襲ったなら
	
maqātu	落ちる、崩れる

na-di-na-ni šu u₂-ta-ar ma

nadinānu 売り主

売り主に その 返して、

ša-a-a-ma-nu-um kaspaṃ iṣ-qu₂-lu i-li-qi₂

買い主は 銀を 支払った 取り戻す

第278条（試訳）

ある者が、奴隷が女奴隷を購入したが、まだその月が終らないうちにその奴隷の身にペヌ病が襲ったならば、買い主はその奴隷を売り主に返却して、その支払った銀（貨）を取り戻すことができる。

第278条の解釈

この第278条から奴隷法に関する規定が5カ条にわたり、これによってハンムラビ法典の全体が統括された恰好で、条文と呼べるべき箇所はすべて終了しているのである。

古代世界において、奴隷は財産すなわち単なる「もの」で人格などは認められていないが、それだけに主人の所有物としての立場をきちんとわきまえさせる必要があったのだ、と思われる。

この第278条は、奴隷を購入した者が1カ月以内（その月の数え方は第273条の解釈を参照のこと）に、その奴隷が心身ともに健全に機能するかどうかを確認し、その期間に重大な病気が襲ったような場合にその奴隷を売り主に返却して、購入代金を銀（貨）で返還してもらうことができることを規定したのがこの第278条であろう。

ペヌ病が、いかなる病気を意味するか、その当時に生きてはいなかったので良くわからないが、奴隷が健康に働けないで寝込むほどの重大な病気である、と解釈すればよいであろう。この条文を原田慶吉氏の訳文とし

ては「もし人が奴隸女奴を買いて、その月末だ満了せざるに、ベンヌム (bennum) 病 (癰癤?) が彼の上に襲いかかりたるときは、彼の売主に返して、買主は支払いたる銀を取る。」[loc. cit., p. 340] という文章を出しており、それに対して、中田一郎氏としては「もし人が男奴隸 (あるいは) 女奴隸を購入し、その月が終わる前に彼 (その奴隸) に癰癤がおこったなら、彼は (その奴隸を) その売手に返し、買手は彼が支払った銀を受け取ることができる。」[loc. cit., p. 70] という翻訳文にしている。

このように奴隸売買契約は、バビロニアの暦〔第273条の解釈参照〕を基準にして定められていたようである。

第279条 (原文・逐語訳)

			
sum-ma	a-wi-lum	wardam	antam
もし	人が	奴隸	女奴隸を
			
i-ša-am	ma	ba-aq-ri	ir-ta-ši
買ったが (戻すよう) 要求を 受けた時は			
			
na-di-na-an	šu	ba-ag-ri	i-ip-pa-al
売り主は	その	要求を	返す (聞く)

rašū 充当する、受ける

apālu 返す、払う

第279条 (試訳)

ある者が、奴隸か女奴隸を購入したが (その奴隸の所有権を) 取り戻すよう要求 (返還要求) を受けたる時には、売り主はその (返還) 要求を聞かねばならない (奴隸を返さねばならない) ものとする。

第279条の解釈



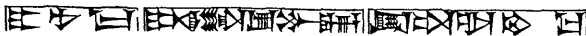
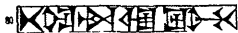


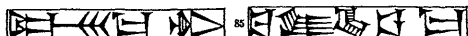

アッカド語の意味が明確に把握できないが、特に2行目の解釈は、購入した者が要求した事を売り主は拒否できない、と理解すべきだろう。そして、その購入者の要求とはおそらくその奴隷を完全に自分の所有物として確認することからくる不都合とみるべきで、売り主がその奴隷を売る前に仕込んでいた技能や癖をそのまま奴隷が持ち続け、新しい購入者の命令をきくのに支障が出たような場合に、前の売り主からそうしたことを継続させない確認をとったのが、この条文の規定であったのではないと思われる。

すなわち、売り主があらゆる面でその奴隷に対する所有権だけでなくすべての権利を放棄し、もとの仕事の命令等を継承させない確認をおこなったのが、この条文の規定と思われるのである。またこの条文は、その奴隷の売買が不当であると他の第三者がある奴隷取引きに異義を申し立てた時に、「それを解決するのは売り主の側である」と解釈することも出来る。この第279条を原田慶吉氏は「もし人が奴隷女奴を買いたるに、取戻の請求を受けたときは、彼の売主は取戻の請求を満足せしむ。」[loc. cit., p. 340]と翻訳し、それに対して、中田一郎氏のほうもその翻訳文としては「もし人が男奴隷または女奴隷を購入し、彼（奴隷）に対して返還要求が出たなら、彼の売手が返還要求に対して責任を負わなければならない。」[loc. cit., p. 70]という文章を記しておられるが、その解釈としてはそれだけではないように思われる。

				バビロニア	アッシリア		
絵 文 字		古拙文字	古典的 楔形文字	後 期 楔形文字	音 価		意 味
					シュメール	アッシリア	
					ir ₃ nita ₂	ardu zikaru	男、奴隷
					geme ₂	amtu	下女

(ibid.,)

第280条（原文・逐語訳）


 sum-ma a-wi-lum i-na ma-at nu-ku-ur-tum
 もし 人が で 国 外の

 wardam amtam sa a-wi-lim is-ta-am
 奴隷 女奴隷を の 人 買って、

 i-nu-ma i-na li-ib-bu mātim it-ta-al-kam ma
 時 に 中 国の 戻った

 be-el wardim u₃ lu amtim
 （以前の）主が 奴隷又は 女奴隷の

 lu wara-zu u₃ lu ama-zu
 それが彼の男奴隷であれ女奴隷であれ

 u₂-te-id-di sum-ma wardum u₃ amtum šu-nu adū 認める
 認めるのなら もし 奴隷又は女奴隷が その

 mārē ma-tim ba-lum kaspima
 子達なら 国の なしで 銀

 an-du-ra-ar šu-nu is-ša-ak-ka-an
 自由を その 定める（解放される）
 sakānu 置く、指定する

第280条（試訳）

ある者が、国（古代バビロニア王国の版図）の外で奴隷か女奴隷を購入して、国の内側に戻った時（帰国した際）に、もとの奴隷または女奴隷の持ち主がその者の男奴隷または女奴隷の所有を認めるのならば、その奴隷または女奴隷がその国の者であると確認できた場合には、銀（貨）なしでその自由を認めてやらなければならないものとする。

第280条の解釈

外国で購入した奴隸についての規定で、やはり直前の第279条と同様にアッカド語の解釈が何をどのような形で認めるのか、その詳細が不明であるからして、正確な解釈が成立しないのが残念である。多分この規定は、古代世界で外国から連れてきた奴隸のものの主人すなわち自分の国の人間が奴隸として連れ去られたことを訴えてきた場合には、その外国がある程度の力をもって、さらに連れてきた方法がかなり強引であることがわかった時は、その奴隸を金銭を取り返すことなしに解放せねばならない、と決められていたと思われる。

この条文は、次の第281条とも深く関連し、その後の奴隸の処置は第281条で具体的にどうするか、が決定されるのである。

またこの条文の冒頭にある *ma-at nu-ku-ur-tum* を単に外国だけでなく、バビロニアと戦争している国すなわち敵国とみて、その敵国で奴隸または女奴隸を購入してバビロニアに連れてきたものの、彼等をもとの所有者が「バビロニア王国の人間」と認めたら、それらの奴隸は解放されなければならないが、その奴隸がバビロニア人でなかった場合には、「もとの所有者が、その奴隸を敵国において購入してきたその商人にその代金を賠償することで、それらの奴隸を取り戻すことが可能となった」と解釈することも出来るが、この条文はいずれにせよアッカド語の細部に亘る解釈と理解が難しく、誰もが違和感抜きで明瞭に解釈できるのはなかなか困難である。同様に古代ローマの「十二表法」*Lēx duodecim tabulārum* の第三表第7条にある奴隸の規定で「外国人に対して、アウクトリタースは永久なれ」という条文も、この *āctiō auctoritatis*（売り主もしくは前権利者の担保責任）として理解されてはいるものの、その解釈はかなり難しく、このハンムラピ法典第280条との比較法的考察が必要となってくるであろう。この条文を最初に翻訳した原田慶吉氏の訳文は「もし人が敵国（外

国)において、人の奴隷女奴を買いたるに、〔その奴隷女奴が〕国(即バビロン)の内部に赴きて、奴隷あるいはまた女奴の〔以前の〕主が、彼の奴隷にせよあるいはまた彼の女奴にせよ、これを認めたときに、もしその奴隷または女奴が「⁸⁴国の息」なるときは、銀なくして彼等の解放が行わる。」〔loc. cit., p. 340〕となっており、この第280条の第7行目(原田氏は石柱裏面の上から第23欄の右から数えて第84行目ということで註釈をつけている)の最初にある māre ma-tim を「国の息」と訳し、これに対して以下の〔註 qq. v.〕をつけて「〔註〕(84行) 本国人、即バビロン人。」と解釈していることが追加されている。その一方で、そのはるか後に翻訳した中田一郎氏はその訳文「もし人が外国で別の人の男奴隷あるいは女奴隷を購入し、国内に帰ってきたときに、男奴隷あるいは女奴隷の(元の)所有者が(それは)自分の男奴隷あるいは女奴隷だと認めたならば、もしその男奴隷あるいは女奴隷が同国人なら、銀(の支払い)無しに彼らは自由の身とされなければならない。」〔loc. cit., p. 70〕という風に、単に「同国人」とだけ解釈するに留めている。

この原田氏が、バビロン人と〔註〕をつけている ma-tim に関して、ホルスト・クレンゲル(Horst Klengel)氏は、以下の如く解釈されている。「……購入奴隷というのはその一部は異種族、とりわけ戦争捕虜から、また一部はバビロニア人から補充されたが、後者のバビロニア人というのは支払い能力のない債務者であったり、家族によって『銀と引き替えに売り払われた』者であったり、あるいは罪を犯したのでその罰として奴隷に売り払われたりした者であった。古バビロニア史料のなかでも奴隷購入文書は豊富である。それから推定できる限りでは女奴隷が売られる数は男奴隷のほとんど2倍近かった。その理由を考えると、多数の男奴隷がいると国家の安全にとって危険であるし、何ととっても女奴隷の場合に比べると男奴隷を投入する余地が乏しかったのである。小農民経営の農業生産

では奴隷の使用はごく限られていたのに対して、穀物を碾^ひいたり布を織ったり家事をしたりなどには多くの女奴隷が使われた。値段は文書のなかでも実に様々であり、奴隷の境遇、能力あるいは急いで買い求める必要があるかどうかによって左右された。ハンムラビの法規では銀20シクルという価格が前提となっており、購入文書でも平均すれば大体そんなところで取り決められている。……」〔op. cit., 『古代バビロニアの歴史』山川出版社 p. 235.〕という風に記述されている。

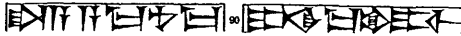
古代社会において、その奴隷制度は社会構造だけでなく経済状況によっても夫々の社会においてかなり差があったと思われるが、今日のように人間としての人格があったわけではなく、物として所有の対象であったことだけは、どの社会でも共通していた。いずれにせよ古代社会にあっては最も重大な財産であったことだけは確かである。

第281条（原文・逐語訳）



sum-ma mārē ma-tim sa-ni-tim

（上記で）もし子達なら 国の 他の



sa-a-a-ma-nu-ma i-na mahar i-lim

買い主は で 前 神



kaspam is-qu₂-lu i-ga-ab-bi ma

銀（額）を払った 告げて、

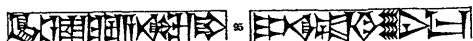


be-el wardim u₃ lu antim

（以前の）主は 奴隷又は 女奴隷の

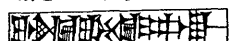
qibū 話す

lu は qu₂ の数り



kaspaṃ iṣ-qu-lu a-na tamkarim i-na-ad-di-in ma

銀を 支払った に 商人 与えて、 tamkāru < dam-gar₃



lu wara-zu lu ama-zu i-pa-aq

pāqu 任せる、託する

彼の男奴隷であれ女奴隷であれ 身請けする

第281条（試訳）

（直前の第280条より、アッカド語の文章は続いていて）他の国の者であることがはっきりした場合には、購入者は神の前で（その奴隷を購入した時に）支払った金額をはっきり告げて、もとの奴隷または女奴隷の持ち主はその商人に（奴隷購入で）支払った銀（貨）を与え、その奴隷または女奴隷を取り戻すことができる。

第281条の解釈





第280条で、外国から購入した奴隷が無理に拐わされた場合等が判明した時にその奴隷は解放されると解釈できるが、この第281条の場合はそうではなく正当に金銭（銀）で購入した時に、その購入者は神前でその購入金額をはっきり告白し、その以前の所有者はその金額を売った商人に支払うことでその奴隷を取り戻すことができる、と解釈するべきであろう。この第281条と先行する第280条の解釈は、ここに記されたアッカド語の文章からはこのような解釈しか出てこないと思われるが、古代バビロニア時代に記された他の粘土板文書から推察すると、かなり異った解釈もできるようになる。そもそもハンムラビ法典の末尾の5カ条で、改めて「奴隷に関する規定」が置かれるように至ったのは、この法典の最初のほうの幼児誘拐（第14条）に続く第15条から第20条の奴隷逃亡法規とも複雑に関連していると思われるが、主としてこの末尾に位置する5カ条は戦争捕虜から

奴隷となった者ではない、その他の事情によって外国で以前から奴隷になっていた者（主としてバビロニア人）を扱っていると思われる。

そうした奴隷の中で、ある者は逃亡して古代バビロニアの領域版図から去り外国へ行った者でもあるし、また外国から侵入してきた軍隊によって連れ去られた奴隷などもいるだろう。そうした奴隷が買い戻されるということは、以前の奴隷状態に置かれることを意味したものであると考えられる。

そのような外国に連れ去られ、そこで奴隷となった者の中で、かつてバビロニアの版図ではアウィルム階層またはムシュケーヌムであった者が外国では奴隷となっていて、それがバビロニアに買い戻されることもあったことだろう、前の第280条でそうした事情が判明したならばもとの身分として放免される、と解釈できるが、この第281条はその逆のケースとも考えられるのである。この第281条を原田慶吉氏は「もし『他国の息』なるときは、買主は神の前において、支払いたる銀を告げ、しかる後奴隷あるいはまた女奴の〔以前の〕主は、支払いたる銀を商人に与えて、彼の奴隷にせよ彼の女奴にせよ、これを請け戻す。」〔loc. cit., p. 340〕と前の第280条と対比的に翻訳し、その一方で中田一郎氏は「もし（その男奴隷あるいは女奴隷が）別の国の人なら、その買手（商人）は神前で彼が支払った銀（の額）を述べ、男奴隷あるいは女奴隷の（元の）所有者は彼（商人）が支払った銀をその商人に与えなければならない。そして彼はその男奴隷あるいは女奴隷を請け出さなければならない。」〔loc. cit., p. 71〕と訳しておられる。

第282条（原文・逐語訳）


 sum-ma wardam a-na be-li šu
 もし 奴隷が に 主 彼の

 u2-ul be-li at-ta iq-ta-bi
 「決して 私の主人 貴方は ～でない」といったなら
 100 
 ki-ma wara-zu u2-ka-an šu ma
 かどうか 彼の奴隷 確認した上、

 be-el šu u2-zu-un su i-na-ak-ki-is nakāsu 切り落とす
 主は 彼の 耳を 彼の 切る

第282条（試訳）

奴隷が、その自分の主人に向って「貴方は決して自分の主人などではない」などと言ったりした場合に、その主人はその奴隷が自分の奴隷であるかどうかを立証（確認）した上で、その奴隷の耳を切り落とすことができる。






第282条の解釈

奴隷に対する処罰のひとつとして、その奴隷が自分の身分上の自由を主張したり、その主人に対して所有者であることや主人の自分に対する権威を否定するような発言をした場合に、その主人はその奴隷が自分の所有物であることをきちんと立証（奴隷であることを確認）した上で、その奴隷に（対する処罰として）その耳を切り落とすことができる、と規定したのである。このハンムラビ法典に置かれた最後の条文としての規定第282条である。

旧約聖書の『出エジプト記』第21章第6節で、ユダヤ人の奴隷が6年間

奴隸として働いた後に自由となることができるが、そのまま奴隸としてその家にとどまる場合、主人は入り口の柱のところへ連れて行き、彼の耳を錐で刺し通すならば、その者を生涯奴隸とすることができる、という規定がある。耳に穴をあけるということはこの旧約聖書以外でも、一般的に考慮して奴隸の耳の穴に紐を通して束縛できるわけで、耳を切り落としたような場合にはそうした拘束手段がなくなるから、古代バビロニアにおいて耳に穴をあけるということは未だ実際の拘束する方法としての制度としてはおこなわれていなかったのかも知れない。

この第282条すなわちハンムラビ法典の石柱に記された条文としては最後となるこの条文を、原田慶吉氏は「もし奴隸が彼の主に向いて、『貴方は決して私の主人ではありません』と言いたるときは、彼の奴隸として彼に確証して（彼に彼の奴隸なることを確証して）、彼の主は彼の耳を切り取る。」[loc. cit., p. 340]と翻訳しており、それに対してかなり後にこの条文を訳した中田一郎氏の訳文も「もしその奴隸が彼の（元の）所有者に対して、『あなたは私の主人ではない』と言ったなら、彼は彼（その奴隸）が自分の奴隸であることを立証しなければならない。そして彼（奴隸）の所有者は彼（奴隸）の耳を切り落さなければならない。」[loc. cit., p. 71]という風に従来翻訳されてきた「主」と「(元の)」所有者という単語が違うだけでほぼ同様の翻訳文を掲げていらっしやる。しかしながらこのパーレン（マル括弧）内の「元の」という単語を、現在の所有者ではないと解釈しているならばかなり異った内容になると思われる。いずれにせよ奴隸が主人に対して、その所有者を否定するような暴言を投げたときその処罰として「耳」を切るということは、セム系民族にその後も残ったと思われるが、この耳を意味するシュメール語の象形文字（絵文字）が楔形文字として変化し、アッカド語にまで継続したことは、以下の如く時代的に左から右へと変ってきたことから良くわかる。

バビロニア				アッシリア			
絵 文 字		古拙文字	古典的 楔形文字	後 期 楔形文字	音 価		意 味
					シュメール	アッシリア	
					tal ₂ wa ki, bi, gestu	ma ki	大きい 籠耳

〔op. cit., 飯島紀氏著『アッカド語』国際語学社 p. 189参照〕

なおこの第282条の楔形文字原文第4行目の最後で、丁度パリのルーヴル博物館に設置されているイランのスーサで発掘されたハンムラピ法典の石柱原文は、石柱の表面に刻された象徴図像の下から原文として始まり、その第5欄に位置する右から第26行目のところから、前文が終了して「条文」としての第1条の部分がスタートして始まってから、左方向そしてそのまま下に続いて、それが石柱の裏面に移り、その上部から数えてこの第23欄までの左端（左側面）で、条文部分に相当するところが全部終了して、それ以下の第24欄から「後文」となって第28欄までで楔形文字で刻された部分は、すべて終了することになる。

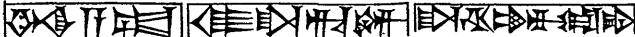
そしてこの第282条が終了する裏面の第23欄（上から数えて第23段目）あたりが、石柱としては一番太い部分になるので、この最終行（第282条の第4行目）が右端（右側面）から数えて第102行目という、縦書きの条文としては一番幅を取った、広い部分となるのである。

ハンムラピ法典 後文


後文も前文と同様に、全て楔形文字によるアッカド語の文章を「27段落」に分割し、その段落毎に楔形文字の原文を最初に掲げ、次に試訳とその解釈を掲載してゆくことにしたい。

この後文は、ハンムラピ法典の石柱裏面下部（最上段から数えて第24欄）の右側端から刻まれた縦6～8 cmの欄を上から下に読んで、そのまま左側に読み進み、上から第28欄が終りの最終欄となって左端で終了している。ここまで記されてきた（282ケ条）の条文にそのまま継続する形で、法典石柱の裏側下部4分の1を、以下の「後文」が記され、ハンムラピ法典石柱に刻まれた全部の文章が完結するのである。

後文第1段落の楔形文字原文

Col. XL 
 di-na-a-at mi-ša-ri-im Sa ha-am-mu-ra-bi
 法規 正義の 所の ハンムラビが

 Šar-ru-um li-u₂-um u₂-ki-in-nu ma
 王 賢い 確立して、

 ma-tam u₂-sa-am ki-nam u₃ ri-dam dam-ga-am damqu 純粋な
 国土に 支持 安定した と 政府を 純粋な

 u₂-ša-az-bi-tu sabātu 新む
 獲得した

後文第1段落の試訳

賢い王ハンムラビが確立して、それによって（バビロニアの）国土に安定した支持と純粋な政理事を獲得したところの「正義の法規」（が以上の通りで、以下に示すようにこれから後が後文となる）。

後文第1段落の解釈

ハンムラビ法典で、従来「条文」とみられてきた箇所のすぐ後に、4行にわたって「その条文の正当性を訴えた文章」が挿入されており、この文章を含めてすべて後文と解釈するかどうかで、かなり問題がある。

この箇所の冒頭にある di-na-a-at mi-ša-ri-im（正義の法規、正しい判決）の di-na-a-at が、法律として規定された「法規」なのであるか、あるいはこの「条文」そのものが法典として出されたものではなく、ある種の「判決」という形でハンムラビ王が、司法神シャマシュの命令によって、神から任ぜられた裁判長官として下した正しい判決の例なのであるのか、

アッシリア学者の間でもかなり議論されているからである。特にこのハンムラピ法典の石柱以外に見つかった粘土板などの資料を分析・解説した、マイスネル (B. Meissner) 氏が著した“*Beiträge zur Assyriologie*”などでは「…… (このようにして) 判決を出す判事、その決定を下す (最終的な) 決定者である司法神シャマシュとアダドの命令によって、私ハンムラピの判決が……」という法資料から、明らかに従来ハンムラピ法典の条文のところは、法典としての条文ではなく「判決」で、それも拘束性のないものだ、という見解も確立しているように、みうけられるのである。



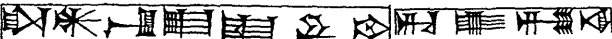





しかしながら、法史学のうえで Codex (法典) というものが、いつの時代に体系的な実定法上の「法典」として確立したかを正確に定義することは難しく、法典編集 Codification なるものが、19世紀から始まると考えるのは、浅学な実定法学者の思いあがりでしかない、と言えよう。

この楔形文字4行の直訳としては「(以上羅列してきた条文が) 有能なる王ハンムラピが確立し (もって) バビロンの国をして、真正にして善良なる方途を歩ませしようとした (原田慶吉氏のように「確固たる救済と善良なる政事を獲得せしめんとした) 正義の法規なのである」あたりが、順当なる訳文としても良いように思われる。

原田慶吉氏は、この後文に導入する部分の文章を「有能なる王ハンムラピが確立し、もって国 (即バビロン) をして、確固たる救済と善良なる政治を獲得せしめたる正義の法規。」[loc. cit., p. 341 l. 1~l. 2] と断言した形でこの部分を翻訳している。そして B. マイスネルなどの理論を背景に、単なる判決とする説を支持する中田一郎氏は「(これらが) ハンムラピ、有能な王、が確立し、(それによって) 国 (民) に真にして善なる道を歩ませようとした正しい判決である」[loc. cit., p. 71 l. 13~l. 14] と翻訳しているが、ハンムラピ法典を深く考察すると、どうもこのような解釈は正当とは思われない。di-na-a-at がはたして「判決」だけに限られる

ものか、当時の実定的な「法規」なのか、これからゆっくり考察してゆくことにしたいものと考えている。

後文第2段落の楔形文字原文


 ha-am-mu-ra-bi sar-ru-um gi-it-ma-lum a-na-ku
 ハムラビ 王 完全な 私は

 a-ra sag-gig
 のため 頭 黒い (国民) 元来シェメール人の意味

 ša i^uen-lil₂ iš-ru-qam ri-u₂-zi-na
 所の 神エンリルが 示し、私を 保護者として

 i^umarduk i-din nam rēūtu 保護者
 神マルドゥクが 与えた 私に nadānu 与える

 u₂-ul e-gu a-hi u₂-ul ad-di
 決して 無視せず 私の側で決して 投げ出さず

 aš-ri šu-ul-mi-im eš-te-i-ši-na šim a-hi = ah-i
 場所を 平和の 求めた 彼らに nadū 投げる

 pu-us-ki wa-[aš]-tu-tim u₂-[pi]-it-ti šēu 心配する、求める
 困難を 険しい 開いて pitū 開発する、發す

 [u₂]-si-am u₂-še-zi-ši-na si-im uSū 助け、支柱
 助けを 運んだ 彼らに ašū 出て行く、逃げる

後文第2段落の試訳

余は、完全無双な王ハンムラビである。エンリル神が、余を（保護者として）示し、マルドック神が余に牧人（牧師）の権（王権）を与えたところの黒い頭（国民）のために、決して無視を（したり）せず、余の側で（この両神は、私を保護することを）決して投げ出したりはしなかった。彼等（この両神）に平和の場所を求めたのである。険しい困難（隘路）を切り拓いて、彼ら（国民）に助け（光明）を運んだものである。

後文第2段落の解釈

後文の最初に、この各条文（判決文）の正当性を先ず提示した後、ハンムラビ王は自分の絶対性を強調して（これから記述する）以下の業績を掲げている。この第2段落1行目は、原田慶吉氏の訳のように「朕は、完璧無双の国王ハンムラビなり」[loc. cit., p. 341 1.2] で文章が切れている、とみてさしつかえないであろう。

そして、それに続くものとして原田氏は「エルリルが朕に贈り、それが牧人の役をばマルドックが朕に与え給いし黒頭人（人間）のためには、朕は決して怠慢なりしことなく、朕の側を（に）決して投げ出せし（手を拱きし）ことなく、幸福の場所を彼等に探し求め、切実なる苦難を切り開き、光を彼等に立ち昇らしめたり。……」[loc. cit., p. 341 1.2～1.4] というのが原田氏の翻訳である。原田氏がエルリルという片仮名で記しているエンリル神は、もともとメソポタミア地方に吹く「風」の神で、これが俵屋宗達の「風神雷神図屏風」のような形で拡大して「嵐」さらにはアヌ神のいる天宮の行政官となり、後にはバビロニアで「人間の国王の原形」とみられるように展開していったものと思われる。

この部分を中田一郎氏は「私、ハンムラビ、完全なる王は、エンリルが贈ってくださり、マルドックがその牧人権（王権）を私にお与えになっ

た人々（直訳：黒頭人）に対して怠けず、無為に過ごすこともなかった。私は彼らのために安全な場所を絶えず求め、隘路を切り開き、光を照り輝かせた。」という平凡な文章で翻訳している。

この楔形文字第3行目の終りにある *ri-u₂-zi-na* が、前文第1段落の終りから2行目にある *ri-i-a-um* から派生し、同様に第8段落にある「ラガシュとギルスという都市のために牧場 *mi-ri-tim* と水飲み場を決定したる完全なる警告者……」の中にあるような *mi-ri-tim* を管理する者、というところから遊牧民族の牧者（牧人）そしてそれが王権を意味するようになったとみて「王権」そのものと解釈できるかどうかはかなり疑問が残るが、いずれにせよその後のユダヤ教ではこの呼称が王権につながり、後にキリスト教でも宗教指導者（牧師）ナザレのイエスの別称となって、神聖な存在を表わす名称に転化してゆくところから、もう既にアッカド語の段階から牧者の権はそのまま「王権を意味するもの」と解釈して良いのではあるまいか。

この単語がどこまでかかるか、またそれを受ける動詞の過去形が *id-din-nam*（与えられた、示された）というこのハンムラビ法典そのままの訳文で良いのか、他の粘土板に出ている *iš-ru-kam*（贈られた）と解釈しても良いのか、かなり多く疑問のまだ残るところであるが、一応「エンリル神が余に示し、マルドゥク神が余に牧人の権（王権）を与えた黒頭人（国民）のために……」という解釈が、無難なところであるかも知れない。

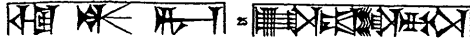
それに続く「決して無視をせず……」というところは「無為に時を過ごすこともなく……」あるいは「（人民を統治するにあたって）決して怠慢な政治をおこなうこともなかった……」と拡大して解釈するほうが良いのではないか、と思われる。

後文第3段落の楔形文字原文



i-na kakkim da-an-nim ša i¹uza-ba₄-ba₄ kakku < *i²tukul

で 武器 強力な 所の 神ザババ



u₃ i¹inanna u₂-ša-at-li-mu nim inanna > išturu

や 神イナンナが 任せた 私に talāmu 任す



i-na egigalim ša i¹en-ki i-si-ma'am egigalu < igi-gal₂

で 博識 所の 神エンキが割り当てた šāmu 決する、命ずる



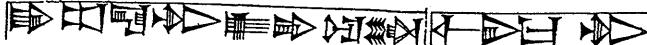
i-na li-u₂-tim ša i¹marduk id-di nam

で 力 所の 神マルドゥクが与えた 私に



na-ak-ri e-li-iš u₃ ša-ap-li-iš az-zu-uh₂ nasāhu 勝当する、根こぎにする

敵を 上 や 下で 根絶した



ga-ab-la-tim u₂-bi-el-li šī-ir ma-tim tābu 良くする

戦いを 無くし 福祉を 国の qablu 戦い



u₂-ti-ib ni-ši da-ad-mi a-bu-ur-ri balū 破壊する、消す

良くした 国民を 住居に 安全の



u₂-sar-be-iš mu-gal-li-tam u₂-ul u₂-sar-ši rabāšu 休みを取る

休ませ、苦しめる者を 決して 許さない galātu 苦しめる

後文第3段落の試訳

ザババ神やイナンナ（イシュタル）神が、余に任せたところの強力な武器でもって、エンキ（エア）神が割り当てたところの博識で、（さらにまた）マルドゥク神が私に与えてくれたところの力で、上（北）や下（南）で、敵を（ついに）根絶したのである。戦闘を無くなし、国の福祉を良く

したの（は余なの）である。国民を安全な住居に休ませ（住ませ）て、（それを）苦しめたりする者を決して許しはしなかったのだ。

後文第3段落の解釈

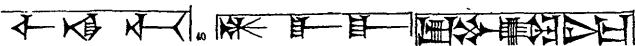

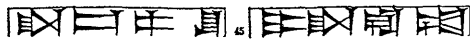
この楔形文字第1行目の終りに出てくるザババ神（原田慶吉氏はイルババと訳す）というのは、キッシュという都市の神となったニムルタ神の変身したもので、前文第5段落の末頃に出てきたようにザババあるいはイルババと呼ばれるようになった地方の部族神で、その地方で取れる強力な武器の原料で強力な武装が可能になること（もしかしたら鉄などの金属を使用したことを述べているのかも知れない）をこの文章は示している。次に出てくるイナンナ神は、やはり前文の第4段落から第5段落に出てくるイシュタル神が、シュメール時代にはイナと呼ばれていたもので、もともと愛と豊饒と生殖の女神がアッカド期に戦神と化したものである。

ところで今までにハンムラビ法典を後文まで訳した先人の翻訳を見てみると、この部分を原田慶吉氏は「朕はイルババとイシュタルが朕に貸し給いし精鋭なる武器もて、エアが朕に定めたまいし叡智もて、マルドックが朕に与え給いし手腕もて、敵をば上と下に根刮ぎにし、戦争を抹消し、国（即バビロン）の肉をば良好ならしめたり（国の福祉を増進したり）。人民をして圉の住所（安全なる住所）に住わしめ、不安ならしむる者を決して彼等に得せしめしことはなし。」〔loc. cit., p. 341 l. 4〜l. 7〕であり、その後と同じ箇所を中田一郎氏は「ザババとイシュタルが私に託された強い武器でもって、エンキが私に定められた知恵でもって、マルドックが私に与えられた¹⁴⁷能力でもって、北や南で敵を根絶し、戦いを鎮め、国民の肌（の色つや）を良くし、（すべての）居住地の人々を安全な牧草地に住ませ、誰にも彼らを脅かさせはしなかった。……」〔loc. cit., p. 71 l. 21〜l. 25〕と翻訳し、その頁の下に脚註〔qq. v.〕として、以下のよう

に「147」「法典」碑の「私に与えられた (id-di-nam)」にたいして、e テキストには「私に贈られた (iš-ru-kam)」とある。」と追記されているが、動詞の意味するところは両方ともほとんど同じであろう。

古代ローマにおいても、軍神マルスと深い関係にあった民族の父たるユピテル（神）やクイリヌスなどは、もともと「ローマ人全体の神」に関連するとともに、その全てが農業、愛欲、富の生産などの分野に深く関っていた。そしてインド・ヨーロッパ学においては、ゲルマンの軍神ティールがほぼマルス神と同一視され、ラテン語の石碑に Mars Thincsus（民会のマルス）と呼ばれていたことからわかるように、まさにこの同一視された神は「裁きの場である戦場において、正義の側に勝利を与えることによって判決を下す神」となってゆくのである。〔op. cit., 吉田敦彦氏著『ギリシア神話と日本神話』みすず書房 p. 204 参照〕丁度古代インドのインドラ神が、金剛杵ヴァジュラを手にして、風の変化したマルト神群を引き連れて戦闘に臨むように、イシュタールも天候神としてハンムラピ王に味方する、と考えたほうが良いだろう。

後文第 4 段落の楔形文字原文


 si-na-ti ilāni rabūti ib-bu-u₂-nin ni ma nabū 名を呼ぶ
 （彼らを）神々が 偉大な 呼んだ 私を rabūtu < gal-gal

 a-na-ku ma rēum mu-sa-al-li-mu-un Salāmu 安全にする
 私は 牧人である 保護する

 ša haṭṭu-šu i-ša-ra-at ašāru 正しい
 所の 王笏が その 正義であり、 haṭṭu < *i³pa

録の法の象徴図像「王笏」を参照のこと)、そしてシュメールやアッカドの国民を保護する者として自分を「牧者」に譬えている。

この筆者が第4段落としたところを、ローマ法学者であった原田慶吉氏は以下のように「偉大なる神々が朕を召喚し給い、ために朕こそ完全なる救済を施す牧人にして、その笏は直し。朕の善き陰は朕の町のために拡がり、朕の膝の中にシュメールとアッカドの国の人民を保ちたり。朕の守護女神〔と〕彼の女の兄弟輩(?)と共に、幸福に朕は彼等を背負い、朕が智囊の中に彼等を隠くまいたり。」[loc. cit., p. 341 1.7~1.10]と翻訳し、この同じ箇所を中田一郎氏のほうは「偉大な神々が私をお召しになった。私は良く世話をする羊飼、その杖はまっすぐである。私の心地よい影は私の都市に広がる。私はシュメールとアッカド全土の人々を私の胸に抱いた。(人々は)私の守護女神によって栄えた。私は絶えず彼らを平穩のうちに運び、私の知恵によって彼らを守った。」[loc. cit., p. 72 1.1~1.5 ただしアンダーラインは筆者]のように、わざと「牧者」や「牧人」という訳語を避けて「羊飼」の訳語を使用なさっている。

当時のバビロニア社会において、国王あるいはその社会の指導者として「牧者 *rēum*」という牧畜社会の象徴的人格を譬喩的に用いたことは、後の旧約聖書と新約聖書を通じて現代のキリスト教にまで精神的影響を及ぼしており、主としてプロテスタント教会で使用する「牧師 (*pastor* など)」の呼称も、もとは中国で牧場を司どる役職が、宗教的指導者の一般的な名称として定着することに深く関連している、と思われる。

キリスト教で使われる牧師という呼称は、もともと接手札をもって任職された教師のうち、1カ所または2ヶ所の教会の牧会、伝道の責任者に任じられた者の呼称を意味していたが、イギリスにおいてはそれが英国国教会以外の職を指すようになって、それがアメリカにおいてプロテスタント各派の教職者全体を示すようになった。しかしながら今日アメリカのプロ

テストント各派では Baptists 派、Congregationalists 派、Lutherans 派、Methodists 派、Methodist Episcopalians 派、the Church of Christ 派などでは、この pastor を教会の牧師の名称として使用しているが、Evangelicals 派と the United Brethren 派などは、minister という呼称を、教会の教職者について、使っているようである。

この pastor (牧師) という英語は、その綴りが全く同じ形のラテン語名詞 pāstor (羊飼い、牧者、主任司祭、司牧者) をそっくりそのまま英語に転用したもので、そのラテン語名詞はもともと動詞の pāscō (不定法は pascere、牧草を食わせる、牧草地に連れてゆく) から派生したもので、それは牧草地 pāstūra という土地から派生した単語なのである。

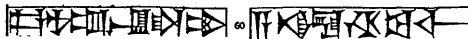
アッカド語の rēum が、キリスト教で後に使われるようになる牧草地と全く同じ意味から派生したものであるかどうかは良くわからないが、この第4段落でこの単語が出てきた後で意味するところは、la-ma-zi (保護) に関係があり、ハンムラビ王が自分の国民を保護して養ってやり (u₂-ki-il)、国王の知恵で国民を外敵から匿ってやる (uš-tap-ši-ir) ことから、この「牧者」という単語を使ったこと、が良くわかるのである。

アッカド語と同じくセム系言語のヘブライ語で、宗教上の教職者を意味する単語である 𐤀𐤏𐤔𐤕 神父, 牧師, 司祭; 僧. כֹּהֵן [קֹהֲנִים] が、後に pāstor (牧師) として使われるようになるが、これはキリスト教側から牧師を意味する教職者として創られたもので、旧約聖書時代には存在しなかった名詞である。

このラテン語を語源とする pāstor という単語は、キリスト教の聖職者の間では、イエスが説法していたアラム語の単語を70人訳聖書でギリシア語に移した時に、ヘブライ語の「飼う (ラーア)」という動詞から派生したローエ (飼育者?) という単語をギリシア語のポイメーンという単語に置き換え、それをラテン語の pāstor とした、というのが通説となってい

る。確かに古代ギリシア語の名詞として、アテナイ北西地域にいたテーベを首都とする都市国家の住人ポイオーティア人が、牛などの家畜類を飼うことをその本業としていたことから *βοιωτία* という呼称でギリシアにおける「牧者」が決められていたという事実はあるものの、これがアッカド語の *rēum* から伝わったと考えることは難しい。実際に古代ヘブライ語で、רָעָה (ラーヤ) という動詞から派生したところのローエ רֹעֶה で、*shepherd*, רֹעִי *shepherdess*, という職種は、現在のイスラエルにおいても名詞として「羊飼いの仕事」רֹעִיָּה として存在し続けるが、都市国家時代の古代ギリシア語には存在せず、70人訳聖書の時代に使用されたヘレニズム時代のコイネー（新約聖書のギリシア語）で人為的に創られたボイメーンがアッカド語の *rēum* をそのままの意味として継承していることは考えにくいのである。

後文第5段落の楔形文字原文



dan-nu-um en-sa-am a-na la ha-ba-lim

hablu 略奪する

強者は 弱者を ため せず 抑圧



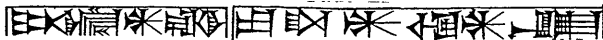
nu-sig₂ nu-mu-su su-te-su-ri-im

nu-sig₂ > ekū

nu-mu-su > almattu

孤児 や 寡婦が 正義とされる

ašāru 正しい



i-na ka-dingir-ra^{ki} alim sa anu u₃ en-lil₂

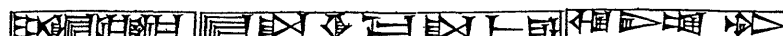
で バビロン 町 所の アヌ や 神エンリルが



ri-si su u₂-ul-lu-u₂

elū 上がる、築ける



城楼を その 高くした


i-na esagila bitim ša kima ša-me-e u₃ ir-ši-tim


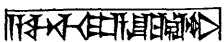

で エサギラ 神殿 所の のように 天 や 地 esagila < e₂-sag-il₂


  isdu < suhe
išda su ki-na di-in ma-tim a-na di-a-nim

基礎が その 確固とした 判決を 国の ために 決定する

 
pu-ru-zi-e ma-tim a-na pa-ra-si-im parāsu 調査する

裁決を 国の ため 調べて

  
ha-ab-lim su-te-su-ri-im a-wa-ti ia su-ku-ra-tim i-na na-ru ia aš-ṭur ma
不正を 正しくする 言葉を 私の 重い に 石碑 私の 書いて、


i-na ma-har šalmi ia šar mi-ša-ri-im u₂-ki-in šalmu < alan
に 前 像の 私の 王 正義の 据えた sarru < lu-gal

後文第5段落の試訳

強者が弱い者をしいたげたりしないようにするために、身寄りの無い孤児となった者や未亡人となった者に正義を実現してやるために、アヌ神やエンリル神が、その城楼を高くした（都市である）バビロン市では、強者が弱者を抑圧せず、孤児や寡婦が正義を回復させられるように、そして天地のように基礎が確固としたところのエサギラ神殿では、国家の判決を決定するために、また国家の裁決を調べて不正を正すために、余の重大な言葉を余の石碑に書き記して、（それらの法文を）正義の国王としての我が像の前に（このように）確固として据えたのである。

後文第5段落の解釈

古代バビロニアで最高裁判所として機能していた「エサギラ神殿」の機能とその状況を述べたのがこの第5段落である、と思われる。

その前に、この条文の冒頭で修飾句として使用される *ri-ši šu u₂-ul-lu-u₂* (その城楼を高くした) が、象徴的な意味で「バビロンの都市の頂を高くした」という風に原田慶吉氏の解釈で、「その地位を上げた」と翻訳されていたが、そう解釈すべきかどうか疑問の残るところである。試訳では飯島氏同様、「実際の城楼を高くした」と普通の記述で訳出しておいた。この段落の最終行の解釈について“*i-na ma-har*”という動詞の前置語をどう理解するかによって、今日2つの異った解釈が対立しているのである。楔形文字の逐語訳において飯島紀氏は、従来の「前に」という解釈をとっているが、シカゴ大学の東洋学研究所で発行している『アッシリア学辞典』では、この“*i-na ma-har*”を「～の下に」と解し、その後続く“*š almi-ia*”をこの石碑上部に浮き彫りにされたハンムラピ王の像と解釈しているからである。(the University of Chicago 編 “The Assyrian Dictionary of the Oriental Institute” p.3646)、このアッシリア学辞典では、*placed them under* の後にバーレン丸括弧つきで (lit. before) とあるから、文字通りには「前に……」だけれども、このアッカド語はこのような文章において「～の下に」と解釈できる、と主張していることに他ならない。今日の法律文に使われる「法の前の平等」と「法の下の平等」に近い用法である。

先に具体的な「城楼」とするか、象徴的な「その地位を上げた」と解釈するかで問題にした原田慶吉氏の訳を見てみると、原田氏は「強者が弱者を虐げざらんがため、孤児寡婦に正を得せしんがため、アヌとエルリルとがその(バビロン)頂を聳えしめたる市バビロンにおいて、天と地のごとくその基礎確固たる神殿エーサギラの中にて、国(即バビロン)の法を法せん(立てん)がため、国(即バビロン)の裁決を裁決せん(下さん)がため、虐げられたる者に正を得せしめんがため、朕の貴重なる言をば、朕の碑の中に記して、正義の神〔としての〕朕の前において、確固と据えた

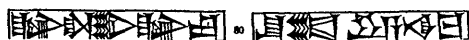
り。〕〔loc. cit., p. 341 l. 10~l. 13〕と記述している。また中田一郎氏はかなり口語的に「強者が弱者を損うことがないために、身寄りのない女兒や寡婦に正義を回復するために、アヌムとエンリルがその頂を高くした都市バビロンで、その土台が天地のごとく揺ぐことのない神殿エサギラで、国（民）の（ための）判決を与え、国（民）の（ための）決定を下すために、虐げられた者に正義を回復するために、私は私の貴重な言葉を私の碑に書き記し、（それらの言葉を）正しい王である私のレリーフの下に（直訳：前に）置いた」〔loc. cit., p. 72 l. 7~l. 13〕という「前に」のほうを直訳した形でバーレン（括弧）に入れる翻訳文を掲載しておられる。

当時のエサギラ神殿が、完全に復興できない以上、このハンムラピ法典石碑の前に「ハンムラピ王の石像」のような彫刻が本当にあったかどうかわからないので、このシカゴ大学の辞典ように解釈すれば、この石碑自体の解釈にも役立つと考えて良い。すなわち同じハンムラピ法典石柱中の内容を説明しているものと解しているのである。

ところがこの後に記されている「私の像……」という点から考察すると、このハンムラピ王の石像は、法典石碑の上方に約60cm 四方の幅を削り込んだ上に浮き彫り（レリーフ）の形で表わされているが、太陽神であるとともに司法神である座った形のシャマシュ神に対して、立ったままの姿で描かれているわけで、これらを勝手に「我が像」と称するには、いささか問題があるのではないか、と思われる。この*ṣalmi* という単語は、次の第7段落の5行目にも再び登場する。

それ故に、本書の試訳では従来からおこなわれてきたように、このハンムラピ法典石柱の前にもうひとつハンムラピ王の彫刻があって、エサギラ神殿においてハンムラピ王もしくはその命を受けた裁判官が、このエサギラ神殿内の聖なる空間の中で裁判をおこなっていた、と筆者は解釈しておくことにする。

後文第 6 段落の楔形文字原文



sarrum sa in sar-alim su-tu-ru a-na-ku

王である 所の の中に 町の王 卓越した 私は

a-wa-tu u₂-a na-aš-ga

言葉は 私の 貴重である

li-u₂-ti sa-ni-nam u₂-ul i-na(=sa)

išū ある

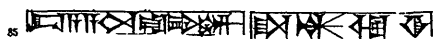
私の力は 対抗する 決して ない

na は sa の誤り

i-na q_{i2}-bi₂-it i¹⁴ samaš

samaš < utu

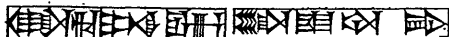
で 命令 神シャマシュの

da-a-a-nim ra-bi-im sa an u₃ ki

an > samū

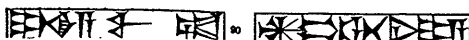
裁判官 偉大なる の 天 と 地

ki > iršitu



mi-sa-ri i-na mātim li-iš-te-bi

私の正義が 中に 国 輝くように、(そして) āpū 輝く

i-na a-wa-at i¹⁴ mar-duk be-li₂ ia

awat = amātu

によって 言葉 神マルドゥクの 主 わが

u-zu-ra-tu u₂-a mu-sa-zi-qam₂ a ir-si-a

nazāqu 切り取る、削除する

像が 私の 削り取りを ないように、 受け

後文第 6 段落の試訳

余は、諸都市の王の中でも(特に)卓越した(大)王である。(それゆえに)余の言葉は貴重なものである(こと認識せよ)。(この世界で)余の力に決して対抗する者などはいはしない。

天地の偉大なる裁判官シャマシュ神の命令で、余の正義が国中で輝く(明らかになる)ように……そして我が主、マルドゥク神の言葉によつ

て、我が像が削り取られるような措置を受けることのないように……。

後文第6段落の解釈

この段落において、ハンムラピ王は自分の権力が絶対的であることを強調するとともに、その権力が太陽神であるとともに司法神でもあるシャマシュ神から授かり、このハンムラピ法典上部の浮き彫りと前文の第1段落で詳述されているエア神の長子でバビロニア王国の守護神でもあるマルドゥク神の加護によって（前文参照）、この石柱法文の楔形文字が決して削り取られず、上部の浮き彫りもしくはハンムラピ王の彫像が削り取られることのないことを祈願している文章がこの箇所であり、この段落全体の解釈と考えられるからである。

このように筆者が第6段落として区切ったところを、原田慶吉氏は「朕は諸王中の覇者たる王なり、朕の言は選りすぐりたるもの、朕の手腕は競い合うもの決してなし。天と地の偉大なる裁判官シャマシュの命令もて、朕の正義が国（即バビロン）の中にて熾然たれかし。朕の主マルドゥクの言もて、朕の記載が遠ざくる者を得ざれかし。」〔loc. cit., p. 341 l. 13 ~ l. 15〕と翻訳しておられる。これに対して、中田一郎氏のほうは「私は、王たちのなかでもっとも優れた王、その言葉は精練されている。私の能力に比肩しうる者はいない。天地の偉大な裁判官シャマシュの命令によって、私の正義が国土に明らかになるように。私の主マルドゥクの言葉によって私のレリーフを削り取る者がないように。」〔loc. cit., p. 72 l. 14 ~ l. 18〕という訳文を記述しておられる。

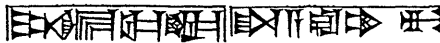
この第6段落の楔形文字を厳格に読めば、削り取られないように祈願しているのは、ハンムラピ王の彫像だけで、石柱の条文にまでは及んでいなかったものと考えられる。そのせいかわからないが石柱上方の像は削り取られず、紀元前12世紀の初頭に、エラムの国王シュットルク・ナフ

ンテに敗れたバビロニアから、この石柱やカッシートの王メリシフが記した『メリシフの^{フドウル}境界石』などが、当時のエラムの首都スーサに勝利品として持ち帰られ、ハンムラピ法典の正面下段の約7段分のほうが削り取られた形で、1901年にフランスの考古学者達の手で発掘されたのである。

この段落の中程で「司法神でもあるシャマシュ神の命令がハンムラピ王の判決となる」旨の記述があるが、前の第5段落から以下に続く第7と第8段落で記述されている内容はまさに古代法の形成と適用の本質を述べたもので、この部分に関してはハンムラピ法典石柱以外の粘土板資料等によって若干異った楔形文字の記述が散見されているのである。

その一つとして後文第1段落の解釈でマイスネルが掲げたテキストでは「裁判をおこなう判事、その判決を下す最終決定者である太陽神シャマシュとアダド神の命令に関して余の判決なるものが……」という粘土板もあるし、同様にヴァイトネル Weidner の資料“Archiv für Orientforschung”としては「判決をくだす裁判官としてのシャマシュ神の命令に依りて……」〔ibid.,〕という異った文章の楔形文字粘土板などもいくつか存在しているからである。

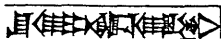
後文第7段落の楔形文字原文



i-na esagila ša a-ra-am-mu

rāmu 愛する


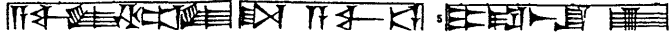
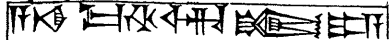


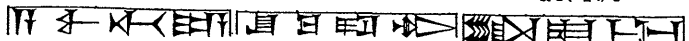
で エサギラ 所の 愛する



Su-mi i-na da-mi-iq-tim

Su-mi = Sum-i

私の名を に 好意的

Col. XLII		
	/a-na da-ar li-iz-za-ki-ir	zakāru 呼ぶ、宣言する
	永遠に 呼ぶように、	
		
	a-wi-lum ha-ab-lum ša a-wa-tam i-ra-as-su-u ₂	
	人は 不正の 所の 言葉（訴訟）を受けた rašū 受ける	
		hablu 不正の
	a-na ma-ha-ar šalmi ia	
	に の前 像 我が	
		
	šar mi-ša-ri-im li-il-li-ik ma	alāku 行く
	王 正義の 行くように、そして	
		
	na-ru-i ša-at-ra-am li-is-ta-aš ₂ -si ma	
	我が碑文を 書かれた 読み上げるように、 šasū 読む、告げる	
		
	a-wa-ti ia su-ku-ra-tim li-is-me ma	kalāmu 知らせる
	言葉を 我が 貴重な 聞くように、 šemū 聞く	

後文第7段落の試訳

愛するエサギラでは我が名を好意をもって（良き意味をもって）永遠に朗誦される（呼ぶ）ように……（自分のなした行為によって）訴訟を受けた不正な人々は、正義の（国）王（であるところの）我が像の前に、来るように。（そして、そこで）ここに記述されたところの我が碑文を（法規と判例が記載されたところを）読み上げるように。そして、余の優れた貴重な言葉（条文）をよく聞きわかるように（……）

後文第7段落の解釈

（最高）裁判所としてのエサギラ神殿の役割りと訴訟手続きの方法について述べた文章と思われる。原田慶吉氏は、このエサギラ神殿をエーサギ

ラと長音化して「朕が愛するエーサギラにおいて、朕の名が良く永劫に互りて名指さるれかし。訴訟事件を得たる虐たげられたる者は、正義の王〔としての〕朕の像の前に赴きて、記されたる朕の碑〔文〕を己に朗読せしめ……」〔loc. cit., p. 341 l. 15~l. 17〕とそのまま文章が切れない形で（次の第8段落のところまで）続けて翻訳なさっている。

当時の神々を祭った神殿には、その神殿毎にさまざまな機能をもった役割りが規定されていた。この前文と後文にかなりの数多く記述されているこの『マルドゥク神殿』では、その祭司達が、毎年、新年祭の執行をおこなうとともにバビロニアでの「王位叙任権」を有していたから、国王になる者は新年祭に出席して祭司からバビロニアの王位を授けられていたのである。あたかも中世における、神聖ローマ帝国に対するヴァティカンのような役割り、をすではたしていたと言える。

エサギラ神殿のほうは、司法神であるとともに太陽神でもあるシャマシュ神が中心に祭られ、それとともにハンムラピ王の彫像（あるいはこの石柱の上部にレリーフとなった像自身のことかもしれない）が置かれ、被告として訴追された者がエサギラ神殿にこのハンムラピ王の設立した法典の前に来て、多分そこに記述された自分の犯した罪状に関係する条文を裁判官であるエサギラ神殿の祭司等から読んで聞かされ、それ相応の判決を受けたものと思われる。

a-wa-tam という単語は、次の第8段落において「訴訟」になることからわかるように、ここでは古代ローマにおける法律訴訟手続き *legis actis* を開始する中で使われているもの、と解釈する必要があると考えられる。なおこの段落において、具体的に祭司がそのままの形で身分としても裁判官 *iudex* となっていたかどうかは、わからない。

この部分を中田一郎氏は「私の愛するエサギラで、私の名前が良い意味で永遠に唱えられるように。訴訟をおこそうとしている被害者は正しい王

である私のレリーフの前に来るように。そして（判決が）書かれた碑を読んでもらい、私の優れた言葉を聞くように。……」[loc. cit., p. 72 l. 18 ~ l. 22] とアッカド語の文章が切れているように翻訳しておられる。そしてこの段落の4行目にある冒頭の a-wi-lum ha-ab-lum を、アウィルム階層の被害者すなわち原告だけのように解釈しておられるが、これは原田氏など従来の解釈とは全く反対で、次の行にある ṣalmi ia も「私のレリーフと石柱上の像」とだけ解釈しているようであるが、ハンムラピ法典を正確に解釈するのに大きな問題があると言わざるをえないだろう。

また、実際に訴訟を受けた被告が、この第7段落に記述されているように、このハンムラピ法典の石柱の前かあるいはハンムラピ王の別に設置された彫像の前に来て、このような訴訟手続きを実際に受けたかどうかには就ては、同じく後文の第5段落の解釈とも重なるのでその当時の正確な様子は殆どわかっていない。なおこの段落の2行目で、フランスの考古学者が発掘したハンムラピ法典石柱の裏面に刻された楔形文字の第24段（コラム、欄）は終了し、第3行目からは上から数えて第25段（コラム、欄）として石柱の右側（側面）を上下に左側へ読み進めてゆくことになる。

後文第8段落の楔形文字原文

15 

na-ru-i a-wa-tam li-kal-lim šu

我が碑文が 訴訟に関し 示し、彼に

25 

a-na a-wa-at ¹¹⁰marduk be-li₂ šu

に 言葉 神マルドゥクの 主 彼の



uš-ta-ak-ti-it ma

katātu 尊敬を与える

尊敬を与えた



ir-ni-ti i¹ marduk e-li-is

勝利を 神マルドゥクに 上(北)



u₃ Sa-ap-li-is ik-su-ud

kasādu 送する、得る

や 下(南)で 得て



li-ib-bi i¹ marduk be-li₂ šu u₂-ti-ib

心を 神マルドゥクの 主 彼の 満足させた



di-in šu li-mu-ur

amāru 検討する、分かる

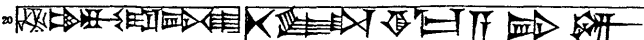
判決を 彼の 検討して



li-ib-ba šu li-na-ab-bi-is ma

napāšu 気楽にする

心を 彼の 気楽にするように、(そして言うだろう)



ha-am-mu-ra-bi-mi be-lum sa ki-ma a-bi-im

「ハンムラビは 主(である)所の ようで 父の



wa-li-di-im a-na ni-ši i-ba-aš-su-u₂

生みの には 人民 ある alādu 子を儲ける



u₃ šī-ra-am ta-ba-am a-na ni-ši a-na da-ar

福祉を 良い に 人民 に 永遠



i-ši-im u₃ ma-tam uš-te-se-ir

ašāru 正しく支配する

定めて 国を 支配した」

šēru 福祉、肉

後文第8段落の試訳

(以上のように) 余の貴重な言葉(法文)を良く聞いて、我が碑文が

（その記された）訴訟に関して（それがどのような経過を辿ったかを）その者に示し、その者が（自分に下された）判決を検討して、（自分の）心を気楽にするように。（そして言う）「人民には、生みの父のようである主（であるところの）、ハンムラビ国王はその（人民の）主で（も）あり、マルドック神の言葉に尊敬を払った（のである）。（そのことから）上（北）や下（南）で（すなわち全国で）マルドック神のために勝利を得て、彼の主、マルドック神の心を満足させたのである。そして人民に永遠に良い福祉を定めて、この国を支配したのである。」と（宣言）するように。

後文第8段落の解釈

この段落では、エサギラ神殿の裁判所に出頭してきた被告が、このハンムラビ法典石柱に書かれた法規や判決文と裁判官の下す判例をいったいどのように受け入れるかが冒頭に記されている。「（自分に下された）判決（がどのようなものであるかをこの石柱の法文を読むなどして）検討して、（自分の）心を気楽にするように」ということは、その判決に納得して処罰に相当する刑を受け入れよ、という意味であると思われる。

この筆者が後文第8段落としたところを原田慶吉氏は「……もって朕の貴重なる言を傾聴して（せば）、朕の碑〔文〕が訴訟事件〔の見透〕を彼に見せしめ、〔彼〕彼の法を見出して、彼の心をして安堵せしめ、もって『産みの父のごとくに人民に対してある主ハンムラビこそは、彼の主マルドックの言に対して拝跪して、マルドックの勝利を上と下に獲得し、彼の主マルドックの心を満足せしめ、もって良好ならしめられたる肉（福祉）を人民のために永劫にわたりて定立し、もって国（即バビロン）に正を得せしめたり』と声高らかに（？）言いて……」〔loc. cit., p. 341 l. 17～p. 342 l. 3〕と翻訳しておられる。これに対し、中田一郎氏のほうはこの部

分の第1行目にあたる a-wa-tam li-kal-lim のところを「ケースを示して……」という特殊な用語を用いて訳し、以下のごとく「……私の優れた言葉を聞くように。私の碑によって（彼の）ケースを示してもらい、彼の（ケースの）判決を見るように、（そして）彼の〔心〕を安心〔させるように〕。そして、『ハンムラビ、人々に対して実の父親のごとくである主は、彼の主であるマルドゥクの言葉に懸命に心を配り、北や南でマルドゥクのために勝利をあげ、マルドゥクの心を喜ばせ、人々に対しては（色つやの）良い肌を永遠にわたって定め、国に正義を回復した』と、彼が言うように。……」[loc. cit., p. 72 l. 21～p. 73 l. 5] という文章にしておられる。しかしながら、中田氏がこのケースという片仮名をどのように解釈して使用しているか良く理解できないが、おそらく英米法でいうところのケース・メソッド（事例研究法 Case method）を意識して翻訳なさったのだと思われるが、正確な解釈とは、ほど遠いように感じられる。

楔形文字の5行目から6行目「上や下で……」とあるのは、このようにバビロニアの位置するところを中心にティグリス河とユーフラテス河の上流（北）と下流（南）の地域すなわち当時のメソポタミア地域の全世界を意味していたものと考えられる。

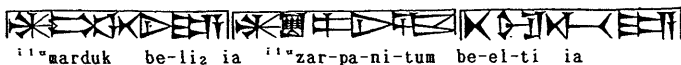
最初ハンムラビ王が受け継いだ古代のバビロニアという王朝は、その始祖にあたるスムアブム（B.C. 1894～1881）がセム系のアムル人として王朝を建てた頃と同じく、ハンムラビ王が代表者となるまでに、あまり領土を拡大できない状況下でいた。そしてハンムラビ王は即位して30年近く近隣諸国と同盟を結んだり、言わゆる合従連衡政策によって国力を安定させた後で、エラムやエシュヌナの国々をそれぞれ征圧し、そしてラルサを滅亡させるに至った。当時北方（上）地域にあたるアッシリア南方にはラルサという強国があったが、東西にも上に掲げたようにエラムとエシュヌナ（東方）、また西方にはマリ王国が位置していた。それ故に、ハンム

ラピ王は上と下という河川の下で北方と南方だけを指し示しているように見受けられるが、この上と下でその領土の拡大という観点からは東方と西方をも含めて全世界と解釈していると見たほうが良いだろう。これらの地方を平定してバビロニアの守護神マルドックを満足させたということは、バビロニアの国土を広く豊かにした、ということに他ならない。

後文第9段落の楔形文字原文

 da-ni-tam li-iq-bi ma i-na ma-har a2 𒀭 da の誤り

法典を語るように、 で 前

 𒀭¹¹ marduk be-li2 ia 𒀭¹¹ zar-pa-ni-tum be-el-ti ia

神マルドゥクと主 我が 神ザルパニットの 女主人 我が

 i-na li-ib-bi su ga-am-ri-im li-ik-ru-ba-am

で 心 その 全き 祈るように、

 se-du-um la-ma-zum ilāni ilāni < dingir-dingir
karābu 祈る、敬慕する

守護神 守護霊や 神々は

 e-ri-bu-ut esagila libittu esagila erebu 入る

入った エサギラや 煉瓦壁に エサギラの libittu < sig4

 i-gi-ir-ri-e ūmi-sa-am i-na ma-har 𒀭¹¹ marduk

計画に 毎日の で の前 神マルドゥク

 be-li2 ia 𒀭¹¹ zar-pa-ni-tum be-el-ti ia li-dam-mi-ku

主 我が 神ザルパニット 女王 我が 気に入るように、 damāqu 気に入る

後文第9段落の試訳

（この）法典（の文章）を語り、我が主人マルドゥク神と我が女主人ザルパニトゥム女神の前で、全心（全霊）で祈るように。エサギラ神殿やエサギラの煉瓦壁に祭られた守護神、守護霊（または守護女神、直前の守護神と一対になったもの）や神々は、我が主マルドゥク神や我が女主人ザルパニトゥム女神の前で、毎日の計画が気に入るように（祈らねばならない）。

後文第9段落の解釈

この後文第9段落の2行目に一対となって、マルドゥク神とともに登場するザルパニトゥムという女神は、マルドゥク神の妃であり、日本神話だけではなく世界中の「創世紀神話」にも共通する男女一体の二元論的神話のルーツをなす、と考えられるものである。

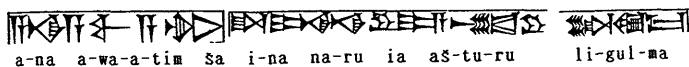
その魁となるバビロニアの創世神話では、前文にも登場したエア神の長子がマルドゥクとなっているが、これはもともとシュメール時代に信仰されていた「天神アンの息」を意味し、水の神でもあったわけだが、その両親ティアマト女神とアプス男神という海洋の交わりによってエア神が生まれ、そのエア神が父親であるアプス神を殺し、その死体の上に居宅を建て、そこでマルドゥク神が生まれたとされている。インド・ヨーロッパの比較神話で古代ギリシアのゼウス神（後にローマの神々の父ユピテル神に発展する）や古代インドのバラモン教神話（リグ・ヴェーダ讃歌に登場する）のインドラ神などが、このセム系の言語で展開されたバビロニア神話と深い関連性をもってくることになる。

バビロニア神話では、母親のティアマト女神がアプス神の仇を討とうとするが、マルドゥク神によって反対に返り討ちにあい、ついにバビロニアの守護神となるマルドゥク神はその父親のエア神から援助を受けて、祖母

ティアマトの死体を二分し、この作業によって「天と地」が創られた、という筋書になっている。〔前文第1段落楔形文字の右にあるマルドゥク神の像参照〕

マルドゥク神は、その妻ザルパニトゥム神（これも語頭の読み方によって、サルパーニートゥムあるいはツアルパニトゥムと書かれることもある）とともに天の星座を完成し、太陽神シャマシュが運行し通過する門であるバビロニアという国家をつくり、月の神シンが夜照り輝くようにしたので、ティアマトとアプスから生れ出た神々はマルドゥク神の業績を称賛して、それをバビロニアの守護神とした、と伝えられている。それ故に、エサギラ神殿にはその煉瓦壁などにこれらの神々も描かれ、バビロニアにおいてこの場所が聖なる神殿であるとともに神聖な「(最高) 裁判所」となったのである。

この筆者が第9段落にした部分の邦訳をみると、先ず原田慶吉氏は「……朕の主マルドゥク、朕の女主サルパーニートゥム（Sarpanitum（マルドゥクの妃）の前において、完き彼の心もて（彼の心よりして）、朕のために祈れよかし。守護神、守護女神、エーサギラ〔神殿〕エーサギラの煉瓦壁に立ち入り給う神々は、日毎に朕の主マルドゥク、朕の女主サルパーニートゥムの前において、〔彼の〕考を麗わしくせさせ（彼の考を容れ）給え。」〔loc. cit., p. 342 l. 3～l. 6〕と文語調の文章を記し、これに対して中田一郎氏もこの部分を「……そして、私の主人マルドゥクと私の女主人ツアルパニトゥムの前で私のために彼が祝福の祈りを捧げるように。シェードゥとラマッス（男女の守護神）、エサギラに出入りする神々、エサギラの煉瓦が、私の主人マルドゥクと私の女主人ツアルパニトゥムの前で毎日（私の）評判を良くしてくれるように。」〔loc. cit., p. 73 l. 5～l. 10〕と丁度この第9段落の真中に出てくる筆者が「守護神、守護霊」としたところをアッカド語をそのまま片仮名としたシェードゥ（še-du-



a-na a-wa-a-tim Sa i-na na-ru ia aš-tu-ru li-gul-ma
に 言葉 所の に 碑文 私の 書かれた 注意するように、

後文第10段落の試訳

将来においても後世の何時^{いつ}の世においても、国に居る（国を治める）国王が、我が碑文に書かれた正義の言葉（立法した法規と判例）をよく見守るように……余が明言した国の判決や余が伝えた国家の決定を（絶対に）変えたりしないように……我が像を削り取らないように。もしその人が知恵を持つなら、そしてその国に正義の支配を試みるのならば、我が碑文に書かれた言葉に（常に）注意しておくように……

後文第10段落の解釈

古代社会において「法」と「正義」の関係は、どの社会においても密接な関係に立脚している。古代ローマにあっては、jus（法）という単語からその語末に-ti-という接尾語句が（二重に）加わることによって justitia（正義）という言葉が、後の西欧諸語の中で宗教的な側面も加わって形成され、英・仏語の justice となるのであるが、これは jus から派生した形容詞 justus から変化したものと思われるものの、それらの根源には「神あるいはそこから権力を得た支配者の命令する、あるいは決定・裁可する」という動詞 jubeō (jubere)と深い関連を有している。そして jus の属格形 juris と「熟慮する、判断する」結果を意味する prūdentia が結合して、ひとつの合成語 jūris-prūdentia という「法理学」の単語が出来上がり、その同じ綴り jurisprudence が、フランス語では「判例、法解釈」となり、英語では「法律学、法体系学」となるという風に、第一番目の意味 denotation が異ってくるのである。

古代楔形文字でシュメール語からアッカド語に変化した際に、この「法と正義」の概念がどのような変遷と意味の違いを生じたか、このハンムラピ法典だけでは完全に解明することはできないが、この後文の第10段落の第3行目に出てくる a-wa-a-at mi-ša-r-im 直訳では「正義の言葉」そしてそれはまさしくこのハンムラピ法典の条文として記述された282ヶ条の条文（判例）すなわち「シャマシュ神の判決」をも意味し、それに続く di-in ma-tim（国の判決）と、pu-ru-zi-e mātim（国家の決定）によって決定せられた、古代の判決として出された「法」そして立法の何たるかを確実な意味として明らかにしている。

この段落にあたる内容を、ローマ法学者の原田慶吉氏は「未来にわたり、何時までたりとも、国（即バビロン）の中に在らしめらるる王は、朕の碑の中に朕が記したる正義の言を護り、朕が法せし（立てし）国（即バビロン）の法、朕が裁決せし国（即バビロン）の裁決を決して変更し、朕の記載を決して遠ざくること勿れかし。もしその者聡明ありて、彼の国に正を得せしむることを得るならば、朕の碑の中に朕が記したる言に対し、尊敬を払えよかし。」[loc. cit., p. 342 l. 6~l. 9] と文語調の翻訳を記述しておられる。

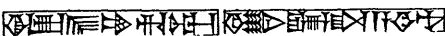
現代のインド・ヨーロッパ諸語では、この段落から始まる文章は、次の第11と第12段落においておそらく接続法で書き記わされたであろうと思われるが、この段落の最後で「私の碑文 na-ru ia（すなわちハンムラピ法典）」がバビロニアの社会に「正義の支配 šu-te-šu-ra-am」を実現させたもの、と確信した文章となっているのである。


この後文において記述された内容を、法律学的な解釈を全く考慮しないで翻訳される歴史あるいは宗教学の研究者は、「法と正義」という関連をまた「国家と法」の成立という意識を全く抜かして解釈しているのではないかと思われる。原田氏の半世紀も後に再び翻訳を試みた中田一郎氏もこ

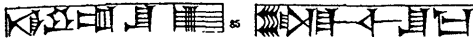
の箇所については「未来永劫にわたって、この国に現れる王が私の碑に私が書き記した正しい言葉を守るように。彼は、私が与えた国（民）の（ための）判決、私が下した国（民）の（ための）決定を変更することがないように。彼は私のレリーフを削り取ることがないように。もしその人（王）に思慮があり、自分の国を正しく導くことができるのなら、私が私の碑に書き記した言葉に注意を払うように。どうかこの碑が彼に（良き）慣行と習慣、……」[loc. cit., p. 73 l. 11~p. 74 l. 1] と、この第10段落はアッカド語の文章が（中田一郎氏の文章としては）そのまま、次の（拙稿では）第11段落に続く形で記載されているのである。

アッシリア学、特にその中でアッカド語やバビロニア社会の狭い研究に従事している学者のなかには、コーシャカー (P. Koschaker) 氏を始めとしてアイラーズ (E. Eilers) 氏そしてハンズベルガー (B. Handsberger) 氏と続く一連の学者たちによって、このハンムラピ法典が「法律としての実効性を疑わせるもの」として価値のないような評価がなされているが、以上論述してきた法史学的見解から、この後文第10段落を解釈すれば、古代法の形成においてハンムラピ法典の石柱が如何なる意義を有しているか、容易に理解できるものと信ずる次第である。

後文第11段落の楔形文字原文


 ki-ib-sa-am ri-dam di-in mātīm ša a-di-nu
 方法や 政治に 判決や 国の 所の（私が）明言した


 pu-ru-zi-e mātīm ša ap-ru-su
 決定を 国の 所の（私が）伝えた



na-ru-um šu-u₂ li-kal-lim šu ma

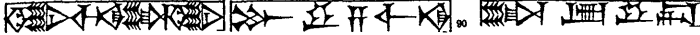
kalāmu 示す、解かす

碑文が この 示して、彼に



ša-al-ma-at ga-ga-di šu li-iš-te-se-ir

黒い 頭（人民）を 彼の 正しく支配するように、



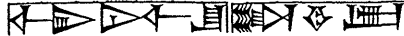
di-in ši-na li-di-in pu-ru-za ši-na li-ip-ru-uš

判決を 彼らの 下し、 裁決を 彼らの 決定するように、



i-na ma-ti šu ra-ga-am u₃ ši-nam li-zu-uh₂ nasāhu 根こぎにする

から 国 彼の 不正なものと 悪人を 根絶するように、



ši-ir ni-si šu li-ṭi-ib

福祉を 人民の 彼の 良くするように、



ha-am-mu-ra-bi šar mi-ša-ri-im

ハンムラビは 王 正義の



ša i¹¹ šamaš ki-na-tim iš-ru-ku šum a-na-ku

所の 神シャマシュが 正義を 贈った（彼に） 私（である）

後文第11段落の試訳

（統治）方法や政治について、余が、明示した国の判決や（シャマシュ神の）伝えた国家の決定をこの碑文がその者（訴訟を受けた者）に示して、（決して変更することがないように……）、その黒い頭（国民）を正しく支配するように……そしてその者どもに判決を下し、その者どもに裁決を下すように……

その者の国から不正と悪人を根絶するように……その人民の福祉を良くするように……我こそシャマシュ神が正義（「法の支配」の象徴）を贈った「正義の王」ハンムラビ（法の支配者）である。

後文第11段落の解釈

前の第10段落からアッカド語の文章が続いていると思われるが、古代法の形成に関する内容もそのまま続くと同時に、ハンムラピ王のバビロニア支配に対する個人的願望が、そのまま継続して記されている。

古代社会にあっても、その支配者が自分の支配している領域の人民の生活を豊かにしなければならないのは当然の（法的な）義務であり、その社会において犯罪となる行為を厳しく処罰することは、当然の如くその行政上の処置として、おこなわれていかなければならない。


第10段落にもある国の「判決 di-in」と「決定 pu-ru- (zi-e)」とは一体どのように違うかも同様に考慮されねばならないが、アッカド語の ki-na-tim が、一般的には「正義」ではあるもののシャマシュ神（太陽神、司法神）の委託をこのハンムラピ法典石柱前部分の上方にあるように、王笏と領域を区分する「輪」という象徴図像によって受け、それによってハンムラピ王が「正義の王」として、法による支配をおこなえるようになった、と解釈すべきである。

ローマ法学者の原田慶吉氏は、ここの部分を「活動〔の仕方〕、政治〔の方法〕、朕が法せし（立てし）国（即バビロン）の法、朕が裁決せし国（即バビロン）の裁決をば、この碑〔文〕が彼に見せしめて、彼の黒頭共（人間）に正を得せしめ、彼等の法を法し（立て）、彼の裁決を裁決し（下し）、彼の国より悪者と奸者を根刮ぎにし、彼の臣民の肉を良好ならしめよ（福祉をもたせよ）かし。朕は正義の王ハンムラピにして、シャマシュが法規を贈り給いし者なり。」〔loc. cit., p. 342 1.9~1.12〕と翻訳しているが、a-di-nu を「法せし」という動詞に訳して重ねてバビロンの法と記載する理由がはっきりせず、di-in はやはり「立法する」と言うよりも「判決」を出すと考えたほうが良いのではなからうか。

ところで歴史学の観点から中田一郎氏は、その著「ハンムラピ『法典』」

の中で「……私が与えた国（民）の（ための）判決、私が下した国（民）の（ための）決定を彼に示してくれるように。そうすれば、彼は、彼の人々（黒頭人）に正義を回復し、彼らの（ための）判決を与え、彼らの（ための）決定を下し、彼の国から悪しき者、邪なる者を取り除き、彼の民の皮膚（の色つや）を良くすることができるだろう。私は、ハンムラビ、正しい王、シャマシュが真実を贈ってくださった王である。……」〔loc. cit., p. 74 l. 1~l. 8〕と翻訳しているが、途中の「彼は……」をおそらく3行目のšu-maを冒頭にもってきたものと思われる。しかし、この彼が一体何を指すのかははっきりせず、また a-di-nu という動詞を「与える」と解し、同様に ap-ru-su を「（決定を）下す」と解することには無理があるのではないかと思われる〔中田一郎氏訳ハンムラビ『法典』リトン社 p. 74参照〕。明治時代に最初に翻訳を手がけた遊佐慶夫氏は、その著『古バビロニア法の研究』（巖松堂書店）において、ハンムラビ法典の後文そのものは翻訳していないが、第6章の訴訟に関する最終部分のところでVII「判決」について言及し、この第11段落の最初に出てくる di-in (dinum)だけの訳語として「判決」を考えていたようであり、原田氏が「法せし国の法」と訳する言葉のほうを判決と考え、その内容を解釈しているように思われる。

後文第12段落の楔形文字原文



a-wa-tu u₂-a na-aš-ga ip-se-tu u₂-a nasqu 責い

言葉は 我が 重要であり 改善に 我が



sa-ni-nam u₂-ul i-sa-a e-la a-na la-ha sanānu 対立する、似ている

対立は 決してない (以下 不明)



zi-im ri-ga a-na im-ki-im

zi-im > tib sāri 信心団体

ri-ga > rīqu 在船修道士



a-na ta-na-da-tim šu-ša-a

ašū 前に行く、発言する

には 暴力 発言する



sum-ma a-wi-lum šu-u₂

もし 人が この



a-na a-wa-ti ia sa i-na na-ru ia aš-tu-ru

に 言葉 我が 所の に 碑文 我が 書かれた



i-gul ma di-ni la u₂-ša-az-zi-iq

qālu 注意を払う

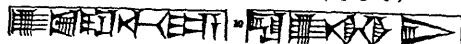
注意して、我が判決を ず 削り取ら



a-wa-ti ia la uš-te-pi-el

言葉を 我が ず 破壊せ (そして)

bēlu 破壊する、正側する



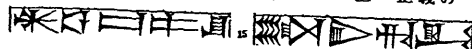
u₂-zu-ra-ti ia la u₂-na-ki-ir

像を 我が ないなら 変え



a-wi-lum šu-u₂ ki-ma ia-ti sar mi-ša-ri-im

人に この ように 私の 王 正義の



i^u samaš haṭṭi šu li-ir-ri-ik

arāku 延長する

神シャマシユが 王笏を 彼の 延ばすように (そして)



ni-ši šu i-na mi-ša-ri-im li-ri

āru 支配する

人民を 彼の で 正義 支配するように、

後文第12段落の試訳

余の言葉は重大（洗練されたもの）であり、余の改善（する法規など）には対立（しようと思う者など）は決していない……〔不明部分〕……いかなる宗教団体の責任者もどのような神々に帰依する聖職者たりとも（この法典に）対立する立場に立つことはできない〔この条項の詳細は不明で、正確に邦訳できない〕（おそらくハンムラビ王の支配下かあるいは同盟関係にある国家の支配者で、ハンムラビ王の統治する地域に何等かの影響を与えている者に関する記述であると思われる）（その）暴力には発言する（私の言葉は愚者にとっては空しく）。もし、この者が、我が碑文に書かれたる言葉に注意して、余の法典に刻まれた法文（判決）を削り取らず、余の言葉を破棄もせず、我が像を変えないとしたならば、この者には正義の王、余のようにシャマシュ神がその者の王笏（治世）を延ばしてくれるように……その者の人民を正義で支配するように……

後文第12段落の解釈

ここのところの楔形文字の文章は、どこで区切るか、また如何ように解釈するか、なかなか困難なところがある。そこで解釈に先立って、邦訳のところに括弧つきで解釈に併行した重要事項を入れておいた。

更に、この第12段落にあたるところの邦訳は、訳者にとってはかなり簡略に記されているようで、例えば、中田一郎氏は有限会社リトンから発行した古代オリエント資料集成Ⅰで「……私の言葉は精練されたもの、私の業績は比類がない。（私の言葉は）愚者にとっては空しいが、知恵ある者にとっては、称賛しないではおれないものである。もしその人（王）が私の碑に私が書き記した私の言葉に注意し、私の判決を削り取ることなく、私の言葉を変更することなく、私のレリーフを取り除いたりしなかったなら、その人は私のように正しい王である。どうかシャマシュが彼の王杖

（治世）を長くし、彼の民を正義のうちに導いてくださるように。」〔loc. cit., p. 74 1.8~1.15〕と翻訳されているが、特に冒頭部分についてはかなり無理な解釈から導き出された翻訳のように思えてならない。

この最後の部分で「王笏 (haṭṭi)」に関する解釈は、本書でハンムラビ法典石柱の上部に浮き彫りされたシャマシュ神とそれからハンムラビ王に手渡そうとしているところを取り扱った冒頭にある「法の象徴図像『王笏』の項を参照されたい。

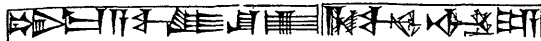
中田一郎氏は、この段落の第3行から第7行の欠損部分についてロス (M.T. Roth) 氏著“Law Collections from Mesopotamia and Asia Minor” SBL Writings from the Ancient World Series, 6, Atlanta, 1995 から引用して、この解釈に書いたような文章を導き出しているが、スーサで発見されたハンムラビ法典石碑の楔形文字原文からは、このような洗練された文章に訳することはどうしても出来ないのである。またこの段落の後半に記されていることは、この法典石碑がエラムの国王シュトルク・ナフンテによってバビロニアから持ち去られ、おそらくシュトルク・ナフンテが正面下部を削り取って自分の戦勝業績を書き込ませようとしたが記入されないまま終って、20世紀の冒頭 (1901~1902) フランスの発掘調査隊によってイランの南西部で発掘されたのであるが、おそらくエラムの国王が自分の業績を書く前にこの法典の後文までを書記官などに訳させて、特にこの第12段落等を気にしてこの楔形文字文典に反するようなことを書き入れることを中止したのではないか、とも解釈できるのである。

原田慶吉氏も昭和42年に発行した『楔形文字法の研究』清水弘文堂で同様の訳文を記載している。その訳文は「朕の言は選りすぐりたるものにして、朕の業績は競い合うもの決してなし、ただ愚者にとりてはそは空しきものなるも、智者にとりては、有名なる程に秀ず。もしその者が、朕の碑の中に朕が記したる朕の言に対し尊敬を払いて、朕の法を遠けず、朕の言

を抑圧せず、朕の記載を変更せざりしときは、その者に、正義の王朕の如く、シャマシュは彼の笏を長からしめ（統治を永続せしめ）、彼の臣民を正しく導き給え。」〔loc. cit., p. 342 l. 12~l. 16〕となっている。この部分の特に王笏に関する解釈は、この箇所だけでは十分に説明できないので、原田氏が、バーレン（マル括弧）で挿入した（統治を永続せしめ）という意味だけでなく、法の象徴図像という形で記述した拙論、本書冒頭に挿入した箇所も是非参考にしていただきたいものである。

なおこの上から3行目の不明となった箇所は、スーサで発掘されたハンムラビ法典の石柱としては、その楔形文字の段（コラム、欄）が上から数えて丁度第25段（コラム、欄）目がその左側（側面にまで入り込んで）に終了するところで、バビロニアから現在のイランに運ぶ途中その箇所が縄か何かで、磨り減って良く読めなくなったのではないかと考えられる。その次の第4行目からは、上から数えて第26段目が次の右側（側面に）から始っているのははっきりと楔形文字を読むことができるのである。

後文第13段落の楔形文字原文



sum-ma a-wi-lum su-u₂ a-wa-ti ia

もし 人が この 言葉を 我が



sa i-na na-ru ia as-tu-ru la i-qu₁₂ ma qālu 注意する

所の に 碑文 書かれた ないなら、 注意し （又）



ir-ri-ti ia i-me-eš ma

呪いを 我が 忘れて、

māšū 忘れる

irritu 呪う

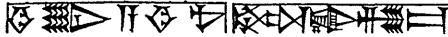
注意 irrisu 憶える < erēšū



ir-ri-it i₃-li₂ la i-dur ma

adāru 恐れる

呪いを 神の ないなら、 恐れ（又）



di-in a-di-nu up-ta-az-zi-is

pašāsu 棄する

判決を 決した 廃止し



a-wa-ti ia us-te-pi-el u₂-zu-ra-ti ia

言葉を 我が 破棄し 像を 我が



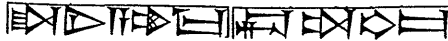
ut-ta-ak-ki-ir su-mi ša-aṭ-ra-am ip-ši-iṭ ma šaṭaru 変え

我が名を 書かれた 消して、



šum-šu is-ta-dar aš-šum ir-ri-tim šī-na-ti pašātu 彼の名を 書くならば（又）のため 呪い これらの

彼の名を 書くならば（又）のため 呪い これらの



ša-ni-a-am ma us-ta-hi-iz

šanū 第二の

他人を 悩む（せいにする）なら、

aḥāzu 悩む

後文第13段落の試訳

もし、その者が、余の碑文に書かれたる言葉に注意（尊敬）を払わないなら、また我が呪詛（呪い）を忘れ（無視して）、神々の呪いを恐れないなら、また下した（与えた）判決を廃し（削り取り）、我が言葉を破棄し（変更して）、我が像を変え、書かれたる我が名を消去して、（その代りに）その者の名を書くのならば、またこれらの呪詛（呪い）のために他人をそのせいにする（上記されたことを教唆してそうさせる）ならば……

後文第13段落の解釈


この直前の第12段落から続いていてあまりにも長くなるので、ここから切ることにしたが、最初に書いたように楔形文字原文で別に段落が分れて


いるわけではない。


前の段落と同様に、先ず中田一郎氏と原田慶吉氏の邦訳をみて、それを検討してみることにしよう。先ずその原田慶吉氏の訳文は「……もしその者が、朕の碑の中に朕が記したる朕の言に尊敬を払わずして、朕の呪詛を軽んじ〔て〕、神々の呪詛を惧れずして、朕が法せし（立てし）法を抹殺し、朕の言を抑圧し、朕の記載を変更し、朕の記されたる名を抹殺して、彼の名を記し、それらの呪詛ゆえに他人を教唆したるときは……」〔loc. cit., p. 342 l. 16～l. 18 最終行まで〕となっている。それに対して中田一郎氏の翻訳は「もしその人（王）が私の碑に私が書き記した私の言葉に注意を払わず、私の呪いを無視し、神々の呪いを恐れず、私の与えた判決を削り取り、私の言葉を変更し、私のレリーフを改変し、書き込まれた私の名前を削り取り、自分自身の名前を書き入れたり、それらの呪いゆえに他の者に（そうすることを）教唆したなら……」〔loc. cit., p. 74 l. 16～l. 20〕という途中の文章で、この箇所にあたるところを記されている。

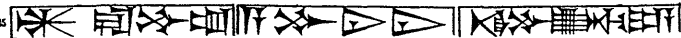
前の第12段落でも記したが、バビロニアに侵攻して勝利したエラムの国王シュトルク・ナフンテが、この法典石碑を自分の国に持ち帰った後、自分の戦勝記念文をこの石碑の表側下面に書き入れようとして削り取ったと思われる時に、当時のアッカド語の楔形文字が完全に理解できる者にこの法文を読ませ、この後文の段落を意識して戦勝記念文などを書き入れるのを止めたのかどうかは、今となっては正確にどのような歴史的な経過を辿ったのかはわからない。しかしながら、この部分を理解していればおそらく自分の戦勝記念文は書き入れることを中止したであろうことは、あらゆる事情を考慮して、十分に理解できるのである。


後文第14段落のく楔形文字原文

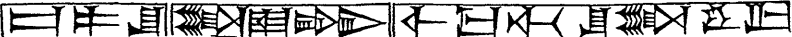

 a-wi-lum su-u₂ lu šarrum lu en en > bēlu
 人が この 王であれ 主であれ


 lu pa-te-si u₃ lu a-wi-lu-tum
 領主であれ 人であれ


 ša su-ma-am na-bi-a-at nabū 名を呼ぶ、制定する
 所の 名を 呼ぶ

⁴⁵

 anum ra-bu-um a-bu i₃-li₂ na-bu-u₂ pali ia
 アヌが 偉大なる 父 神々の 制定した 治世を 我が


 me-lam₂ šar-ru-tim li-te-ir šu
 栄光を 王権の 取り上げるように、彼から

⁵⁰

 haṭṭi šu li-iš-bi-ir ši-ma-ti šu li-ru-ur arāru 呪う
 王笏を 彼の 破壊するように、運命を 彼の 呪うように、 šabāru 毀す

後文第14段落の試訳

その者が、その呼び名は国王であれ、主（支配者）であれ、領主（知事）であれ、あるいは何の人物であったとしても、わが治世を制定した神々の父、偉大なるアヌ（ム）がその者から王権の栄光を取り上げてしまうように。そしてその者の王笏（支配権）を破壊し、その者の運命を呪うように……

後文第14段落の解釈

この段落の途中から、次の第15段落でも解説するようにシュメールとアッカドの諸神に捧げる讃歌と祈りの言葉が多くなり、最後に神への祈りを

もってこのハンムラピ法典石柱の後文は終わっているのである。この楔形文字最初の3行がすべて修飾している天神アヌ（ム）はギリシア神話のウラノスと同様の存在で、文字通りシュメール時代からの「天の神」である。

また、この段落で記された「王笏」についての解説は、ハンムラピ法典石柱表面の上部の浮き彫りに関して論述した「法の象徴国像『王笏』」のところを参照されたい。この筆者が第14段落としたところを、アッカド語の文章としては切れ目のない形で続けておられる中田一郎氏の翻訳としては「……その人は、王であれ、支配者であれ、知事であれ、あるいは何者であれ、偉大なるアヌム、神々の父、私に統治するよう呼び出された方が、彼から王権の（象徴である）メランムを取り外してくれるように、彼の王杖を折り、彼の運命を呪ってくれるように。」[loc. cit., p. 74 l. 20～l. 24] となっており、それよりもかなり以前に翻訳なさった原田慶吉氏の訳文も「……その者が王にせよ、主にせよ、市王（パテシ）にせよ、あるいはまた呼ばれたる名の人間（その他如何なる者）たりとも、朕の統治を呼び起し給いし（朕を統治に召喚し給いし）神々の父、偉大なるアヌは、王位の光彩を彼より奪い取り、彼の笏を折り毀き、彼の運命を呪い給え……」[loc. cit., p. 342 l. 18～p. 343 l. 2] と、長い文章の切れ目のない形となっているが、解釈する場合に不都合であるので、また現代文としてもはなはだ冗長であるので、本書ではここで切断することにした。

この第1行目の lu-en を「主であれ……」とするのは、キリスト教のヤハウエ（YHWH）から「主たる神、ナザレのイエス」と称える呼称と関連して確かに問題があろうが、多分キリスト教を意識して中田一郎氏がわざわざこの呼称を避けて「支配者」とするのは更に問題があるのではないかと思われる。第2行目の pa-te-si を市王（パテシ）とする原田慶吉氏の訳は、原文をそのまま片仮名書きで挿入してあり、それを領主と訳そうが知事と訳そうがあまり問題がないように思われるが、第5行目の me-

lam₂が正確には何であるかわからぬのに中田一郎氏のように「メランム」と片仮名書きで何の説明も挿入しないのは翻訳としてはあまり感心できない。それを原田慶吉氏の訳したように「光彩」であるか、抽象的な名詞である「栄光」であるかは、実は良くわからないのである。

アヌ（ム）神は、比較神話学上の考察として前文の段落などから何度も出てきたようにシュメール時代からの「天神」であり、バビロニアにおいても、古代ギリシアのゼウス神が古代ローマでユピテル神となったように、そのまま「神々の父」と信じられていた。

後文第15段落の楔形文字原文

	i ¹ en-lil ₂ be-lum mu-si-im si-ma-tim	Sāmu 決する
	神エンリルが 主なる 決定者 運命の	
	Sa qi ₂ -bi ₂ -zu la ut-ta-ka-ru	qibezu = qibītu šu
	所の 彼の命令は ず 反論でき	nakāru 反論する、異なる
	mu-sar-bu-u ₃ sar-ru-ti ia	rabū 大きくする
	拡大した 領土を 我が	
	te-si la su-ub-bi-im ga-zu	Sabū 支配する、攻撃する
	反抗と（所の）ない 押さえられ 彼の手を	
	ra-ah ha-la-qi ₂ šu	
	呪いで（所の）破壊的な 彼には	
	i-na su-ub-ti šu li-sa-ab-bi-ha-aš sum	Sapāhu 散らす、追い出す
	から 住まい 彼の 追い出すように、（又）	

後文第15段落の試訳

その命令は反論（変更することも）できず（それらの運命を決定した）、我が領土を拡大したところのエンリル神が、その者の手が押さえられない反抗やその者には破壊的な呪いによって、その者を（自分の）住まうところから追い出して（燎火のように燃焼させて）しまうように。

後文第15段落の解釈

この段落から後は、シュメールとアッカド神々に捧げた文言が多くその中で1～2の段落だけに主要な神々への祈りの讃歌とも言うべき字句が並べられている。中田一郎氏の「ハンムラビ『法典』」では、アッカド語の文章を無視して、神の名を先に記し、その神への祈りの言葉をその次に記しているが、アッカド語の翻訳方法としてこの方法が良いのかどうかは疑問である。しかしながら各神への讃歌という観点からは見るべきものがあるので、最近出された中田一郎氏の訳をこの段落では先ず採りあげ、そこから解説を書いてゆくことにしたい。すなわち中田一郎氏の翻訳としては「エンリル、主、運命を定める方、その命令が変更されることのない方、私の王権を偉大にする方が、鎮めることのできない混乱と彼を破滅に導く叛乱を彼の住いに（火のごとく）燃え上がらせてくれるように。……」

〔loc. cit., p. 74 l. 25～p. 75 l. 1〕というエンリル神に対する最初の讃歌をあげているが、このような調子で冒頭に神名をあげ、その讃歌を書く方式を中田氏は継承して、次の筆者が第16段落としたところ以降も、その翻訳方式として続けてゆく形式の訳文となっている。

この中田氏よりもはるか以前に翻訳した原田慶吉氏のほうの訳文は「運命を定め給い、その命令は変ず可くもなく、しかも朕の王国を偉大ならしめ給いし主エルリルは、抑うること能わざる混乱、彼の滅亡〔を齎らす〕分裂を、彼の住居の中に、彼に焚き付け給い、……」〔loc. cit., p. 343 l.

2〜1.4] というように神名を文章の中に置く平叙文の形で翻訳し、さらにこれ以後もこの形式で続けて記述されている。

この第15段落はそのまま次の第16段落まで続くと思われるが、楔形文字の原文が長い直前の第14段落と同様ここで切ることにした。

中田一郎氏は、第14段落のアヌ（ム）神の讃歌で lu-en を主とは訳さず、エンリル神のほうを「主」と訳している。すなわち中田一郎氏は lu-en がアヌ（ム）神を修飾しているものと見ていないか、エンリル神がユダヤ人と同じセム系のアッカド語でより普遍的な神としてユダヤ教にそのまま継がってゆくもの、と考えているのではないかと思われるが、エンリル神もシュメール時代から万神殿たるパンテオンで指導的な神として祭られており、その意味するところは「大気的主人」であったから、こちらの方だけを「主」という名称で訳すことはどうか、と思われる。

それとも be-lum という語が、そのままアラム語やヘブライ語を通して YHWH（主たる神ヤハウェ）にまでつながる語源的要素をもっている、中田氏など宗教的な要素を加く加味して翻訳している学者達がみているのかどうかは良くわからないので、その詳細は不明である。

後文第16段落の楔形文字原文



palī ta-ne-hi-im u₄-mi i-zu-tim

iṣu 小さい

治世、嘆息の日、欠乏の



ša-na-a-at hu-ša-ah-hi-im

年月、空腹の



ik-li-it la na-wa-ri-im

namāru 罵らし出す

闇、 ない 光の



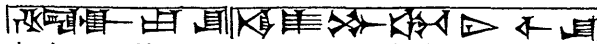
70 mu-ut ni-ti-il i-nim

死を、 見つめる 目を



a-na ši-im-tim li-ši-im sum

として 運命 決定するように、（又） sāmu 決する



ha-la-aq ali šu na-aš2-pu-uh2 ni-ši šu

破壊、 町の 彼の 分散、 人民の 彼の



75 sar-ru-zu su-bi-lam sum šu

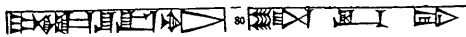
abālu もたらず、取り去る

彼の領土の 除去、 名 彼の



u3 zi-kir su i-na ma-tim la su-ub-sa-a-am

と 名称を 彼の で 国土 持たないこと、などを



i-na pi su kab-tim li-iq-bi

bašū ある、持つ

で 命令 彼の 力強い 述べるように

後文第16段落の試訳

嘆息の（苦難に満ち溢れる）治世、欠乏の日々、空腹の年月、光のない
 闇（の世界）、目を見つめる（一瞬の間に訪れる）死を（その者の）運命
 として決定してしまうように。（その者の）都市を破壊し、人民に分散と
 （その）領土の除去（割譲）、その国土でその者の名が（名誉ある）名称
 を持たないこと等を力強いその莊重なる（エンリル神の）命令で述べるよ
 うに……




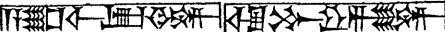
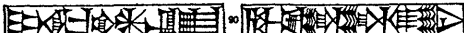

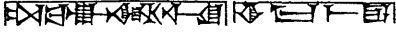
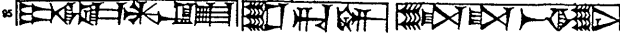
後文第16段落の解釈

直前の第15段落から続くエンリル神への讃歌と祈りの言葉であると思われる。

楔形文字第1行目の ta-ne-hi-im が苦渋か嘆息か苦悩か良くわからないが、いずれにせよ「深い悩みをもって行政上のことにあたる」くらいの意味であろう。この段落にあたる楔形文字アッカド語の文章として中田一郎氏の訳文は「……苦渋に満ちた治世、短命、飢餓、光のない暗闇、（そして）一瞬の（うちに訪れる）死を運命として彼に定めてくれるように。彼の都市の滅亡、彼の民の離散、彼の支配権の変更、そして彼の名前と記憶が国土から消滅することを、（エンリルが）その重々しい言葉でもって命じてくれるように。」〔loc. cit., p. 75 1.1～1.5〕という日本語を記しているが、いずれにせよハンムラビ王に敵対する者が、このような運命をたどることを念願している文章である。これに先立つ原田慶吉氏の初期の翻訳はとみると「……苦悩の統治、欠乏の日、飢餓の年、照明なき暗黒、瞬目の死を運命に彼に定め給い、彼の国を滅亡し、彼の臣民が滅裂となり、彼の王国を抑圧し、彼の名と彼の名声を国（即バビロン）の中に存在せしめざることを、彼の重々しき口〔調〕もて宣し給え。」〔loc. cit., p. 343 1.4～1.6〕と記述していた。

この第15段落と第16段落に関して言えば、中田一郎氏のように「エンリル」という神名を最初に出して、その讃歌としてアッカド語の文章が続けるほうが讃歌などの翻訳技術としてはいくらか良いように思われるが、本書では楔形文字が文章として長く続くので、第15段落と第16段落に分け、その楔形文字の原義をなるべく正確に伝えようとしたので、日本語としては読みづらくなったことをお断わりしておきたい……

後文第17段落の楔形文字原文

	
i ¹ "nin-lil ₂ ummun ra-be ₈ -tum	
神 ニンリル 母 偉大な	
	
ša q ₁₂ -bi ₂ -za i-na e ₂ -kur kab-ta-at	
所の 彼の命令は で エクール神殿 強力である	
	
nin mu-dam-mi-ga-at i-gi-ir-ri ia	damāqu 氣に入る
女王は お気に入りの 計画を 我が	nin > bēltu
	
a-šar si-ip-di-im u ₃ pu-ru-zi-im	šiptu 判決
場所で 判決 や 決定の	
	
i-na ma-har i ¹ "en-lil ₂ a-wa-zu li-li-mi-in	
で の前 神エンリル 彼の訴訟に 悪意あるように、	
	
š _u -ul-pu-ut ma-ti š _u ha-la-aq ni-ši š _u lapātu 打ち叩く	
襲撃と 国への 彼の 破壊と 人民の 彼の	
	
ta-ba-ak na-pi ₃ -ti š _u ki-ma me-e	
流出を 生命の 彼の の如き 水	
	
i-na pī i ¹ "en-lil ₂ šar-ri-im li-ša-aš-ki-in	
の中に 口 神エンリルの 王 置くように、 šakānu 置く、指定する	

後文第17段落の試訳

エクール神殿で、その命令が強力である（崇重される）偉大なる母たる、ニンリル（女）神、我が計画をお気に入りの女王は、エンリル神の御前でおこなう判決や決定の場で、（ニンリル女神の影響で）その者の訴訟を歪めてしまうように。その者の国への襲撃と人民の破壊と水のような生命の流出を、（神々の）王であるエンリル神の口の中に置く（エンリル神

が口頭で命じてくれる) ように……

後文第17段落の解釈

前段落と同様、ここで中田一郎氏の訳を冒頭に掲げ解釈してゆくことにしたい。それでは中田一郎氏の訳はというと、前に述べたように讃歌調で神名を最初に掲げ「ニンリル、偉大な母、その命令はエクルで重きをなす方、私の評判を良くしてくれる方が、裁きと決定の場でエンリルのみ前で彼のことを悪く言うてくれるように。彼の国の崩壊、彼の人々の滅亡、彼の生命を水のごとく注ぎ出すことを、王なるエンリルの命令によって確定させてくれるように。」[loc. cit., p. 75 1.6~1.10] という形で、前段落と同様のエンリル神の讃歌から、それに続いている女神ニンリルの讃歌をここで終らせている。

楔形文字の文章としては、どこに区別があるかどこではっきり句読点にあたるものがあるのか区切りが良くわからないところがあるが、ニンリルを文章の先頭におき、ニンリル神の讃歌としてアッカド語の文章を中田一郎氏のように解釈すれば、文章の翻訳としてというよりも、讃歌としては良く理解できると思う。この段落の最終行は、従来は拙訳も含め直訳としては「エンリル神の口の中に置くように……」というのが普通におこなわれていたが、中田氏のように「王なるエンリルの命令によって確定させてくれるように……」という解釈でも良いように思われる。これに先行する初期の翻訳として原田慶吉氏は、先ず女神の名をベーリットとして、それに先行した男の神の神名を相変らずエルリルに、そしてエクル（中田氏はこれを短母音でエクルと記述している）をエークルルムとして以下の如く「その運命エークルルムにては重々しき偉大なる母、朕の考を麗わしくさせ給う（考を容れ給う）女公ベーリット（Belit）（=Ninlil. エルリルの妃）は、エルリルの前における法廷と裁判の場所にて、彼の訴訟事件を悪

しからしめ、彼の国の荒廃、彼の臣民の滅亡、彼の生命の水の〔流るるが〕如き流出を、王エルリルの口の中に置き給え。〕〔loc. cit., p. 343 l. 6 ~ l. 9〕という文章を記しておられる。この段落の3行目冒頭 nin は、確かにエンリル神の妃パーリットのこと bēltu であることが楔形文字文の右側に記されているが、これを女公パーリットと置きかえることは、原田氏の場合、ここは翻訳というよりも解釈と神話の説明にまで入り込んでしまうような気がする。なおこの次の第18段落の上から4行目の真中のところで、スーサで発掘されたハンムラビ法典石柱の裏側に刻まれた楔形文字の原典は、上から数えて第26段（コラム）が左側端で終了し、その次の u₄-um ba-la-ti から下の第27段目が右端に移って上下に読み進むことになる。

この上から第26段で切れて、アッカド語の文章としては、そのまま第27段の右端に続くと考えられるところを、原田慶吉氏はアイラース (Eilers) 氏の翻訳をそのまま重訳したらしく最後に〔註〕〔qq. v.〕を入れて「(26欄裏103—104行) 疑問の文章であるが、Eilers は Dossin を参照して Nur für den Toren sind sie leer と訳し、前後の関係上すこぶる妥当と思われるがゆえに、一応それに従ったが、彼の原文の読方を参照する機会をえないので、付記した行数は不確実である」と附記している。なおこの部分は筆者の段落としては次の第18段落の4行目にあたる。

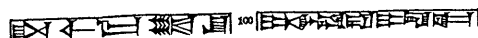
後文第18段落の楔形文字の原文




i¹en-ki nun ra-bi-um

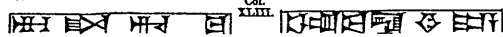
神エンキは 王子 偉大なる

rubū < nun


 ša šī-ma-tu su i-na mah-ra i-la-ka alāku 行く

所の運命が彼のを前行き


 abqal i₃-li₂ mu-di mi-im-ma šum-šu
 指導者、神々の知る者、何でもその名が abqal < nun-me


 mu-ša-ri-ku / u₄-um ba-la-ṭi ia

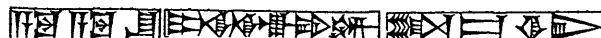
延ばす者であって日を人生の我が arāku 延ばす


 uz-nam u₃ ne-me-ga-am li-te-ir su ma nemēqu 知恵

耳と知恵を取り返すように、彼から tāru 返す、回復する


 i-na mi-ši-tim li-it-ta-ar-ru šu

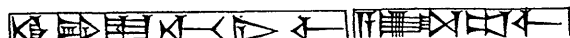
に忘却戻すように、彼を


 id₂-id₂ su i-na na-aq-bi-im li-is-ki-ir sakāru 堰き止める

河々を彼ので水源堰き止めるように、nārātu < id₂-id₂


 i-na ir-ši-ti su i¹ ašnan

では地彼の穀粒の神を


 na-pi-iš-ti niši a u₂-ša-ab-si ašnan < se-tir

生命である人民のなあらしめる bašū 存在する

後文第18段落の試訳

その者の運命が優先するところの偉大なる太公（君主）、神々の（地位に先行する）指導者、全てを知る者、我が人生の日々を延ばす者、エンキ神はその者から耳（情報の収集）と知恵（判断）を取り上げてしまうように。その者を忘却の彼方へ戻してしまうように。その者の河川を水源で堰き止め、その地では人民の生命である穀物（大麦）を存在せしめるな。

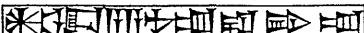
後文第18段落の解釈

同様にこの段落をエンキ神の讃歌とみる中田一郎氏の訳文としては「エンキ、偉大な君主、その定めは卓越している方、神々の知者、すべてを知方、私の寿命を延ばしてくれる方が、彼から知恵と力を取り去ってくれるように。彼を常に混乱のうちに導いてくれるように。彼の川（複数）をその水源において断ってくれるように。彼の地から人々の命の糧である麦を生やさせないでくれるように。」[loc. cit., p. 75 l. 11~l. 15] は、アッカド語の意識としては筋が通っているように見受けられるが、その単語の解釈としてはかなり大胆におこなわれすぎているように見受けられる。特に *mi-si-tim* を混乱し、*li-it-ta-ar-ru* という動詞を「導く」と解釈するのはかなり無理があるように思われるが、エンキ神への讃歌としては全体に翻訳の筋が通っており、一読してその真髓がわかるような日本語の文章として訳出されていると思われる。

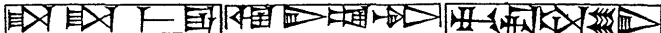
この段落にあたる文章を、讃歌とは解釈せず、普通の文章として翻訳なさっていると思われる原田慶吉氏の訳文は「偉大なる大公にして、その運命の決定〔の仕方〕は先頭を行き、神々中の名人にして、何物たりともこれに通じ、朕の生の日数〔命数〕を長からしめ給うエアは、聴聞と智囊を彼より奪い取りて、健忘に彼を導き、彼の川々を源泉において堰き止め、彼の〔耕〕地の中に人民生命〔の糧〕穀粒を存在せしめ給わざれ。」[loc. cit., p. 343 l. 9~l. 11] という文章にしている。この筆者が分類した第18段落の上から第4行目のところで第26欄が切れ、アッカド語の文章としてはそのまま第27欄として裏というより裏から見て右側のところで上から数えて第27欄が始まるのであるが、このアッカド語の文章に前の第18段落の末で説明したような疑問を原田氏は提しているだけでなく、その訳文も少々疑問がもたれるのである。従って原田氏の訳文中「神々中の名人にして、何物たりともこれに通じ、朕の生の日数〔命数〕を長からしめ給うエ

アは……」のところの訳と行数には原田氏自身が自分で疑問を有していたことが良くわかるのである。なおエアとは当然エンキ神のことである。

後文第19段落の楔形文字原文


 11^u samaš da-a-a-nu-um ra-bi-um


神シャマシュは 裁判官 偉大なる

15 
 Sa ša-me-e u₃ ir-ši-tim mu-uš-te-se-ir ašāru 正義で支配する

所の 天 と 地で 正義を


 ša-ak-na-at na-pi-iš-tim

置く（敷く）生ける物に


 be-lum tu-kul-ti šar-ru-zu li-is-ki-ip sakāpu 転倒する

主であり 我が力の 彼の王国を 転覆するように、


 di-in su a i-di-in u₂-ru-uh su li-si ešū 誤る

判決を 彼の ないように、決し 道を 彼の 誤るように、 dānu 決する


 isid um-ma-ni su li-iš-hi-[el]-zi 注意 id-di-in < nadānu 与える
 isid < du


基礎を 軍の 彼の 破壊するように、 hašū 破壊する


 i-na bi-ri su širam lim-nam みること

の中に 幻視 彼の 前兆を 悪い širu < uzu 肉、前兆


 ša na-sa-ah isid šar-ru-ti su nasāhu 切り落とす、根絶する

所の 根こぎにし 基礎を 治世の 彼の

30 
 u₃ ha-la-aq ma-ti su li-is-ku-un šum Sakānu 指定する、置く

破壊する 国の 彼の 見せるように、（彼に）

後文第19段落の試訳

天地で、生けとし生ける者にその正義（mu-uš-te-še-ir）を敷衍する偉大なる裁判官、我が力の主、シャマシュ神はその者の王国を転覆してしまうように。その者の判決を決して下さない（許容しない）ように。その者の正道を誤らしめるように。その者の軍隊の基幹を破壊してしまわれるように。その者の幻視の中では、治世の基礎を根こそぎにして、その者の国を破壊する悪い前兆（神託）が見えてくるように。

後文第19段落の解釈

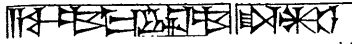
この箇所と次の第20段落の解釈については、ハンムラピ法典石柱頭部に描かれたシャマシュ神が手に持つ象徴図像を論じた、本書冒頭の「法の象徴図像『王笏』」と関連づけて、太陽神であると同時に司法神であるシャマシュ神を理解していただきたいと思う。

司法神であるシャマシュ神の、裁判官としての機能を明示したこの第19段落では、その正義 mu-uš-te-še-ir を遍く広く施行する裁判官の頂点に立つのがシャマシュ神であることが先ず述べられ、そして国家の司法機能を司どり、前の第18段落までに述べられてきたこのハンムラピ法典で、その法文に違反するような者は外国の国王たりとても正義にもとづかない政治をおこなえば国家を滅ぼすことになる、ということが述べられると同時に、その内容が讃歌の形で示されているのである。そしてこの第19段落の下から次の第20段落の中程までは、讃歌と同時に祈りの要素が加わって、更にハンムラピ法典で支配する古代のバビロニア王国に敵対して、この法規を守らないような国家は、滅亡されるという「呪い」が祈りの文句に添加されて現れる。そしてシャマシュ神が神罰を下すところは、同じセム系のユダヤ人によって旧約聖書の創世紀ともなる「ノアの洪水伝説」の原型ともみることができる「水による処罰」をもって、次の第20段落までのと

ここでシャマシュ神の讃歌はすべてが終っていると考えられるのである。それではシャマシュ神への讃歌とでも言うべき形で翻訳している中田一郎氏の翻訳をその途中まで引用し（この第19段落の楔形文字はすべて訳すが、讃歌としては次の第20段落に続いているから）、ローマ法の専門家として法律学者の観点から翻訳している原田慶吉氏の翻訳と比較してみることになろう。中田一郎氏の訳文は「シャマシュ、天地の偉大な裁判官、生命あるものを導く方、主、私が依り頼む方が、彼の王権を拒絶してくれるように、彼のケースを裁かないでくれるように、彼の道を混乱させてくれるように、彼の民の基盤を崩れさせてくれるように、彼の王権の基の崩壊と彼の国の滅亡のオーメンを彼に与えてくれるように。……」〔loc. cit., p. 75 l. 16～l. 20〕というのがこの第19段落の終りまでのシャマシュ神の讃歌で、次の第20段落へと次く。一方、この中田一郎氏のはるか前に『楔形文字法の研究』として翻訳した原田慶吉氏の訳文は「天と地の偉大なる裁判官にして、生あるものに正を得せしめ給ひ、朕の信頼者たる主たり給うシャマシュは、彼の王国を覆滅し、彼の法を法する（立つる）ことなく、彼の道を迷わし、彼の軍隊の基礎を揺し、彼の〔犠牲による〕卜定に際しては、彼の王国の基礎を根刮ぎにし、もつて彼の国を滅亡すとの悪しき神託を彼に置き給え。」〔loc. cit., p. 343 l. 11～l. 14〕となっていた。中田一郎氏は、このハンムラビ法典が法律を記した一般的な意味の法典とはみなさないことから法典をその書名において鈎括弧つきで出版していることからわかる様に、このシャマシュ神に関する項目も、他の神と同様の讃歌の形でしか促えていないようである。それとは逆に、原田慶吉氏のほうも「……生あるものに正を得せしめ給ひ……彼の法を法することなく……」と di-in を敢て「法」と訳し、判決という具体的な裁判手続きとは解していないようである。また širam を「神託」と訳すが、これと同じ太陽神アポロンの下す神託と考えるギリシア神話と同様に考えて「神託」と

いう訳語とするのは、かなり無理があると思われる。この解釈は中田一郎氏の片仮名「オーメン」と同様、かなり訳語に自分の思想的な思い込みが夫々深すぎるように感じられる。

後文第20段落の楔形文字原文



a-wa-tum ma-ru-uš-tum ša i¹šamaš

言葉が 枯らせる (呪いの) の 神シャマシュ



ar-hi-is li-ik-su-zu

kašādu 速する、得る

急いで 落ちるように、



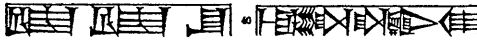
e-li-is i-na ba-al-tu-tim li-iz-zu-uh₂ šu

上の では (地上) 生活 根こぎするように、彼を



ša-ap-li-is i-na ir-ši-tim

下の では 地中



ekimmē su me-e li-ša-az-mi

ekimmē < udug-udug

亡霊に 彼の 水を 剝奪するように、

zāmū 剝奪する



i¹šin be-el ša-me-e ilum ba-ni-i

sin < en-zu

神シンが 主、天の 神、私を作った



ša še-ri-zu i-na i₃-li₂ šu-pa-a-at

āpū 舞く

šeri-zu = šērtu šu

所の 彼の 三日月刀が 中に 神々の 舞く

(祭、の意味もある)



agām kussām ša šar-ru-tim li-te-ir su

agū < mir

王冠 玉座を の 治世 戻すように、彼から

kussū < i¹gu-za

後文第20段落の試訳

（直前の第19段落より、アッカド語の文章とその意味内容は続いていて）シャマシュ神の呪いの言葉が、急いで落ちてくるように。上の地上生活ではその者を根こそぎにするように。下の地中（冥府にあって）では、彼の亡霊から水を剝奪してしまうように。

その三日月刀（月）が神々の中で輝く神、天の主、余を創りたもうたシンの神が、王冠と治世の玉座を（その者から）取り上げてしまうように。

後文第20段落の解釈

この段落の5行目までが、前の段落（第19段落）から続く太陽神シャマシュへの讃歌であり、その下3行は文章として次の第21段落に続く、月の神シンへの讃歌と祈りの言葉である。

中田一郎氏は、アッカド語の文章として太陽神と月の神を別の段落に訳し分けているようであるが、楔形文字の文章としては、むしろ第19段落から第21段落まで一貫して繋がっているように思えるので、各神への讃歌として個別に切って訳すのは、アッカド語の観点からも問題があるのではないだろうかと思う。中田一郎氏はその著書の「まえがき」で、「……原文をできるだけ忠実に日本語に訳す……」と述べているが、この後文に関する限りどうも思想的な「讃歌」への思い込みのほうが、常に優先しているように感じられる。

その中田一郎氏の訳文は「シャマシュの厳しい言葉が彼をすぐに捕えてくれるように。上にあっては、生きる者たちの間から彼を取り除いてくれるように。下にあっては、冥界で、彼の霊が水に飢え渴くように。

シン、天の主、私をお創りになった神、その輝き（？）が神々の間で顕著である方が、彼から王冠と王座を奪い取ってくれるように。……」

〔loc. cit., p. 75 l. 20～l. 25〕 というもので、シャマシュ神とシン神の部

分を完全に二分して、夫々シャマシュ神とシン神の讃歌を完全に別のところに分類した形の文章、となっている。

この第20段落の後半に出てくるシンという神は、シュメール時代にナンナと呼ばれていた「月の神」でそれが都市国家ウルの守護神として祭られていた。それがアッカド語ではシンと呼ばれるようになったもので、神への讃歌という点では第19段落と第20段落に出てきた太陽神シャマシュと対になった箇所常に置かれている。中田氏が彼という人称代名詞で指す者は、第10段落あたりから登場するこのハンムラピ法典の法文化に馴染まず、古代の国家バビロニア王国に敵対する国の国王かあるいは知事または領主などを指すと思われる。

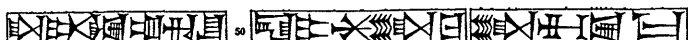
この中田氏より、はるか以前にハンムラピ法典の後文を訳した原田慶吉氏は、中田氏のようにシャマシュとシンを讃歌という形で分離せず、一貫した文章として「……シャマシュの不吉の御告は、急ぎ彼を捕え、上においては生ける者どもより彼を根刮ぎにし、下においては地下に彼の亡霊をして水を渴望せしめ給え。天の主、朕の産み創り親にして、その光彩神々の間にありて陸離たるシンは、王位の冠と椅子を彼より奪い取り、……」〔loc. cit., p. 343 l. 14~l. 16〕という記述からみてもわかるように、ここでアッカド語の文章が終らず、次の第21段落に続いた形で翻訳なさっている。

後文第21段落の楔形文字原文



ar-nam kab-tam se-ri-zu ra-bi-tam

罰 重い 罪を 大きい



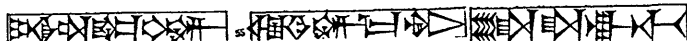
ša i-na zu-um-ri šu la i-hal-li-qu₂ li-mu-zu ma

所の から体 彼の 失せない 課するように、 emēdu 薪ばれる、課する



u₄-mi arhi arhi ša-na-a-at palī šu

日々 月々 年々は 治世の 彼の



i-na ta-ne-hi-im u₃ di-im-ma-tim li-ša-aq-ti qatū終りにする、切り捨てる

で 嘆息 と 涙 終わらせるように、



kam-ma-al šar-ru-tim li-ša-ad-di-il šu šadālu 増やす、広げる

負担を 王国の 増加するように、彼に



ba-la-ṭam ša it-ti mu-tim si-ta-an-nu šanānu 似ている、対立する

人生を 所の 共の 死と ような



a-na si-im-tim li-si-im šum

šamū 決する

として 運命 決するように、彼に

後文第21段落の試訳

(直前の第20段落の後半3行からアッカド語の文章が続いていて……)

その者の体から、失せない重い刑罰と重大なる罪状とを、その者に課してくるよう。その者の治世の日々、月々、年々は、嘆息と涙で終わらせるように。その者に王国の負担を増加させるように。死と共にあるような人生を、(その者の) 運命としても決(定)するように……

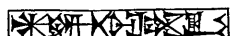
後文第21段落の解釈

アッカド語の文章としては、直前の第20段落後半から続く月神シンの讃歌の続きで、シンの神がバビロニアに敵対する者に下す神罰を讃歌と祈りの形式で記してあるところであると思われる。この段落にあたる中田一郎

氏の訳文としては「……彼の体から無くなることのない重罰を彼（シン）の偉大な罰として彼に科してくれるように。彼の治世の日々、月々、年々をため息と嘆きのうちに終らせてくれるように。王位を狙う者を彼に見させてくれるように。死に等しい生を彼の運命として彼に定めてくれるように。」〔loc. cit., p. 75 l. 26～p. 76 l. 3〕という文章になっている。この後文にあたるところをおそらく日本で最初に翻訳した原田慶吉氏は、アッカド語の文章の切れ目を、この第21段落のところに置かず、また太陽神シャマシュだけの讃歌という形で、後の中田氏のようにそれよりも前の段落をも把握していないようで、本書第20段落の冒頭部分から「……シャマシュ神の不吉の御告は、急ぎ彼を捕え、上においては生ける者共より彼を根刮ぎにし、下においては地下に彼の亡霊をして水を渴望せしめ給え。天の主、朕の産み創り親にして、その光彩神々の間に在りて陸離たるシンは、王位の冠と椅子を彼より奪い取り、〔ここから筆者の分類したこの第21段落に入る〕彼の体より失せ去ることなき重き罰を、大なる犢〔として〕彼に科し、以つて彼の統治の日々月々年々をば、苦悩と悲嘆の中に彼に終焉せしめ、王国の負担を彼に重からしめ、死と競い合う生を彼に運命に定め給え。」〔loc. cit., p. 343 l. 14～l. 18〕というように、太陽と月の両神を意識して連続させて翻訳しているように見受けられる。

なお中田氏の「……王位を狙う者を彼に見させてくれる……」という翻訳はその前後からみて意味が通らず「その者に自分の王国を維持してゆく負担を増加させる（重からしめる）ように」ともとの原田慶吉氏の翻訳のように解釈の方が、アッカド語の文章としても、順当のように感じられる。

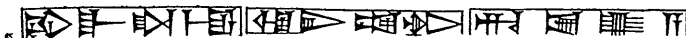
後文第22段落の楔形文字原文



i¹adad be-el hēgallim

hēgallu < he₂-gal₂ 豊富

神アダドが 主、 充足の



gu-gal sa-me-e u₃ ir-ši-tim ri-šu u₂-a

指導職、 天 と 地の 援助者、 我が



zu-ni i-na sa-me-e mi-lam i-na na-ak-bi-im

雨と からの 天 洪水から からの 泉



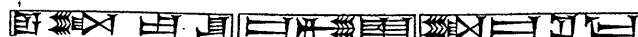
li-te-ir šu

拒むように、彼を



ma-zu i-na hu-sa-ah₂-hi-im u₃ bu-bu-tim li-hal-li-iq

彼の国を で 飢餓 と 渴望 破壊するように、



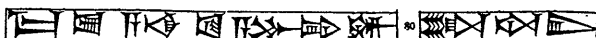
e-li ali šu iz-zi-is li-is-si ma

nišu 災れる

注意 is-si-ma < našu 運ぶ

を 町 彼の 熱狂的に 暴れるように、

i-si-ma < sāmu 決する



ma-zu a-na til a-bu-bi-im li-te-ir

彼の国を に 丘 嵐で 変えるように、

後文第22段落の試訳

充滿（豊饒）の主（人）、天と地（において）の指導職（統括する者、管督者）、我が援助（支援）者でもあるアダド神が、（余の援助者から）天から（降らせる）の雨や泉の洪水からその者（バビロニアに敵対する国王）を拒むように。その者の国を飢餓と渴望で破壊してしまうように。その者の国を嵐（嵐を吹き起こし）で丘陵に変えてしまうように。

後文第22段落の解釈

この段落は、本来は西方セム系の「嵐の神」であったアダド神（一方東方のインドでは、リグ・ヴェーダ讃歌の中で暴風神ヴァータがやはり家畜や財宝を豊かにするヴァーユの神になることが共通している）が、同じセム系の古代バビロニアに受け入れられて、このハンムラピ法典の後文中に讃歌と祈りの対象として記述されるようになったアッカド語の文章と考えられる。相変らずこの後文の最後を、各神々の讃歌とみなしていると思われる中田一郎氏の訳は「アダド、豊穡の主、天地の水管理人、私の助け手が、天の雨と水源の増水を彼から奪い取ってくれるように。彼の国を飢饉と餓えて滅ぼしてくれるように。彼の町に対して怒り狂って吠えたけり、彼の国を洪水のあとの廃虚のごとくしてくれるように。」[loc. cit., p. 76 l. 5~l. 8] となっており、その訳文にはるか先行する原田慶吉氏の翻訳は「充溢の主、天と地の統卒者にして、朕の援助者たり給うアダッドは、天における降雨、源における湧出を彼より奪い取り、彼の国を飢餓と渴望の中に滅亡せしめ、彼の市の上に怒るが如く叫びて、彼の国を大洪水の廃虚に変わらしめ給え。」[loc. cit., p. 343 l. 18~p. 344 l. 2] となっているが、このアダド神が同じセム系のユダヤ人にとって旧約聖書の創世記第6章「ノアの洪水」を引きおこす「主（ヤハウェ）たる神（エロヒム）」として、その神格が将来の一神教の中に甦るのである。

後文第23段落の楔形文字原文



ii^a za-ba^a-ba^a qar-ra-du-um ra-bi-um

神ザババが

戦士、偉大な

mar ri-eš-tu-um ša e2-kur a-li-ku im-ni ia

息子、長男の 所の エクル神殿で 行く 右を 我が

a-sar tam-ha-ri-im kakka šu li-iš-bi-ir

Sabāru 毀す

場で 戦いの 武器を 彼の 壊すように、

u4-ma-am a-na mu-ši-im li-te-ir šum ma

昼を に 夜 変えて、彼には

na-ki-ir šu e-li šu li-iš-zi-iz

nazāzu 立つ、尽くす

敵が 彼の 上に 彼の 立つように、

i1-inanna be-li-it tahazim u3 qablē

tāhāzu < me3

神イナンナ 女神、 戦い と 抗争の

qablu < sen-sen

pa-ti-a-at kakki ia

pitū 開拓する、毀す

(所の) 開いた 武器を 我が

la-ma-zi da-mi-iq-tum ra-i-ma-at pali ia rāmu

守護霊、慈悲深い 愛する 治世を 我が

i-na li-ib-bi sa ag-gi-im

で 心 彼女の 怒りの

i-na uz-za-ti sa ra-bea-a-tim sar-ru-zu li-ru-ur

で 激怒 彼女の 大きな 彼の王国を 呪うように、

後文第23段落の試訳

エクル神殿で（余の）右側を（歩み）行く（補助者エクルの）長男、我が偉大なる戦士ザババ神が、戦場でその者の武器を壊してしまうように。昼を夜に変えて、その者の敵（その者が敵対している者）が彼（その者）の上に立ってしまうように。

余の武器を改良したところの戦いと抗争の女神イナンナ神（イシュタール神）、余の治世を慈愛する慈悲深い守護（女）神が、その怒りの心でまた大きな激怒で、その者の王国を呪うように……

後文第23段落の解釈

この段落に出てくる戦士としてのザババ神（原田慶吉氏はイルババ神と訳していた）という神が、どのような性質をもっていたか、あまり多くの資料がなくて良くわからないが、インドのリグ・ヴェーダ讃歌に出てくるインドラ神とそれに従うマルト神群のような存在と考えられる。この段落の2行目末にある我が（ia）という所有代名詞がどこまでかかるか、という解釈の方法によって訳文の内容が当然変わってくる。

後半に出てくるイナンナ神という女神は、既にこの後文の第3段落の解釈と更に以前の前文第4段落と第5段落のところで述べたように、アッカド時代にはイシュタール神と言われていたようで、前半分のザババ神とも深い関係をもつ神として良く知られている。中田一郎氏はザババとイシュタルを別の二神のように分けて讃歌形式で翻訳しているようであるが、比較神話学の観点では両者は深く結びついているので、楔形文字の段落としては、本書では同じ段落とした。その中田一郎氏の訳文は「ザババ、偉大なる戦士、エクルの長子、私の右を歩む方（助け手）が、戦場で彼の武器を打ち砕いてくれるように。彼に対して昼を夜に変えてくれるように。彼の敵を彼の上に立たせてくれるように。」

イシュタル、戦いと戦闘の女主人、私の武器を引き抜く方、私の良き守護女神、私の統治を愛する方が、その心を荒れ狂わせ非常に怒って彼の王権を呪ってくれるように。」[loc. cit., p. 76 1.9~1.15] というものであったが、それにはるか先行する原田慶吉氏の翻訳は「偉大なる勇士、エークルルムの長子にして、朕の右側を行き給うイルババは、戦闘の場所に

て、彼の武器を折り毀き、日を夜に変わらしめて、彼の敵を彼の上に来らせ給え。朕の武器を抜き給う戦闘と戦争の女王、朕の統治を愛し給う麗わしき守護女神イシュタルは、憤れる彼の女の心もて、大なる彼の女の怒もて、彼の王国を呪い、……」[loc. cit., p. 344 l. 2～l. 5] ということろまでが、この第23段落の部分の訳文となっている。

このバビロニアでイシュタルまたは語幹母音が短音化してイシュタルと呼ばれていた戦争の守護女神は、古代ローマのマルス神とパークス平和の神を合したもので、同じセム系のユダヤ人によって旧約聖書『エステル記』となって、インド・ヨーロッパ世界にもその名を残すことになる。英語でエステル記は、the Book of Esther と書き、Esther の名は女の子の洗礼名として、かなりアメリカ合衆国あたりでは普及した名称となって今日に至っている。このエステル記に著述されたユダヤ人の隆盛が、古代バビロニアを滅ぼした後の古代ペルシアで実際に成立し「プリムの祭り」となって、ユダヤ教の中にハンムラビ法典から派生したバビロニア祭儀慣習となって伝わっているのかどうか、ユダヤ教の律法に精通した霊的指導者をもって任じている聖職者ラビ導師にも余り良くわかっていないらしい。旧約聖書『エステル記』第1章クセルクセス王の酒宴、冒頭第1節より第5節までのヘブライ語原典インターリネアル版『聖書』（右側より左側へ読む、その各単語の下に英語の対訳つき）は以下の通り。

וְהָיָה בַּיּוֹם אֲחַשְׁוֶרֶשׁ הוּא אֲחַשְׁוֶרֶשׁ הַמֶּלֶךְ מִהִינדּוּ
from-India the-one-ruling Ahasuerus he Ahasuerus in-days-of and-he-was (1:1)

וְעַד-כֹּחַ שֶׁבַע וְעֶשְׂרִים וּמֵאָה מְדִינָה: בַּיָּמִים הָהֵם
the-those in-the-days (2) province and-hundred and-twenty seven Cush even-to

כְּשֶׁבַת הַמֶּלֶךְ אֲחַשְׁוֶרֶשׁ עַל כִּסֵּא מַלְכוּתוֹ אֲשֶׁר בְּשֹׁשַׁן
in-Susa that royalty-of-him throne-of from Ahasuerus the-king as-to-reign

הַבִּירָה: בַּשָּׁנָה שְׁלוֹשׁ לְמָלְכוֹ עָשָׂה מִשְׁתֵּה לְכָל-
for-all-of banquet he-gave to-reign-him three in-year-of (3) the-citadel

וּמְדֵי	פָּרֶס	חֵיל	וְעֲבָדָיו	שָׂרָיו
and-Media	Persia	military-leader-of	and-officials-of-him	nobles-of-him

אֶת־	בְּהִרְאֹתוֹ	לִפְנֵיו:	הַמְּדִינֹת	וְשָׂרָי
	when-to-display-him	(4) before-him	the-provinces	and-nobles-of
the-princes				
עֲשָׂר	כְּבוֹד	מַלְכוּתוֹ	וְאֶת־	יָקָר
majesty-of-him	glory-of	splendor-of	and	kingdom-of-him
vastness-of				
wealth-of				
יָמִים	רַבִּים	שְׁמוֹנִים	וּמֵאֹת	יּוֹם:
the-days	and-when-to-be-over	(5) day	and-hundred-of	eighty
many days				
הָאֵלֶּה	עָשָׂה	הַמֶּלֶךְ	לְכָל־	הָעָם
in-Susa	the-ones-being-found	the-people	for-all-of	the-king
he-gave				
the-these				
יָמִים	שִׁבְעַת	מִשְׁתֵּה	קָטָן	וְעַד־
days	seven-of	banquet	least	even-to
for-from-greatest				
the-citadel				
בְּחִצְרֹ				
בֵּיתֶן				
גִּנָּת				
הַמֶּלֶךְ:				
the-king				
palace-of				
garden-of				
in-enclosure-of				



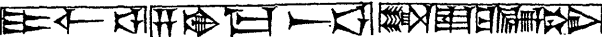




ペルシアからインドまで支配したクセルクセス王のユダヤ人王妃エステル
の名に残されたセム系民族イシュタールの名前が、はたしてどれだけハ
ンムラビ法典全盛期の背景を伝えてその物語を間接的に伝えているかはわ
からないが、キリスト教の普及とともに印欧系民族の洗礼名などにそのま
まエステル、エスター Esther（愛称は Essie と t 音が s に同化）として
伝えられ、今日に至っているものと考えられる。

後文第24段落の楔形文字原文



dam-ga-ti šu a-na li-im-ne-tim li-te-ir arāru 𐎶𐎵

慈悲を 彼の に 悪 変えるように、

- Col.
XLIV
- 
 / (li-te-ir) a-Sar ta-ha-zim u; qablē
 重獲 の場で 戦い と 抗争
- 
 kakka su li-is-bi-ir
 武器を 彼の 壊すように、
- 
 i-si-tam za-ah-ma-as-tam li-is-ku-un sum iṣitu 混乱
 混乱 反乱を 起こすように、 注意 iṣatu 火
- 
 qar-ra-di šu li-ša-am-ki-it iṣtu 後の
 戦士を 彼の 崩すように、 maqātu 落ちる、崩れる
- 
 da-mi šu-nu ir-ši-tam li-is-ki
 血を 彼らの 土地に 注ぐように、 šaqū 水を注ぐ
- 
 gu-ru-un ša-al-ma-at um-ma-na-ti šu
 山積み 死体の 軍隊の 彼の
- 
 i-na ši-ri-im li-it-ta-ad-di
 に 野 投げ出すように、 nadū 投げる、無視する

後文第24段落の試訳

その(者の)慈悲(善)を悪(徳)に変えてしまうように。変(更)してしまうように〔重複〕。戦いと抗争の場でその者の武器を破壊してしまうように。混乱と反乱を(その者のうえに)まき起こすように。その者の戦士達をつき崩して(打倒して)しまうように。その者どもの血液をその土地に注いでしまうように。その者の軍隊における戦死者の死体の山を、野原に投げ出さしてしまうように。

後文第24段落の解釈

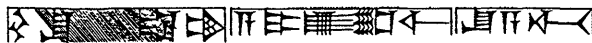
直前の第23段落後半から始まるイシュタール神の讃歌としての途中のところがこの第24段落で、次の第25段落の楔形文字碑文3行目まで続く部分が「イシュタール神の讃歌」である、とみられている。

それではこの部分の楔形文字段落をやはり中田一郎氏訳と原田慶吉氏の翻訳で比較してみよう。まず中田一郎氏のほうの訳文は「……彼の善を悪に変えてくれるように。戦いと戦闘の場で彼の武器を打ち砕いてくれるように。彼に対して混乱と反乱をおこしてくれるように。彼の戦士たちを倒れさせ、大地に彼らの血を飲ませてくれるように。彼の兵士たちの死体の山をいつまでも野に放置してくれるように。……」[loc. cit., p. 76 l. 15~l. 19] というところまでが、筆者が第24段落としたところの中田氏の訳文で楔形文字が段落の上下で重複しているところは無視している。

そして、それよりかなり昔に翻訳した原田慶吉氏の訳としては「……彼の善行を悪行に変わらしめ給い、変わらしめ給い（碑文作成上の過失に因る重複）、戦闘と戦争の場所にて、彼の武器を折り毀き、混乱騷擾を彼に置き、彼の勇士等を倒れしめ、彼等の血を地に飲ましめ、彼の諸々の軍隊の屍の山（堆積）を、野の中にて投げやり、……」[loc. cit., p. 344 l. 5~l. 7] となっており、この段落の楔形文字第2行目冒頭にある *li-te-ir* ……（変えるように……のところ）が、第1行目末にも記されているので、重ねて2度使われているところを、碑文作成上の過失に因る重複と指摘して、わざわざ書き入れる形で石柱の原典に忠実に翻訳しようと努力なさっている。ところでこの段落の第2行目でスーサで発掘されたハンムラピ法典の石柱の裏面に刻された楔形文字原典は上から数えて第27段（欄、27コラム）が左側で終了して第28段（コラム）が右側に移って（右側面の方に入りこんでいるが）上下（楔形文字原文欄では左から右）に読み進めてゆくことになる。当時の楔形文字を刻印した技術者もそれ故に第27段で

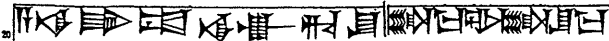
刻んだことを忘れて下の右端に重ねて刻印したものと思われる。中田氏はこのような重複をわざわざ指摘していないところを見ると、イランのスーサで発掘された石柱の条文をそれ程重視せず、他の粘土板等によってハンムラビ法典（中田氏はハンムラビ『法典』）の原文を考えているから、アッカド語の文章としては、このような重複を解説していないのであろう。

後文第25段落の楔形文字原文



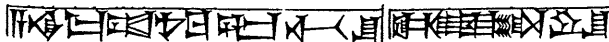
šāb su ---am a-i u₂-šar-ši šu-a-ti rašū 得る、受ける、許す

軍に 彼の 埋葬？を ず 許さ （それを）



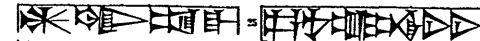
a-na ga-at na-ak-ri su li-ma-al-li su ma malū 満たす、完成する

に 手 敵の 彼の 満たすように、彼を



a-na ma-at nu-ku-ur₂-ti su ka-mi-iš li-ru su āru 運ぶ

に 国 敵意の 彼の 縛って 運ぶように



i^une₃-iri₁-gal dan-nu-um i-na i₃-li₂

神ネルガルが 強者、 の中の 神々



qa₂-ba-al la ma-ha-ar

戦士、ない 並ぶ者の



mu-sa-ak-si-du ir-ni-ti ia

得させる者 勝利を 我が

kašādu 逮する、打ち勝つ



i-na ka-su-si su ra-bi-im

で 力 その 偉大な


 ki-ma i-sa-tim iz-zi-tim sa a-bi-im
 のように 炎 狂暴な の 芦草

 ni-si su li-ik-me
 人民を 彼の 燃やすように、

qamū 燃やす

後文第25段落の試訳

（この段落のアカド語による文章は、前の第23段落あたりからずっと続いていて）その者の軍隊（内）で埋葬すること（？）を許さず、敵の手に満たしてしまうように。敵対する国にその者を縛って（枷をかけて）運んでしまう（捕虜として連行されてしまう）ように。

神々の中の強者、並ぶもののない戦士、余の勝因を得させる（ことを希う）者である（冥府の主）ネルガル神が、その偉大な力をもって葦草に（襲いかかる）狂暴な炎群のようにその者の人民を燃焼し尽くしてしまうように。

後文第25段落の解釈

この段落の楔形文字3行目までが、第25段落から続いてきたイシュタール神の讃歌で、4行目からは異なる神格ネルガル神への讃歌が始まっており、第26段落の楔形文字第3行目まで続くのである。ネルガル神は、一般的にはバビロニア社会の「地獄または黄泉の国の神」として知られているが、日本神話の伊弉冉尊（伊邪那美命）、仏教でいう閻魔（サンスクリット語の Yama）とは何等関係ない神格とみられている。日本語の黄泉とは、人が死んだ後その死者の霊魂が行くところとされる死者の国、冥府のことであるが、冥土、冥途など冥のつく字は単に「暗い」を意味するだけで、比較神話学特にインド・ヨーロッパ神話学的な観点からは、ゾロアス

ター教の聖典『アヴェスター』中に登場する伝説的な王イーマ Yima から展開した『リグ・ヴェーダ讃歌』の中で繰り広げられる双生児の妹ヤミーとの神話から、更に大兼仏教の「地獄」思想につながるのであるが、シュメール時代から続く古代バビロニアの神話『ギルガメッシュ叙事詩』などと何等関連性をもたない、とみられてきた〔qq. v. C. Scott Littleton, “The New Comparative Mythology” the University of California Press, Berkeley 1966 年第 9 章参照〕。

しかしながら、このハンムラピ法典の後文でネルガル神のおこなう讃歌を実際にみてみると大乘・北伝仏教で八熱地獄などサンスクリット語の *naraka*, *niraka* から想像された「火によって苦しめられる地獄」は、このネルガル神の讃歌からも間接的に影響されているのではないかと、とも思えてくるのである。

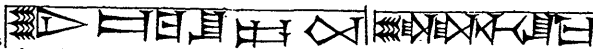
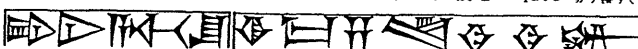

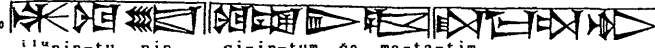
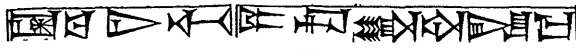


最近刊行した中田一郎氏の訳文を見てみると「……彼の人々が哀れまれることがないように。彼を彼の敵に引き渡し、彼らが彼に枷をはめて彼の敵国に連行してくれるように。

ネルガル、神々のなかの強き方、匹敵する者のない戦士、私の願いを実現してくれる方が、葦原に燃え盛る火のように、彼の偉大な武器で彼の民を燃き盡してくれるように。……」〔loc. cit., p. 76 l. 18~l. 24〕、どうも中田氏のこの箇所冒頭「哀れまれる……」はどうも意味がわからず、また現代文に訳すに際し、人称代名詞が多く入りすぎているように見受けられる。しかし讃歌としては、中田氏流のやり方でネルガル神から別の段落に分離してあるので、理解し易く翻訳されている、と言えるだろう。

その一方、はるか過去に翻訳を刊行した原田慶吉氏の訳は「……彼の軍隊に憐愍をえさしめ給うことなく、彼をば彼の敵の手に満たさしめて、彼の敵国に縛られたる儘彼を導き給え。神々中の強者、匹敵する者なき戦士にして、朕の勝利を獲得せしめ給うネルガル (Nergal) (下界の神) は、

偉大なる彼の力もて、蘆（原）の怒れる焰の如く、彼の臣民を焼き焦し、……」〔loc. cit., p. 344 l. 7~l. 9〕となっている。

後文第26段落の楔形文字原文

³⁵ 
 in kakki su dan-nim li-sa-(ak)-ti su ma
 で 武器 その 強力な 切り落すように、彼を qatū 切り落とす、終りにする

 bi-ni-a-ti su ki-ma ṣa-lam di-di-im
 肉体を 彼の 如く 像 土の binūtu 筋肉、生活

 li-ih-pu-us hapāsu 毀す
 壊すように、
³⁶ 
 nin-tu nin ṣi-ir-tum sa ma-ta-tim
 神ニントウは 女王、 気高い の 国

 ummum ba-ni-ti māram li-te-ir su ma
 母、 私を生んだ 息子として否定するように、彼を
³⁷ 
 su-ma-am a ū2-ṣar-ṣi su
 名を ず、 許さ （彼に）

 i-na qir-bi-it ni-ṣi su zēr a-wi-lu-tim a ib-ni zēru < numun
 に の中 人民 彼の 種を 人間の な、 生む

後文第26段落の試訳

……その強力な武器でその者（の生涯を終焉させ……）を切り（殺して）裂いてしまうように。その者の肉体を土の像のように打ち砕いてしま

うように。

国家の気高い女王、余を生みたもうた母（神）たる存在のニントゥ女神は、その者を息子として否定してしまうように。その者に名称（立派な名を名乗ること）を許さず、その者の人民の中に人間の種を生まさぬように……。

後文第26段落の解釈

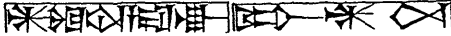
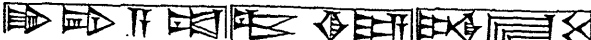


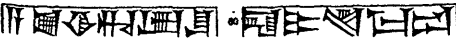


この段落の上から3行目までは、前の第25段落の楔形文字によるアッカド語の文章から続いているネルガル神に対する讃歌であるが、楔形文字第4行目からは、母神としてのイシュタル神であるニントゥ神の讃歌が始まるのである。なぜ母神としてのイシュタルが別の名で呼ばれ、イシュタル神の讃歌とは別の箇所が登場するのかという疑問は、おそらくシュメール時代のイナンナがバビロニアに入りイシュタルと変っただけでなく、古代バビロニア固有の女神等がシュメールの神格と合体化して、新たな創造神話を形成した結果と思われる。

この筆者が第26段落とした箇所を中田一郎氏の訳文では「その強力な武器でもって彼を……するように。彼の肢体を粘土の像のように打ち砕いてくれるように。

ニントゥ、諸国の高貴なる女主人。私を生んだ母親が、彼から息子を奪い取ってくれるように。彼が名（子供）を得ることがないように。人々の間で彼が人の子孫をつくることがないように。……」〔loc. cit., p.76 l. 24～p. 77 l. 2〕と、かなり解釈の幅を広げ、「名称を許さず」というところも「子供を得ることがないように」など現代にも通ずる表現で訳しておられる。そしてニントゥのところで新たな讃歌が始まるよう段落をここで分離しているので、讃歌の文章としては読み易い。その翻訳に先んじること数十年ローマ法学者であったところの原田慶吉氏の訳文は「……彼の

精鋭なる武器もて彼を引裂きて、彼の肢体を粘土の像の如く粉碎し給え。
 国々の崇高なる女公にして、朕の産み創り親たり給うニントウ（Nintu）
 （母神としてのイシュタル）は、相続人を彼より奪い取りて、名を〔継ぐ
 者を〕彼に得せしめ給わず、彼の臣民の中にありて、人間の胤を産み創り
 給わざれ。……」〔loc. cit., p. 344 l. 9~l. 12〕という文章を掲載してお
 られる。

後文第27段落の楔形文字原文

50 
 i¹ nin-kar-ra-ak mārāt an-nin māratu < dumu-mi²
 神ニンカルラが 娘 アンノ

 qa²-bi-a-at dum-ki ia i-na e²-kur
 （所の）告げる 好意を 我が で エクール神殿
 55 
 mur-ša-am kab-tam ašakkam li-im-nam ašakk < a²-sag³ 悪鬼、病気
 疾病、 重い 病気、 悪い

 šī-im-ma-am mār-ša-am sa la i-pa-aš-se-hu pašahu 驚される
 怪我等を、重大な 所の ず 快癒せ

 a-su qiz-ri-ib su la i-lam-ma-du lamādu 知る
 医者 が 原因を その ず 診断でき （又）

 i-na šī-im-di la u²-na-ah-hu su nāhu 静める、癒する
 でも 包帯 ない 軽減でき それを

 ki-ma ni-si-iq mu-tim la in-na-za-hu nasāhu 切り落す、根こぎにする
 の如く 噛みつき 死の ない 除去でき



i-na bi-ni-a-ti su li-sa-ši-a-as sum ma ašū 出かける、逃げる

から 肉体 彼の 発病させて、 彼に



a-di na-pi-iš-ta su i-bi-el-lu-u₂ balū 破壊する

までは 人生を 彼の 終える



a-na ed-lu-ti su li-id-dam-ma am damānu 悲しむ

に対し 活力 彼の 悲しむように、

後文第27段落の試訳

エクル神殿で我が好意を語る所のアン（ヌ）神の令嬢、ニンカルラ（ク女）神よ、重い疾病、悪い熱を出させる病氣、（さらに）快癒せず、医者もその原因を診断することが出来ず、包帯でもそれを軽減できず、死に神の一噛みのように取り除けないところの重傷を、その者の肉体に発病させて、人生を終えるまで、その者の（性性能）力を悲しませて（その人生を）終らせるように。

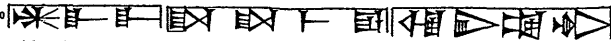


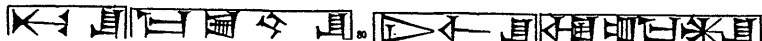
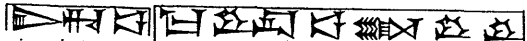


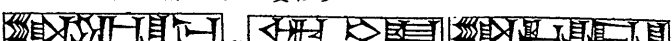
後文第27段落の解釈

この段落の最初に楔形文字で記されたニンカルラ（ク）という女神は、古代インドのリグ・ヴェーダ讃歌で称えられるマルート神のように南風を司るエンリルの息子で嵐の神と戦神として知られるニヌルタ神の妃となり、こちらのほうはギリシア神話のヒポクラテスを女にしたようなセム系の医学の女神としてかなり昔から知られていた。中田一郎氏は、相変らずこのニンカルラク女医神の名を冒頭に掲げ、バビロニアの敵の負った傷が治癒されることなく終るという祈りの形でこの讃歌をまとめておられる。それでは中田一郎氏の訳はといえば「ニンカルラク、アヌムの娘、エクル

にあつて私に良きことをお命じになる方が、重い病、ひどい熱病、治ることがなく、医者もその原因を知らず、包帯をしても鎮めることができず、治ることがない死の一噛みのような悪性の皮膚病を、彼の体に吹き出させてくれるように。(そして) 彼が命の絶えるまで彼の人々に嘆き続けるように。」〔loc. cit., p. 77 l. 4〜l. 8〕となっており、それにかなり先行する原田慶吉氏の訳文は「アヌの娘にして、朕の幸福をエークルにおいて宣し給うニンカラク (Ninkarrak) (ニヌルタの妃、医術の神) は、癒ゆることなく、医師もその性を知らず、包帯をもつてするも、これを鎮静することなく、死の咬み付きの如く取り払われざる重き痛、悪性の熱 (?)、痛み傷を、彼の肢体より彼に発せしめ給いて、彼の生命が消ゆるまで、彼の男性力〔の喪失〕に対して、〔彼は〕悩み悲めかし。」〔loc. cit., p. 344 l. 12〜l. 15〕と訳しておられる。なお、原田氏はこの筆者が第27段落に区分した第3行目と第4行目について〔註〕をつけ〔qq. v.〕ておられ「……重き痛、悪性の熱 (?)、痛み傷を……」と翻訳したところをパイザー (Peiser) 氏の訳を参考にした、という形で「三者のそれぞれの厳格な意義および相互の関係は必らずしも明らかではないが、第一は一般的概念、第二は内部の病、第三は外部の病と考えられる」〔ibid.,〕と記述しておられる。中田一郎氏はそれに対して、原田氏が第三の病とした後の部分を皮膚病に関する修飾語句とみて、この解釈に引用した以上のような訳文を掲載しているものと思われる。

この段落の最後にある、ハンムラピ王に敵対する者がかかわる病気が中田一郎氏の解釈する皮膚病なのか、あるいは原田慶吉氏が解釈した痛み傷から派生する男性力の喪失すなわちインポテンツなのか、正確に解釈することなど出来ないだろうが、このあたりのアッカド語の翻訳と解釈はその時代によって、かなり変わってきていると言えるだろう。

後文第28段落の楔形文字原文

- 70 
 ilāni rabūti ša ša-me-e u₃ ir-ši-tim
 神々や 偉大なる の 天 と 地
- 
 i¹ a-nun-na i-na šu-nigin₂ šu-nu isteniš < su-nigin₂
 神々アヌンナキは で 会合 彼らの
- 75 
 še-it bi-tim libit e₂-babbar-ra šu-a-ti e₂-babbar-ra < e₂-babbar-ak
 壁、神殿の 煉瓦、エバツパール神殿の この エバツパール神殿の
- 
 zēr su ma-zu šāb su ni-si su u₃ um-ma-an su
 種、彼の 彼の国、人 彼の、人民、 彼の と 軍等を 彼の
- 
 ir-ri-tam ma-ru-uš-tam li-ru-ru
 呪いで 破壊的な 呪うように、
- 
 ir-ri-tim da-ni-a-tim i¹ en-lil₂
 呪いで 強力な 神エンリルよ
- 
 i-na pī šu ša la ut-ta-ak-ka-ru nakāru 異なる、敵意ある
 で 声 彼の 所の ない 変わら
- 
 li-ru-ur šu ma ar-hi-iš li-ik-su-da su kašādu 手が届く、打ち負かす
 呪うように、そして 急いで 圧倒するように、彼を

後文第28段落の試訳

天と地の（存在する）偉大なる神々、集会（を催）している（八百^ヤ万^{オヨロズ}の）アヌンナキ神群達よ、神殿の（煉瓦）壁、このエーバツパール神殿の煉瓦、その者の種族（民族）、その者の国家、その者（支配者に所属する）人々（民衆）、人民と軍隊とを破壊的な呪い（偈頌）をもって呪うように。変わることをない命令で、エンリル神が、強力な呪いで呪われるよう

に、そして至急にその者を捕縛せしむる（圧倒する）ように。

後文第28段落の解釈

この段落をもってハンムラピ法典の石碑に書かれている楔形文字の全体（裏面のすべて28段にわたる楔形文字）が終るわけであるが、ハンムラピ法典は、その楔形文字の文章が始まる上部のレリーフに、それ全体を支配する当時の古代バビロニア社会における国家体系の神格として崇められる司法神であるとともに太陽神でもあるシャマシュ神とそのバビロニア王国の第六代国王ハンムラピとの象徴図像が浮き彫りにされ、その司法神シャマシュの椅子後脚の下から始まる前文が先ず神々への讃歌（その下5段落の中程まで）そして282ヶ条の条文と裏側の下段に至って、この最後の後文が書かれ、それをもって法文の全体が終了するのである。

前文（プロローグ）も歴史的なシュメールの天神アヌ（𒀭）とそこから派生した諸々の神々の総称であるアヌの派生形アヌンナキ（複数形）神群から始まるのであるが、後文も同様にその最後の段落で八百万の神アヌンナキ神群が登場し、そのシュメール時代から続く万神殿パンテオンの指導的な神「大気的主人」エンリル神への讃歌の祈り、そしてこのハンムラピ法典とバビロニアに敵対する者（古代バビロニアの敵対諸国の領主）への呪いをもって全体が終るようになっている。

それでは後文（エピローグ）の終りの方でとってきた他の段落と同様に、中田一郎氏の訳と30年近く前になるが原田慶吉氏の出した翻訳とを歴史的に比較・検討することで、楔形文字で刻まれたハンムラピ法典のアカド語文章を終了することにしたい。それでは中田一郎氏の訳文を見てみると、「天地の偉大なる神々、アヌンナック諸神全員、家の守護神、エバツバルの煉瓦が、彼と、彼の種、彼の国、彼の軍隊、彼の人民と彼の兵士たちを残酷な呪いで呪ってくれるように。エンリルが、変更されることの

ない彼の命令で、彼にそれらの呪いをかけ、それらが速やかに彼を捕えるように。」〔loc. cit., p. 77 l. 10～l. 14 終了まで〕という文でその翻訳のすべてが終っている。そして日本で最初に後文まで続けて翻訳した原田慶吉氏の訳としては「……天と地の偉大なる神々、その全体における（全部の）アヌンナキ、神殿の守護神、エーバブバルの煉瓦壁は、彼、彼の胤、彼の国彼の人、彼の臣民と彼の軍隊に、不吉の呪を呪い給え。声高らかなる（？）呪をば、エルリルは、変更すべからざる彼の言もて、彼を呪いて、急ぎ彼を捕え給え。」〔loc. cit., p. 344 l. 15～l. 17 最終まで〕という文章で、この長い楔形文字のアッカド語全体を締め括っているのである。

このハンムラビ法典の中で呪っている、バビロニア第一王朝に敵対する国家は、先ずバビロニアの東方エラムとエシュムンナで、バビロニア第一王朝の第六代国王として B.C.1792年に即位したハンムラビ大王は、セム系の民族アモリ（アムル）人であるスムアブム（在位1894～B.C.1881）が創始して以来の課題であった領土拡張の第一歩をなし遂げた。次いで南方のラルサ国を滅ぼし、更にそれに続けて地理的な時計周りに西方の強大国マリとも戦って勝利し、メソポタミアにおける強大な版図を獲得したのである。しかしながら遂に北方に位置していたシャムシアダド治下のアッシリアを支配することは出来ず、ハンムラビ国王の没後、その王国を継承したサムスイルナの代には、カッシート人等の外来民族の侵入に悩まされた。

バビロニア王国は、その後このザグロス山脈出身の好戦的な山岳民族カッシート人とペルシア湾岸に立てられた「海の王国」とが二分して抗争したが、カッシート人が他を制圧して、バビロンを首都として「カッシート王朝」を開き、約400年間、36人の国王によって統治された、と伝えられている。